

京都府遺跡調査報告集

第141冊

1. 大谷口遺跡第5次
2. 藏垣内遺跡第12次
3. 長岡京跡右京第968次

2010

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



調査地全景合成写真(上が北西)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成20年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した蔵垣内遺跡、平成21年度に京都府農林水産部の依頼を受けて実施した大谷口遺跡、平成21年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した長岡京跡右京第968次の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された京都府建設交通部と京都府農林水産部をはじめ、京都府教育委員会・南丹市教育委員会・亀岡市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

大谷口遺跡第5次

蔵垣内遺跡第12次

長岡京跡右京第968次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	大谷口遺跡第5次	南丹市八木町諸畑大谷口	平成21.5.18.～平成21.10.7	京都府農林水産部	高野陽子・田代弘
2.	蔵垣内遺跡第12次	亀岡市千歳町国分正田・内垣内・西垣内・藪ノ本	平20.11.4～平21.2.24	京都府建設交通部	筒井崇史・田代弘
3.	長岡京跡右京第968次	長岡京市調子2丁目	平21.4.8～平21.11.27	京都府建設交通部	森島康雄

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 大谷口遺跡第5次発掘調査報告	1
2. 蔵垣内遺跡第12次発掘調査報告	41
3. 長岡京跡右京第968次発掘調査報告	61

挿図目次

1. 大谷口遺跡第5次

第1図	調査地および周辺遺跡分布図	1
第2図	調査地位置図	2
第3図	北部調査区配置図	3
第4図	1区平面図	4
第5図	1区土層断面図	5
第6図	土壌S K102・103実測図	6
第7図	竪穴式住居跡S H101実測図	7
第8図	掘立柱建物跡S B104・106、柱列S A105実測図	8
第9図	2区平面図	9
第10図	2区土層断面図	10
第11図	土坑S K222、土坑S K203・206・208実測図	11
第12図	竪穴式住居跡S H201・204、掘立柱建物跡S B205・209実測図	12
第13図	南部調査区配置図	13
第14図	3区土層断面図	14
第15図	3区平面図	15
第16図	竪穴式住居跡S H316、柱列S A315、土壌S K312、土坑314、流路S R303実測図	16
第17図	竪穴式住居跡S H301、土坑S K302実測図	17
第18図	4区土層断面図	18
第19図	4区平面図	19
第20図	土坑S K404、掘立柱建物跡S B403実測図	20
第21図	竪穴式住居跡S H402、炉跡S X407、落ち込みS X410実測図	21
第22図	掘立柱建物跡S H401、溝S D405実測図	22
第23図	5・6区平面図	23
第24図	5・6区土層断面図	24

第25図	竪穴式住居跡 S H504、落ち込み S X505、土坑 S K502、柱穴 S P506実測図	25
第26図	竪穴式住居跡 S H603、土坑 S K604・607実測図	26
第27図	7区平面図	27
第28図	7区土層断面図	27
第29図	竪穴式住居跡 S H701、土坑 S K703、落ち込み S X705実測図	28
第30図	掘立柱建物跡 S B702、集石 S X704実測図	28
第31図	出土遺物実測図(1)	30
第32図	出土遺物実測図(2)	31
第33図	出土遺物実測図(3)	33
第34図	出土遺物実測図(4)	34
第35図	出土遺物実測図(5)	36
第36図	調査区遺構変遷図	38
第37図	大谷口遺跡・諸畑遺跡調査区位置図	39

2. 蔵垣内遺跡第12次

第1図	調査地位位置図および周辺主要遺跡分布図	41
第2図	調査区配置図	43
第3図	D2・E2・H地区遺構配置図	44
第4図	I地区(南調査区)遺構配置図	45
第5図	I地区(北調査区)遺構配置図	47
第6図	D2地区出土遺物実測図	49
第7図	E2・H地区出土遺物実測図	50
第8図	I地区(南調査区)出土遺物実測図	51
第9図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(1)	53
第10図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(2)	54
第11図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(3)	55
第12図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(4)	56
第13図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(5)	57
第14図	I地区(北調査区)出土遺物実測図(6)	58
第15図	鉄製品・石器実測図	59

3. 長岡京跡右京第968次

第1図	調査地位位置図	61
第2図	調子地区調査区配置図	62
第3図	右京第968次調査地区割図	63

第4図	c2-1地区東壁断面図	64
第5図	c2-1・c3-2地区南壁断面図	65
第6図	北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(近世)	66
第7図	c2-1地区土坑S K23断面図	67
第8図	c2-1地区土坑S K28断面図	67
第9図	c2-1地区溝S D20断面図	67
第10図	c2-1地区溝S D25断面図	67
第11図	c2-1地区溝S D24・29、溝S D26・27断面図	67
第12図	c2-1地区中央東西断面図	68
第13図	北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(古代・中世)	69
第14図	c2-1地区溝S D30平面図	70
第15図	c2-1地区溝S D30断面図	70
第16図	c3-3地区溝S D50断面図	70
第17図	c2-1地区土坑S K34断面図	70
第18図	c3-2地区ピット平面図・断面図	71
第19図	c3-2地区溝S D36断面図	71
第20図	c2-2地区東壁断面図	72
第21図	c2-2・c3-1地区南壁断面図	73
第22図	南部(c2-2・c3-1地区)遺構平面図	74
第23図	c2-2・c3-1地区溝S D15断面図	74
第24図	c2-2地区溝S D16断面図	74
第25図	c2-2地区溝S D20断面図	75
第26図	c3-1地区落ち込みS X37遺物出土状況図	75
第27図	c3-1地区流路S D36、落ち込みS X37断面図	76
第28図	流路S D36出土遺物実測図(1)	78
第29図	流路S D36出土遺物実測図(2)	79
第30図	流路S D36出土遺物実測図(3)	80
第31図	落ち込みS X37出土遺物実測図(1)	81
第32図	落ち込みS X37出土遺物実測図(2)	82
第33図	落ち込みS X37出土遺物実測図(3)	83
第34図	落ち込みS X37出土遺物実測図(4)	84
第35図	落ち込みS X37出土遺物実測図(5)	85
第36図	溝S D16・30・50・55、包含層出土遺物実測図	86
第37図	金属製品実測図	86
第38図	銭貨実測図	87

第39図	石製品実測図	87
第40図	軒瓦実測図	88
第41図	丸瓦・平瓦実測図	89
第42図	遺構変遷図	90

図版目次

1. 大谷口遺跡第5次

- 図版第1 大谷口遺跡近景<右後方に池上遺跡> (北西から)
- 図版第2 (1)大谷口遺跡遠景<左後方に室橋遺跡>(東から)
(2)大谷口遺跡遠景<右後方に諸畑遺跡>(西から)
- 図版第3 (1)大谷口遺跡全景(南から)
(2)1・2区近景(西から)
- 図版第4 (1)1区全景(上が北西)
(2)1区全景(南西から)
- 図版第5 (1)1・2区調査前全景(南から)
(2)土壇SK102(北西から)
(3)土壇SK103(東から)
- 図版第6 (1)竪穴式住居跡SH101(南東から)
(2)竪穴式住居跡SH101竈(南東から)
- 図版第7 (1)竪穴式住居跡SH101竈前庭遺物出土状況(南東から)
(2)竪穴式住居跡SH101遺物出土状況(上が北西)
(3)竪穴式住居跡SH101竈断ち割り(南から)
- 図版第8 (1)1区東部全景(北西から)
(2)掘立柱建物跡SH104(北西から)
(3)1区南壁土層断面(西から)
- 図版第9 (1)2区全景(南西から)
(2)2区全景(北西から)
- 図版第10 (1)土坑SK203(北西から)
(2)土坑SK203遺物出土状況(南から)
(3)土坑SK222遺物出土状況(南から)
- 図版第11 (1)土坑SK206(南から)
(2)土坑SK206遺物出土状況(上が北西)
(3)竪穴式住居跡SH201(南から)

- 図版第12 (1) 掘立柱建物跡 S B209(南から)
 (2) 2区南部柱穴群検出状況(北西から)
 (3) 2区北壁土層断面(南西から)
- 図版第13 (1) 3・4区全景<後方に官山川・諸畑遺跡>(西から)
 (2) 3区全景(上が北東)
- 図版第14 (1) 3区全景<下層遺構面>(北西から)
 (2) 3区南部遺構検出状況(北から)
 (3) 竪穴式住居跡 S H316(西から)
- 図版第15 (1) 柱列 S A315(南東から)
 (2) 土壁 S K312(南東から)
 (3) 土坑 S K302(南東から)
- 図版第16 (1) 3区東壁南部土層断面(西から)
 (2) 土坑 S K314(南西から)
 (3) 3区全景<上層遺構面>(北西から)
- 図版第17 (1) 竪穴式住居跡 S H301(北東から)
 (2) 竪穴式住居跡 S H301遺物出土状況(北西から)
 (3) 竪穴式住居跡 S H301台石出土状況(南西から)
- 図版第18 (1) 4区全景(上が北東)
 (2) 4区全景(南東から)
- 図版第19 (1) 土坑 S K404(東から)
 (2) 掘立柱建物跡 S B403(南西から)
 (3) 掘立柱建物跡 S B403柱穴 P7(北西から)
- 図版第20 (1) 竪穴式住居跡 S B402(西から)
 (2) 竪穴式住居跡 S B402竈(西から)
 (3) 炉跡 S X407<南部拡張前>(北西から)
- 図版第21 (1) 炉跡 S X407、落ち込み S X410(北東から)
 (2) 炉跡 S X407(北西から)
 (3) 炉跡 S X407断ち割り(北東から)
- 図版第22 (1) 炉跡 S X407、落ち込み S X410(南東から)
 (2) 落ち込み S X410遺物出土状況(北東から)
 (3) 掘立柱建物跡 S B401(北東から)
- 図版第23 (1) 5・6区調査前全景(南から)
 (2) 5区全景(北西から)
 (3) 5区南部遺構検出状況(北西から)
- 図版第24 (1) 竪穴式住居跡 S H504(南東から)

- (2) 柱穴 S P 506 遺物出土状況(東から)
 (3) 落ち込み S X 505(北西から)
- 図版第25 (1) 6・7区近景(南東から)
 (2) 6区全景(上が南西)
- 図版第26 (1) 6区南部遺構検出状況土層断面(南東から)
 (2) 竪穴式住居跡 S H 603(北東から)
 (3) 竪穴式住居跡 S H 603 遺物出土状況(北東から)
- 図版第27 (1) 土坑 S K 607(上が北東)
 (2) 5区東壁土層断面(南西から)
 (3) 6区西壁土層断面(北東から)
- 図版第28 (1) 7区全景(上が北東)
 (2) 7区全景(南東から)
- 図版第29 (1) 土坑 S K 703(南西から)
 (2) 土坑 S K 703 遺物出土状況(上が北西)
 (3) 竪穴式住居跡 S H 701(北西から)
- 図版第30 (1) 7区東壁土層断面(南西から)
 (2) 集石遺構 S X 704(南西から)
 (3) 作業風景<1区>(北東から)
- 図版第31 出土遺物 1
- 図版第32 (1) 出土遺物 2
 (2) 出土遺物 3
- 図版第33 (1) 出土遺物 4
 (2) 出土遺物 5
- 図版第34 出土遺物 6

2. 蔵垣内遺跡第12次

- 図版第1 (1) D 2・E 2地区全景(南から)
 (2) D 2・E 2地区全景(東から)
 (3) D 2地区全景(北西から)
- 図版第2 (1) D 2地区柱穴 S P 115 遺物出土状況(北西から)
 (2) E 2地区全景(南から)
 (3) E 2地区遺物出土状況(東から)
- 図版第3 (1) H地区全景(北から)
 (2) H地区土坑 S K 01 全景(東から)
 (3) H地区土坑 S K 22 全景(北から)

- 図版第4 (1) I地区全景(南から)
 (2) I地区(南調査区)南半全景(北から)
 (3) I地区(南調査区)北半全景(南から)
- 図版第5 (1) I地区(北調査区)全景(南西から)
 (2) I地区(北調査区)北部柱穴群検出状況(北東から)
 (3) I地区(北調査区)土坑S K74検出状況(西から)
- 図版第6 (1) I地区(北調査区)土器溜まりA群全景(西から)
 (2) I地区(北調査区)土器溜まりB群全景(西から)
 (3) I地区(北調査区)土器溜まりC群全景(西から)
- 図版第7 (1) I地区(北調査区)土器溜まりD群全景(南東から)
 (2) I地区(北調査区)土器溜まりE群全景(東から)
 (3) I地区(北調査区)土器溜まりC～F群全景(東から)
- 図版第8 出土遺物 1
- 図版第9 (1) 出土遺物 2
 (2) 出土遺物 3
- 図版第10 (1) 出土遺物 4
 (2) 出土遺物 5

3. 長岡京跡右京第968次

- 図版第1 (1) 調査前状況(北から)
 (2) c2-1地区第1遺構面全景(上が北東)
 (3) c2-1地区第1遺構面全景(南東から)
- 図版第2 (1) c2-1地区第1遺構面S D20全景(南東から)
 (2) c2-1地区第1遺構面S D20畦(南から)
 (3) c2-1地区東壁S D20断面(西から)
- 図版第3 (1) c2-1地区第1遺構面S D25断面(南東から)
 (2) c2-1地区第2遺構面全景(南東から)
 (3) c2-1地区第2遺構面S D30全景(北から)
- 図版第4 (1) c2-1地区第2遺構面S D30護岸杭近景(南から)
 (2) c2-1地区第2遺構面S D30断面(北西から)
 (3) c2-1地区第2遺構面S K34全景(南東から)
- 図版第5 (1) c3-2地区第1遺構面全景(上が北東)
 (2) c3-2地区第1遺構面全景(南東から)
 (3) c3-2地区第1遺構面北部全景(南東から)
- 図版第6 (1) c3-2地区南壁(北西から)

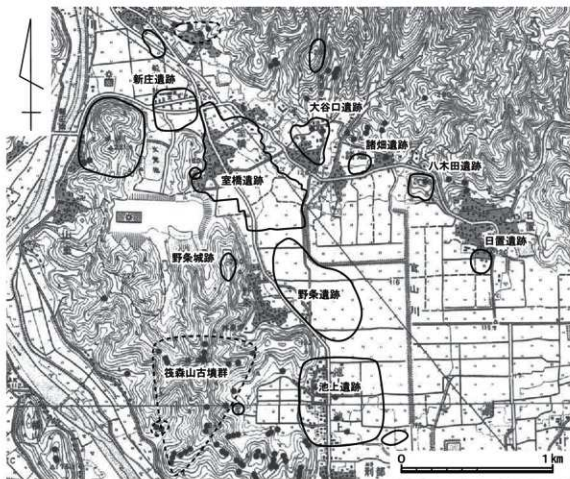
- (2)c3-2地区第1遺構面S P 54断面(北西から)
 (3)c3-2地区第1遺構面S P 57断面(北西から)
- 図版第7 (1)c3-2地区第2遺構面北部全景(南東から)
 (2)c3-2地区第2遺構面南部全景(北西から)
 (3)c3-2地区第2遺構面南部全景(南東から)
- 図版第8 (1)c3-2地区S D 36全景(北西から)
 (2)c3-2地区S D 36断面(北西から)
 (3)c3-2地区S D 36断面(南東から)
- 図版第9 (1)c3-3地区第1遺構面全景(上が北東)
 (2)c3-3地区第2遺構面全景(南東から)
 (3)c3-3地区第2遺構面S D 50断面(北東から)
- 図版第10 (1)c2-2地区全景(上が北東)
 (2)c2-2地区全景(南東から)
 (3)c2-2地区S D 20断面(南東から)
- 図版第11 (1)c2-2地区S D 15全景(北西から)
 (2)c3-1地区全景(上が北東)
 (3)c3-1地区S D 36断面(南東から)
- 図版第12 (1)c3-1地区S D 36断面(南東から)
 (2)c3-1地区S X 37遺物出土状況(北から)
 (3)c3-1地区S X 37遺物出土状況(東から)
- 図版第13 (1)出土遺物 1 (2)出土遺物 2
- 図版第14 (1)出土遺物 3 (2)出土遺物 4
- 図版第15 (1)出土遺物 5 (2)出土遺物 6
- 図版第16 (1)出土遺物 7 (2)出土遺物 8
- 図版第17 (1)出土遺物 9 (2)出土遺物 10
- 図版第18 (1)出土遺物 11 (2)出土遺物 12
- 図版第19 出土遺物 13
- 図版第20 (1)出土遺物 14 (2)出土遺物 15

1.大谷口遺跡第5次発掘調査報告

1. はじめに

大谷口遺跡は、南丹市八木町諸畑大谷口に所在する縄文時代から中世に至る複合集落遺跡である。平成16年度に八木町教育委員会(現南丹市教育委員会)が大谷口古墳群として範囲確認調査を行い、新たに周知された遺跡である。南丹市諸畑・室橋・野条・池上地区では、平成13年度から京都府農林水産部により、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」のほ場整備事業が進められており、今回の調査は同事業の一環で実施したものである。

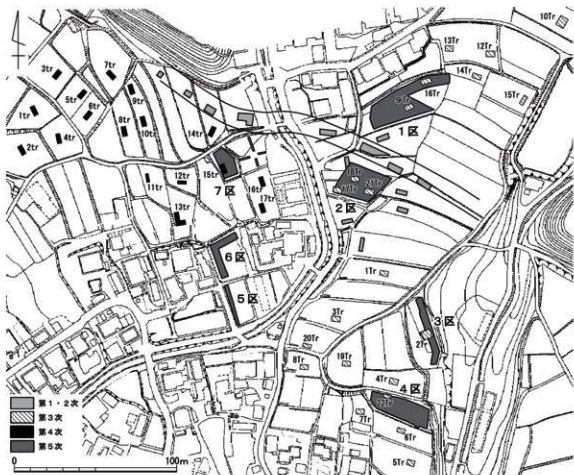
大谷口遺跡は大堰川(桂川)の左岸地域にあり、亀岡盆地北端に位置する。当遺跡は、諸木山(標高496.9m)の裾部の緩やかな傾斜地に形成された遺跡であり、周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が稠密に分布する。弥生時代の集落は、大谷口遺跡の南方に、池上遺跡や野条遺跡が分布するが、前者は弥生時代中期における亀岡盆地の拠点集落であり、後者では弥生時代後期後



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 殿田・亀岡)

葉の焼失住居などが検出されている。また室橋遺跡では、弥生時代と推定される大規模な溝が検出されている。遺跡の東側には、天井川を形成し小尾根状を呈している官山川を挟み、諸畑遺跡が立地する。諸畑遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居跡や、古墳時代中期の近畿地方でも最古段階の造り付け竈をもつ住居跡が検出されている。歴史時代の遺跡としては、野条遺跡と室橋遺跡で、奈良～平安時代の灌漑用水路とみられる溝群が検出され、周辺の広い範囲で耕地開発が行われたことが判明している。前者では平安時代後期の条里型地割に沿う建物跡群が検出され、後者では奈良時代～平安時代前期にかけての大形建物群が検出されている。また、当遺跡の北側の谷奥に立地する清源寺は、11世紀後半の建立とされ、江戸時代後期の木喰上人による十六羅漢像をもつ曹洞宗の寺である。

大谷口遺跡では、過去4次にわたる調査が実施された(第2図)。第1次調査は、平成16年度に八木町教育委員会が大谷口古墳群(7基)の1・2号墳の調査を行ったものである。1号墳の調査では古墳の兆候は確認されず、中世遺構を検出し、また2号墳については、墳丘状の高まり周辺でのトレンチ調査により、縄文時代後期の遺構や遺物が検出された。第2次調査は、平成18年度に市道建設に伴って南丹市教育委員会の調査によって実施された。古墳時代前期とされる溝や、古墳時代中期の竪穴式住居跡、平安時代～鎌倉時代の溝や土坑、柱穴等が確認された。平成20年



第2図 調査地位位置図

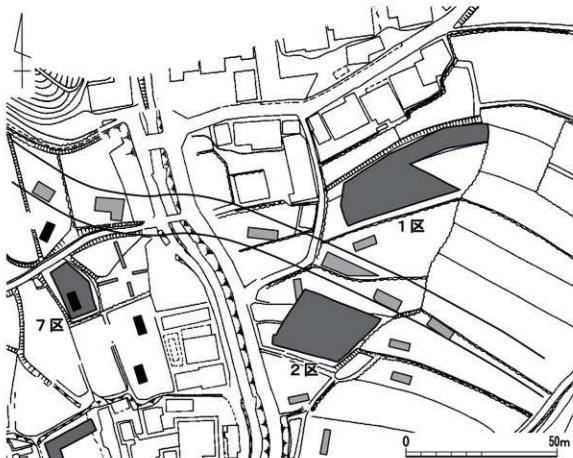
度の第3・4次調査は、東部事業地を南丹市教育委員会が担当し(第3次調査)、西部事業地を京都府教育委員会が担当して(第4次調査)実施されたものである。第3次調査の北半部では、奈良～平安時代後期の柱穴等が検出され、南半部では古墳時代の溝が検出された。また第4次調査でも、中世とされる柱穴群が確認されている。

今回報告する第5次調査は、第3次調査、第4次調査の成果を受けて、平成21年度事業として計画されたものである。現地調査は、平成21年5月18日～10月7日の期間をあて、2,000㎡の調査を実施した。発掘調査は、当調査研究センター調査第2課長肥後弘幸、調査第2課主幹第3係長事務取扱石井清司、同次席総括調査員田代弘、同調査員高野陽子が担当した。本報告書は、2章を田代と高野が、3章の石器を田代が執筆し、他を高野がまとめた。本報告に使用した座標は日本測地系(旧座標)による。調査に際しては、南丹市教育委員会、京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。⁽¹⁸⁾なお、今回の調査にかかる経費は、全額京都府農林水産部が負担した。

2. 調査内容

1) 1区の調査(第4図)

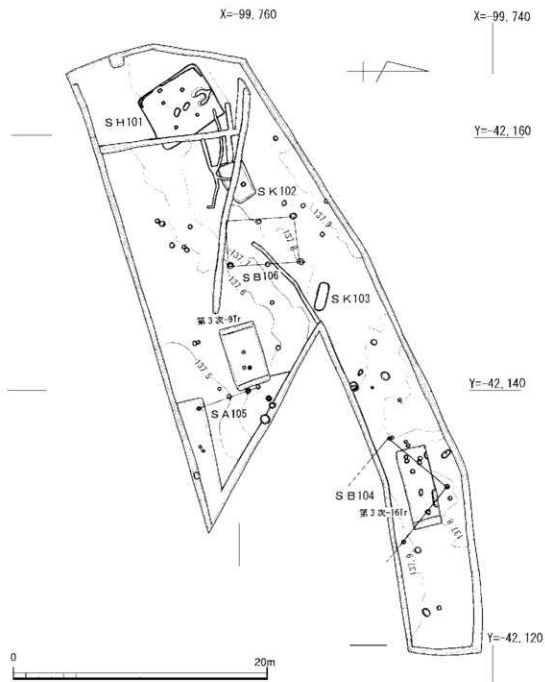
1区は、南丹市教育委員会の試掘成果(第3次調査9・16トレンチ)を受け、大谷口遺跡北東部



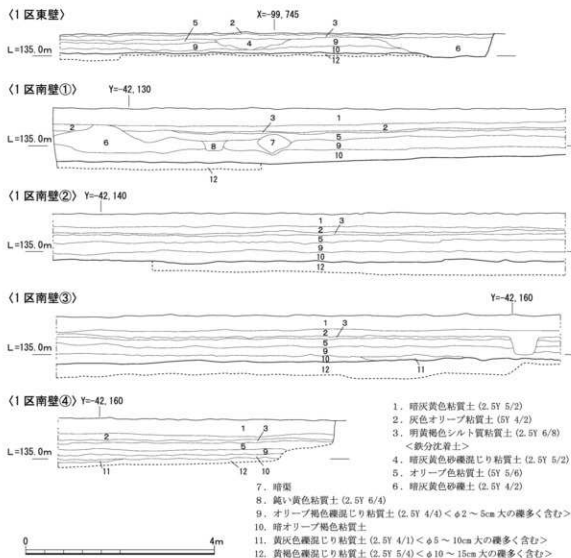
第3図 北部調査区配置図

に設定した。調査前は耕作地であり、旧地形は緩やかな傾斜地であったとみられる。耕作土および床土を重機により除去し、標高約137.8m前後で遺構面を確認した。調査面積は670㎡を測る。主な検出遺構は、弥生時代後期の土壘、古墳時代中期の竪穴式住居跡および平安時代と推定される掘立柱建物跡である。基準層位は、上層から耕作土・床土以下、オリーブ色粘質土、オリーブ褐色礫混じり粘質土、暗オリーブ褐色粘質土の順に堆積する(第5図)。

土壘S K 102(第6図) 調査区西部で検出した方形土壘である。長さ3.4m、幅2.0m、深さ0.25mの規模をもつ。中央部を後世の暗渠によって大きく削平されている。埋土は、上層は小礫を多



第4図 1区平面図

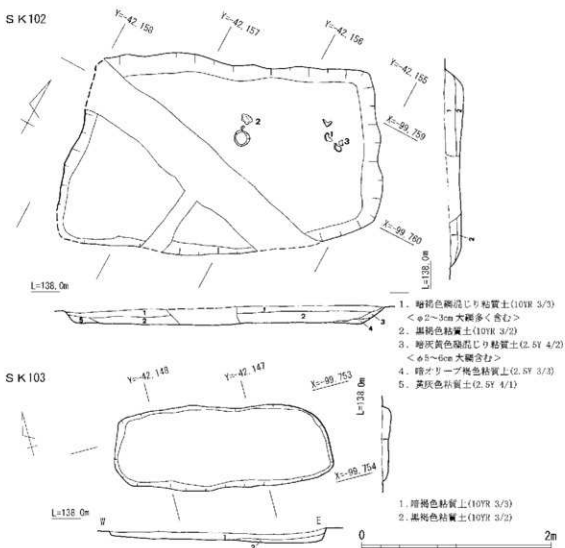


第5図 1区土層断面図

く含む暗褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。出土遺物は、北東側床面と検出面から、弥生時代中期後半の土器片が出土した。掘形の形態から埋葬施設の可能性がある。

土壌 S K 103 (第6図) 調査区中央で検出した長方形の土坑である。規模は、長さ2.3m、幅0.9m、深さ0.15mを測る。上層は大きく削平されているが、掘形の形態から埋葬施設の可能性がある。遺物は出土していないが、S K 102に近接することから、同時期の土壌の可能性がある。

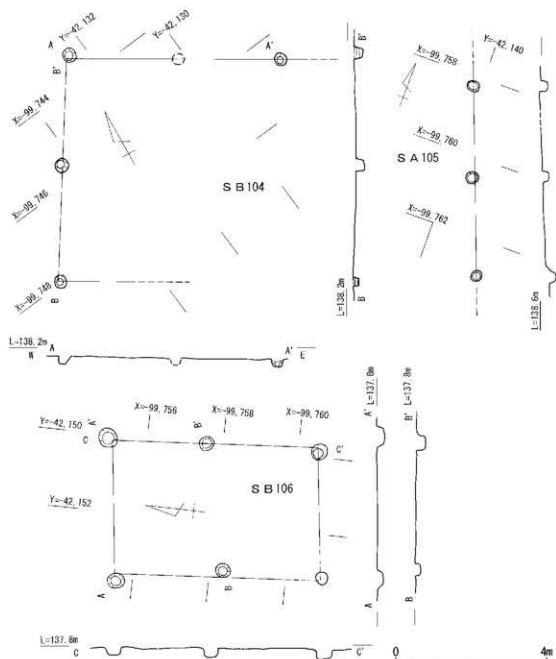
竪穴式住居跡 S H 101 (第7図) 調査区西端で検出した造り付け竈をもつ住居跡である。平面形は方形で、一辺約5.6m×4.8m、深さ0.2mを測る。主柱穴は4基で構成され、柱穴の深さは約0.2mを測る。造り付けの竈を住居の北西辺の壁体中央で検出した。馬蹄形の形状をなし、規模は長さ1.5m、幅1.4mを測る。竈中央南寄りで支石を検出し、その前面に特に強い被熱部の広がりを確認した。また竈壁体の東側袖部で石材を検出した。約25cmの高さをもつ直方体の立石で、焚き口に配された石材とみられる。こうした事例は、南丹市周辺の古墳時代の造り付け竈に類似



第6図 土壘SK102・103実測図

があり、地域的な特色をもつ。西側にはこれに対応する立石は確認できず、抜き取られた可能性がある。竈南側床面上で、焼土・炭化物を含む楕円形状の土坑SK5を検出した。長径0.7m×短径0.35mを測る。竈からの排土を一時的に溜めるための土坑であろう。また西側床面では、住居の壁体中央やや南寄り、壁体から約0.3m離れて、深さ約0.25mの方形の小柱穴(P6)を検出した。梯子などの住居の出入り口部の施設に伴う柱穴の可能性はある。北西と南西の住居壁体の内側に、幅約0.2m、深さ約5cmの周壁溝を部分的に検出した。埋土には5~10cm大の礫を多く含むが、床面は全体に良好な遺存状況にあり、多くの土器が出土した。竈前庭部東側で布留式甕1点が出土したほか、床面各所で土師器高杯・碗、須恵器杯蓋・杯蓋等が出土した。布留式甕は最終段階の資料であり、須恵器との共伴関係を知ることができる良好な資料である。出土した須恵器は、おおよそ陶邑窯TK216~208型式に該当し、時期は5世紀前葉~中頃と推定される。

掘立柱建物跡SB104(第8図) 調査区東部で検出した建物跡である。柱穴の一部は、すでに南丹市教育委員会による第3次調査で検出されていたものである。2間×2間以上の規模をもち、



第8図 掘立柱建物跡S B104・106、柱列S A105実測図

柱間は約28～3.1mを測る。主軸は、N39°Eを測る。柱穴から遺物は出土していないが、周辺精査中に出土した土器から、奈良時代後期～平安時代前期の建物跡の可能性はある。

掘立柱建物跡S B106 (第8図) 調査区中央北で検出した東西方向の主軸をもつ建物跡である。2間×1間以上の規模をもち、柱間は桁行が約2.7～2.9m、梁間は約3.5mを測る。主軸は、N5°Wを測る。柱穴から土器は出土していないが、周辺の野条遺跡などでみられるように、東西方向の主軸をもつことや、柱間の距離から、平安時代後期～鎌倉時代の建物跡の可能性はある。

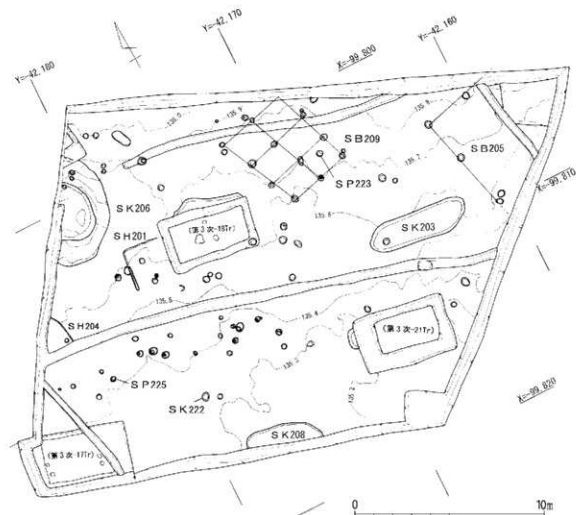
柱列S A105 (第8図) 調査区南東で検出した柱列である。2間以上の規模をもつ。柱穴から

瓦器片が出土し、平安時代後期以降の柱列と推定される。

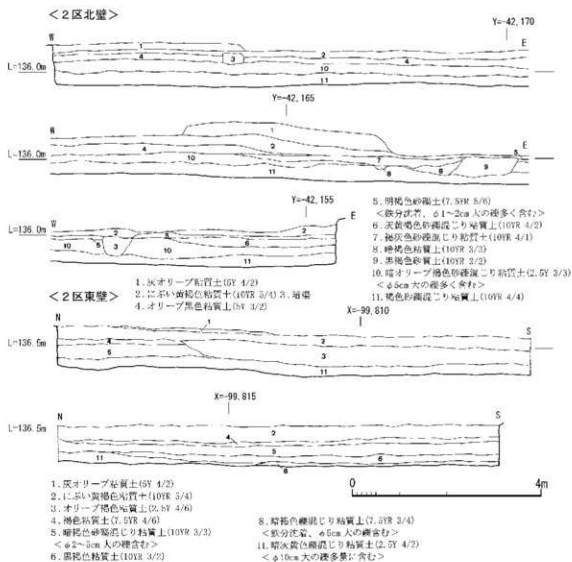
2) 2区の調査(第9図)

1区の南に設定した調査区である。調査前には、傾斜地の3筆の耕作地として利用されていたが、畦畔を除去して一つの調査区とした。南丹市教育委員会による試掘調査では、平安時代後期の柱穴が確認されている。遺構面は北部では標高約136.0m付近で、南部では約135.8m付近で確認した。層序は、耕作土以下に、近世遺物を包含するオリブ黒色粘質土層、中世遺物を包含する暗オリブ褐色砂礫混じり粘質土層が堆積する。調査面積は470㎡を測る。

土坑SK203(第11図) 調査区西部で検出した。不整形円形を呈する落ち込み状の土坑である。規模は長さ約5.5m、幅1.6m、深さ0.15~0.2を測る。西部の埋土から、磨製石斧2点が出土した。2点のうち1点は、刃部の一部が剝離し、もう一点は刃部を折損していた。いずれも基部に敲打痕があり、工具として転用されたものである。他に出土遺物は認められない。2区は谷部の中央付近にあり、現在でも各所で湧水が多くみられることから、水場の周囲に形成された作業土坑であった可能性がある。出土石器から、おおそ弥生時代中期後半の土坑とみられる。



第9図 2区平面図

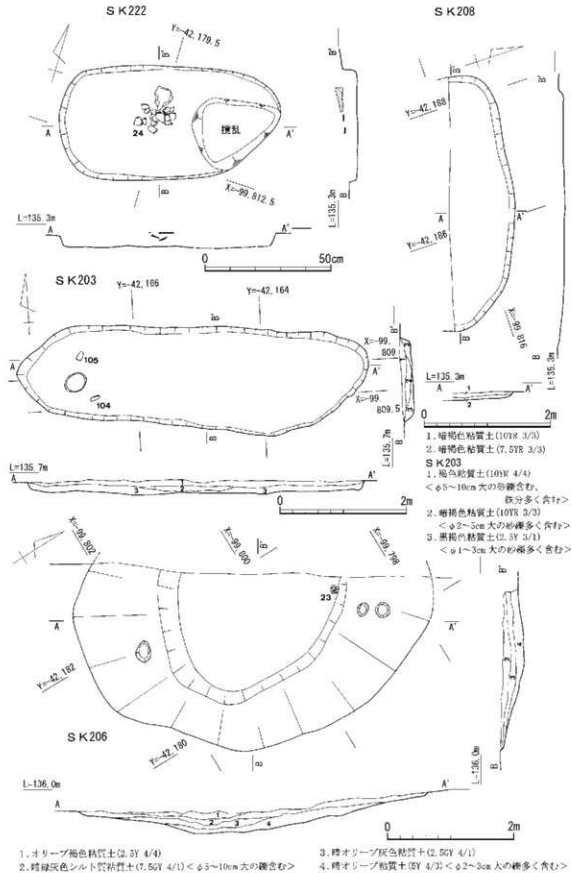


第10図 2区土層断面図

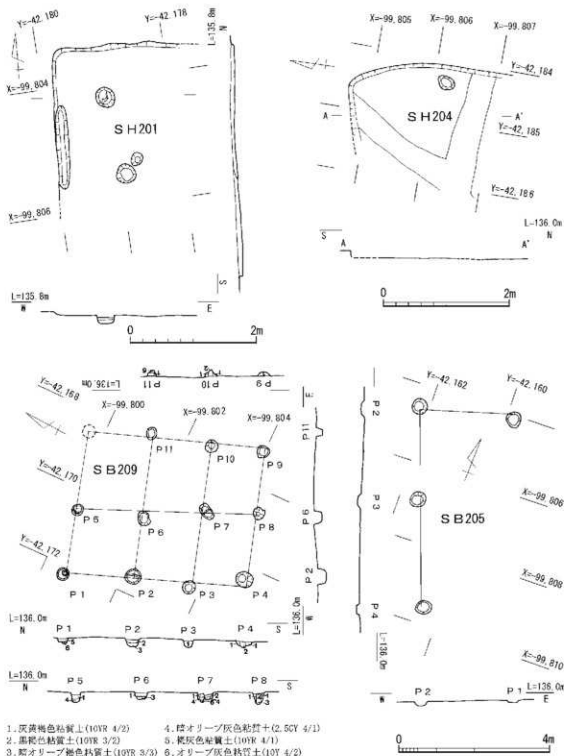
土坑 S K 208 (第11図) 調査区南端で一部を検出した不整形の土坑である。長さ約4.1m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土から弥生土器底部が出土し、時期は中期後半と推定される。

土坑 S K 222 (第11図) 南部で検出した楕円形状の小規模な土坑である。長径約0.85m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。上層は大きく後世の削平を受けているが、弥生土器壺の一部が出土した。出土土器から、弥生時代前期末～中期初頭の土坑と推定される。

土坑 S K 206 (第11図) 調査区西端で部分的に検出した土坑である。平面形は円形をなすとみられる。全体に緩やかに落ち込む楕円状の土坑である。規模は、長さ5.6m、幅2.9m、深さ約0.4mを測る。土坑中央西側の肩部から、弥生土器壺の底部が出土した。土器の直上まで、近世遺物包含層によって大きく削平をうけ、土器上部は遺存していないが、正置されていたとみられる。土坑の埋土には、暗褐色シルト層が堆積し、基底部は湧水点に達している。湧水地点を利用したいわゆる水場遺構と推定され、土器は供献土器の可能性がある。土坑内西壁の暗渠により削平された部分にかかり、壺1点出土している。時期は出土土器から弥生時代中期後半と推定される。



第11図 土坑SK222、土坑SK203・206・208実測図



第12図 竪穴式住居跡SH201・204、掘立柱建物跡SB205・209実測図

竪穴式住居跡SH201(第12図) 調査区中央で検出した建物跡である。床面南辺周辺は耕作によって大きく削平され、北西床面の一部のみを検出した。一辺の残存長約2.5mを測る。柱穴は西側で2基を検出し、4基から構成されるとみられる。床面から土師器瓶、高杯の一部が出土し、古墳時代中期前半の住居跡と推定される。

竪穴式住居跡SH204(第12図) 調査区西端で、住居の北東隅の一部を検出した。一辺の残存長1.8mを測る。柱穴は1基のみを確認した。土師器片が出土し、古墳時代の建物跡と推定される。

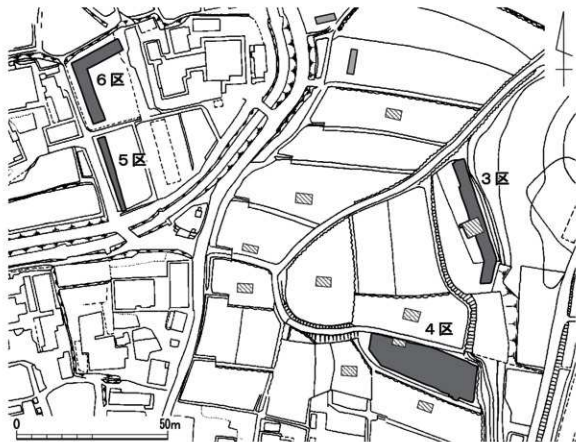
掘立柱建物跡SB205(第12図) 調査区北東隅で一部を検出した。1間×2間以上の建物跡と推定される。柱間は2.5～2.7mを測り、柱穴内から須恵器片が出土した。類似した柱間をもつ建物跡は、野条遺跡でも検出されており、平安時代後期の建物跡と推定される。

掘立柱建物跡SB209(第12図) 北部中央で検出した総柱の建物跡である。規模は、桁行3間(約4.7m)×梁間2間(約3.6m)を測る。柱間は約1.5～1.7mを測る。柱穴から遺物は出土せず、時期は明確にできないが、柱構造や埋土の状況から中世以降の建物跡と推定される。

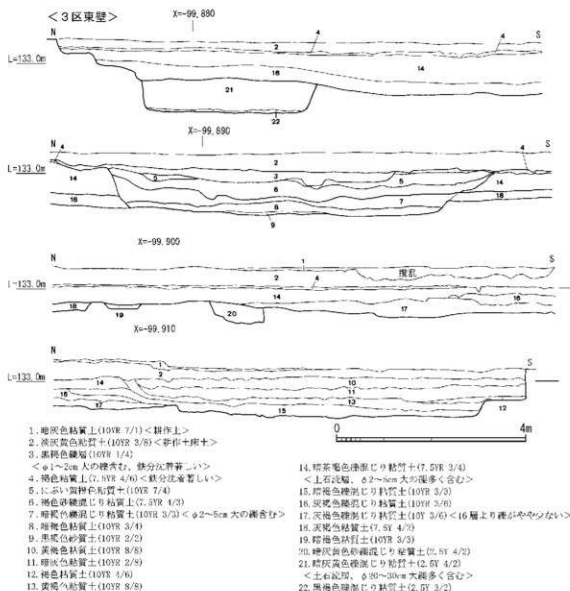
その他の柱穴 調査区北部のSB209周辺で検出した柱穴P223から、弥生時代後期後葉とみられる土器片が出土した。また、南西部でも柱穴群が検出されたが、柱穴は浅く、耕作による削平が著しい。これらのうち柱穴P225からは、平安～鎌倉時代の土師器皿片が出土し、建物跡を復原するには至らないものの、中世の建物跡が構築されていた可能性が高い。

3) 3区の調査(第13・15図)

3区は、遺跡東端の天井川となっている官山川の堤状の高まりに接して設定した調査区である。遺構面は北部では標高約133.0m付近で確認した。層序は、耕作土・床土以下に暗茶褐色粘質土・灰褐色粘質土層が堆積し、北部では132.6mで基盤層を確認した。弥生時代後期中葉の住居床面はこの基盤層に到達している。北端部で基盤層の断ち割り調査を行い、厚さ約1.2mの土石流(暗



第13図 南部調査区配置図



第14図 3区土層断面図

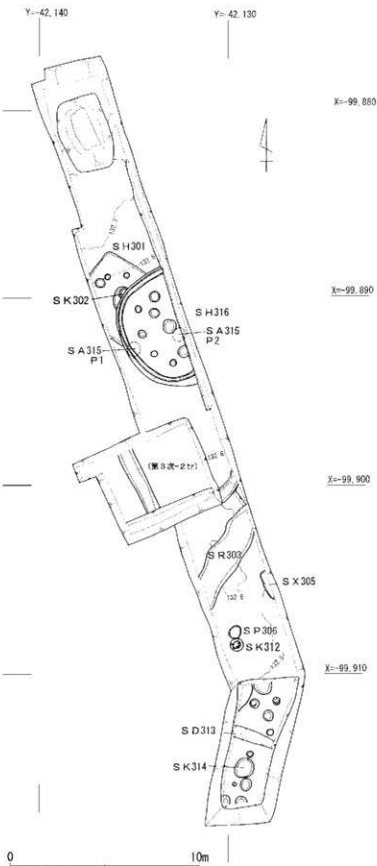
灰黄色礫混じり粘質土の堆積層で形成されていることが判明した。さらにその下層の131.9m付近で、水平堆積層を確認した。縄文時代に形成された層位の可能性があるが、特に遺物等は出土していない。南丹市教育委員会による第3次調査の試掘区(2トレンチ)の一部を取り込み、調査区を設定した。調査面積は160㎡を測る。

竪穴式住居跡 S H316 (第16図) 調査区中央で検出した円形の竪穴式住居跡である。調査区東壁に切られる形で、遺構の約半分を検出した。古墳時代中期の住居(S H301)床面から約0.8m下層で床面を検出した。遺構の規模は、直径約6.4m、検出面からの深さ約0.3mである。南東側の壁体は、斜めに緩やかに立ち上がり、この方向に入口が形成された可能性がある。床面との境界に幅約0.2m、深さ約5cmの周壁溝をめぐらせている。住居床面中央にあたる所には、東西長約0.7m、南北長約0.6m、深さ約0.3mの土坑(K1)が設けられていた。土坑の周囲に周縁帯となる土塊は確認できなかったが、土坑底と土坑周囲に炭灰が楕円形状に分布していたことから、

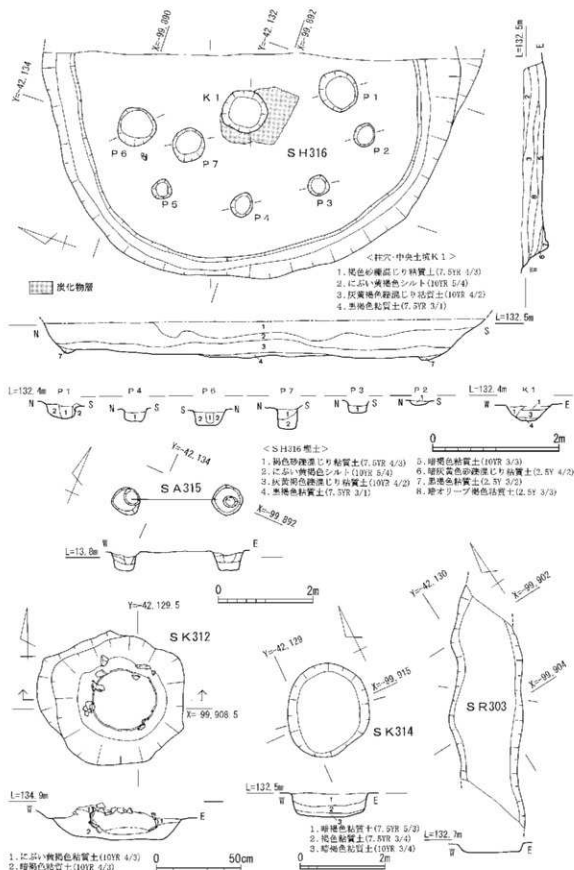
いわゆる灰穴炉とみられる。主柱は2基ないし4基から構成されると推定される。柱穴P1・P6から構成される場合には2主柱となり、P4を含めて構成される場合は、4主柱として復原できる。P1・P6は規模がやや大きく、直径約0.6m、深さ約0.45~0.6mを測る。このほか、床面では、5基の柱穴を検出しているが、このうちP2~P5は側柱に伴うものとみられ、垂木を受ける役割を担う柱として工夫されたと考えられる。

柱列S A315(第16図) 調査区中央で検出した2基の柱穴(P1・2)を柱列として復原したものである。柱間は約2.1m、柱穴の規模は径約0.6m、深さ0.4mを測る。埋土から弥生土器片が出土し、弥生時代後期後葉と推定される。

土壙S K312(第16図) 直径約0.75m、深さ約0.2mの円形土壙である。土壙の中央に、径約40cmの甕が体部下半を割られた状態で据えられていた。器体外面には、煤が付着していることから、一度火にかけたものを埋納したと考えられる。体部上半は、後世の削平により失われ、体部幅約10cm程度を輪状に残すのみで、土器の復元には至らなかった。土器棺墓の可能性が



第15図 3区平面図



第16図 竪穴式住居跡SH316、柱列SA315、土壘SK312、土坑SK314、流路SR303実測図

あり、時期は弥生時代中期後半と推定される。

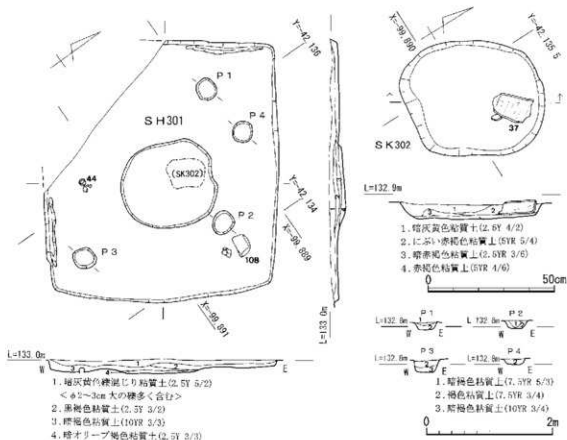
土坑 S K 314 (第16図) 調査区南端で検出した楕円形状の土坑である。長軸約2.1m、短軸約0.7m、深さ約0.55mを測り、断面形は逆台形状を呈する。弥生土器片が出土し、弥生時代中期の土坑と推定される。なお周辺で8基の柱穴ないしは小土坑を検出した。出土遺物は確認できないが、検出面と埋土の状況からおおよそ同時期の柱穴ないしは土坑と推定される。

土坑 S K 302 (第17図) 古墳時代中期の住居 S H 301 と同一床面で検出した楕円形状の小土坑である。長径約0.6m、短径0.4mを測る、深さ0.1mを測る。炉跡とみられ、底部にはぶく赤変し、長頸壺の一部が出土した。周辺から弥生時代後期後葉の遺物が出土し、S H 301の構築時に、弥生時代後期の遺構を大きく削平していることが判明した。

溝 S D 313 幅0.5m、深さ0.15mの溝である。遺物は出土せず、時期は不明である。

流路 S R 303 (第16図) 東から西へ流れる流路跡である。検出長約4.5m、幅約1.8m、深さ約0.3mである。埋土は、黄褐色系の砂礫を主体とする。拳大の礫も多数みられる。粘質土はほとんど含まない。出土遺物はなく、自然流路跡とみられる。

竪穴式住居跡 S H 301 (第17図) 長方形の平面プランを持つ竪穴式住居跡である。調査区外に一部広がるが、住居跡の大半を検出することができた。住居跡の規模は、長(東)辺が4.2m、短(南)辺が3.7mである。検出面から床面までの深さは約0.2mである。床面には、周壁溝・土坑・焼土坑・柱穴などの遺構が認められた。周壁溝は、幅約0.2m、深さ5cmで一部を検出した。土坑は床面

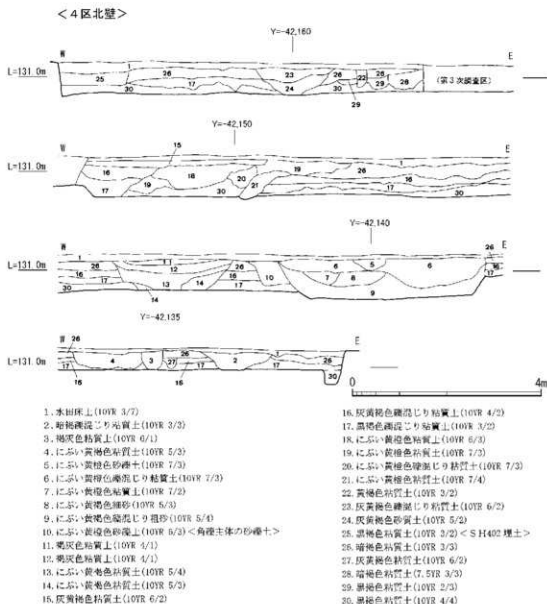


第17図 竪穴式住居跡 S H 301、土坑 S K 302実測図

のほぼ中央で検出した。長軸約1.8m、短軸約1.4mの長楕円形で、深さは0.1～0.2mである。この土坑は、床面精査の段階では明確に検出できず、床面を一部除去した段階で検出している。支柱穴は4基から構成されるとみられるが、柱の配置は非対称で、柱間も一律ではない。柱穴の規模は直径30～35cm、深さ約20cmである。床面からは小形丸底土器、甕などの土器類のほか、台石とみられる石製品が出土した。上面には使用痕とみられる磨滅痕跡があり、板石の主軸を住居中央に向け、住居床面の東隅にしっかりと据えられており、作業台あるいは調理台とみることができ。出土土器から、時期は古墳時代中期初頭と推定される。

4) 4区の調査(第19図)

4区は、遺跡中央部の3区南側に設定した調査区である。対象地は緩やかな傾斜地を1筆の耕作地として利用されていた地点で、北側により大きく上層が削平されている。遺構面は、東半で

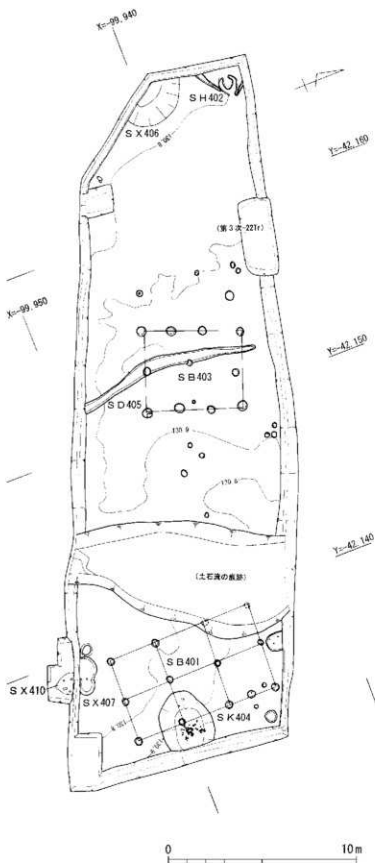


第18図 4区土層断面図

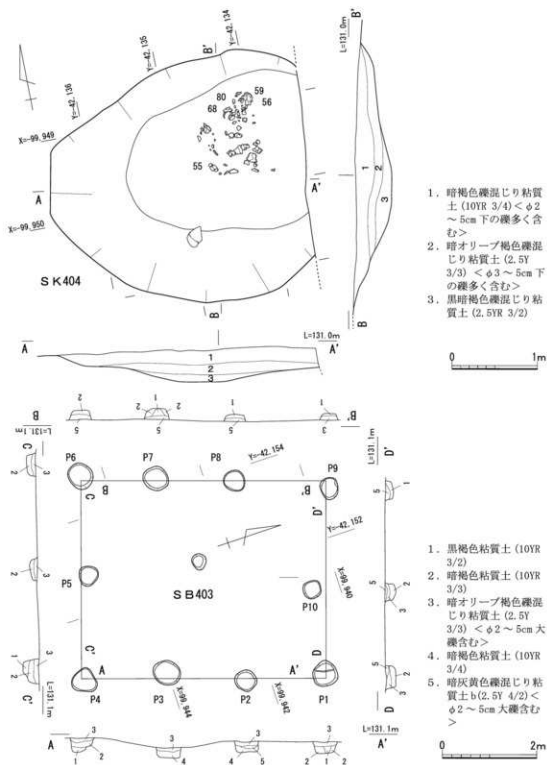
2面を確認し、平安時代の遺構面を標高131.1m地点で検出し、その約20～30cm下層で、飛鳥時代およびそれ以前の遺構面を同一面で検出した。また、調査区東部において、南北方向に流れた土石流の痕跡を幅2.5～6m、長さ12mにわたって確認した。江戸時代以降とみられる堆積層を削平して流路を形成しているが、正確な時期は不明である。層序は、耕作土・床土以下に、暗褐色砂礫混じり粘質土、褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する。調査面積は350㎡を測る。

土坑 S K 404 (第20図) 調査区東端で検出した楕円形の土器溜まり状の土坑である。長径は残存長3.0m、短径2.9mを測る。緩やかに落ち込み、楕円状を呈する。検出面からの深さは0.4mを測る。出土遺物は、砂礫に混じり、整理箱約3箱の弥生土器が出土した。出土した土器には弥生時代中期後葉～後期と時期幅があるが、主体となる土器は、弥生時代後期後葉に属し、これらはあまり摩耗を受けていない。弥生時代後期後葉に、周辺の中期土器の堆積層を削平して、形成された土坑とみられる。

掘立柱建物跡 S B 403 (第20図) 調査区中央で検出した桁行3間(約5.6m)、梁間2間(約

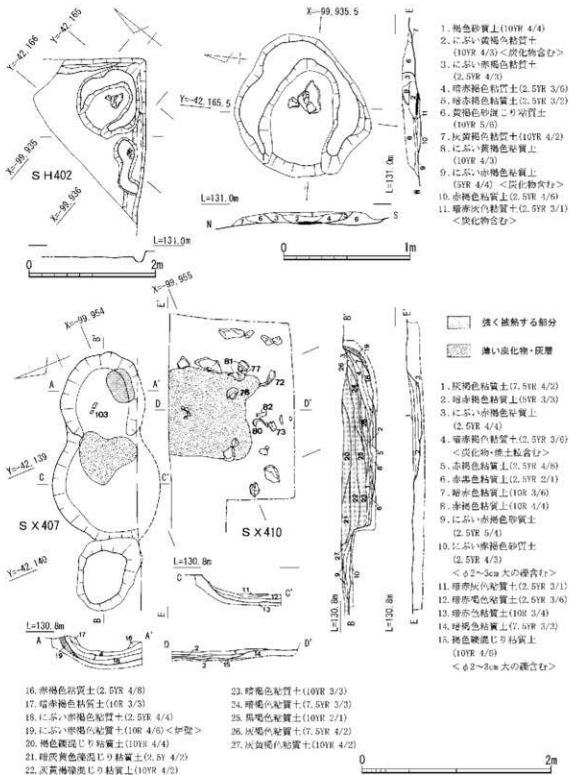


第19図 4区平面図



第20図 土坑 S K 404、掘立柱建物跡 S B 403実測図

4.8m)の規模をもつ建物跡である。柱間は、桁行約0.8~0.9m、梁間約1.0mを測る。梁間中央の柱穴は、規模も径0.4mと小さく、柱列からやや内寄りに入る位置に構築されている。柱穴から、杯部外面に刺穴痕がある布留式期の土師器高杯が出土し、古墳時代中期前半の建物跡と推定される。



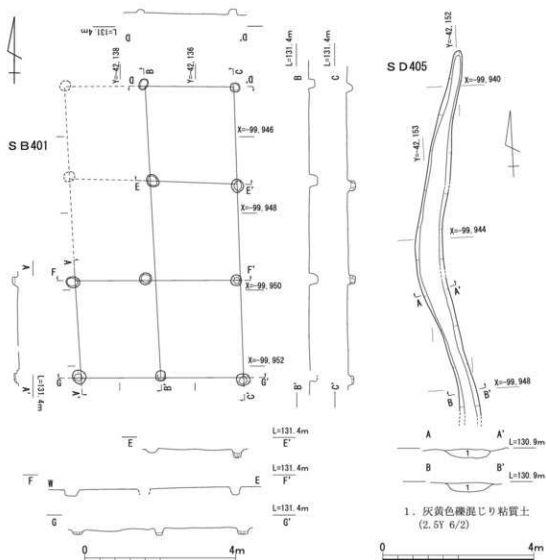
第21図 竪穴式住居跡SH402、炉跡SX407、落ち込みSX410実測図

竪穴式住居跡SH402(第21図) 調査区北西隅で確認した建物跡である。住居の南東床面を部分的に検出した。南東辺の残存長1.4m、深さ約0.1mを測る。南東隅に造り付け竈をもつ住居跡である。竈は、馬蹄形を呈し、両袖部が良好に遺存していた。竈中央から堯の一部が出土し、基底部中央で、支石として用いられたとみられる粘板岩を検出した。また、南西壁に沿って、土器

片が混じる被熱した黄褐色粘質土を検出したが、竈とは接続せず、住居内の煙道に関わるものとみることが困難である。出土遺物から古墳時代中期前半の建物跡と推定される。

落ち込みS X 406 (第19図) 調査区西端で検出した不整形の落ち込みである。長さ約4m、幅2.5m、深さ約0.15mを測る。布留式土器片が出土し、時期は古墳時代中期前半とみられる。

炉跡S X 407・落ち込みS X 410 (第21図) 南壁の一部を拡張し、調査区南東で検出した。馬蹄形の炉本体(S X 407)に、円形土坑(S X 410)が接続し、さらに西側に堅く締まる粘質土層を塊状に検出した。炉本体の規模は、長さ約0.9m、幅0.9m、深さは西側基底部で約0.3mを測る。炉の基底は西側の円形土坑に向け、緩やかに傾斜する。連接する円形土坑は、やや大きく掘削され、径1.0mを測り、炉跡本体の基底部とはほぼ同じレベルで掘削されている。炉の埋土には、炭化物・焼土粒を含み、断面割り調査で、炉壁とみられる赤変した基底部を確認した。また円形土坑にも炉からの排土とみられる炭化物が薄く堆積する。出土遺物は、炉内から、鉄鎌1点と、刀装具の



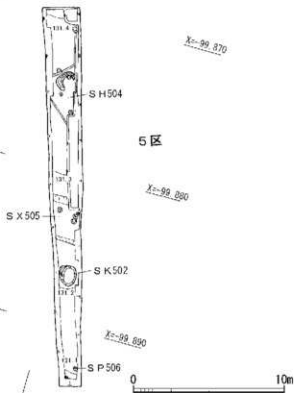
第22図 掘立柱建物跡SH 401、溝SD 405実測図

可能性がある微細な鉄小片1点が出土した。製鉄炉の可能性を想定して調査を進め、炉内および周辺の掘削土を洗浄したが、鋼滓や鍛造剥片等は出土しなかった。炉跡周辺では、柱穴を検出していないが、耕作地畦畔の段差面となっているため、上層は大きく削平されている。本来は簡易な上屋をもつ屋外炉として構築されたものであろう。また、丘陵の下方となる炉跡南側には、炉本体と円形土坑の接続部に向けて接続する幅約0.9m、深さ0.1mの浅い断面「U」字形の溝状の落ち込みS X 410を検出した。この周辺で炭化物の広がりがみられ、須恵器・土師器などの土器が出土した。S X 410は丘陵下方への排水の機能をもつ炉の付属施設とみられる。出土した土器は、おおよそ陶器窯T K 217型式に属し、7世紀前葉に形成された遺構とみられる。

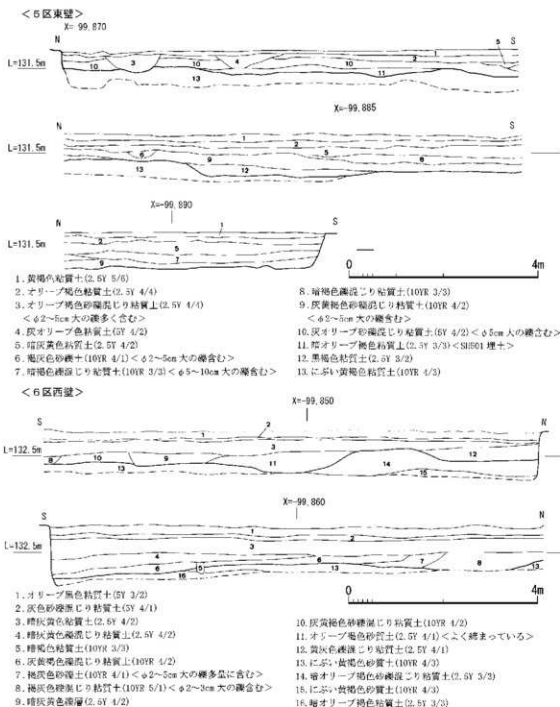
掘立柱建物跡S B 401 (第22図) 調査区西端で検出した建物跡である。桁行3間(約7.9m)、梁間2間(約4.8m)以上の規模をもつ。耕作土の直下で検出した遺構である。埋土には、土師器片を含むが、時期を明確にできる資料ではない。柱構造・柱間距離は、野条遺跡で検出された掘立柱建物に近く、また正方位をもつことから、平安時代後期の建物跡と推定される。

溝S D 405 (第22図) 調査区中央で10mにわたって検出した溝である。幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰黄色砂礫泥じり粘質土からなり、中世後期以降の溝と推定される。

5) 5・6区の調査(第23図)

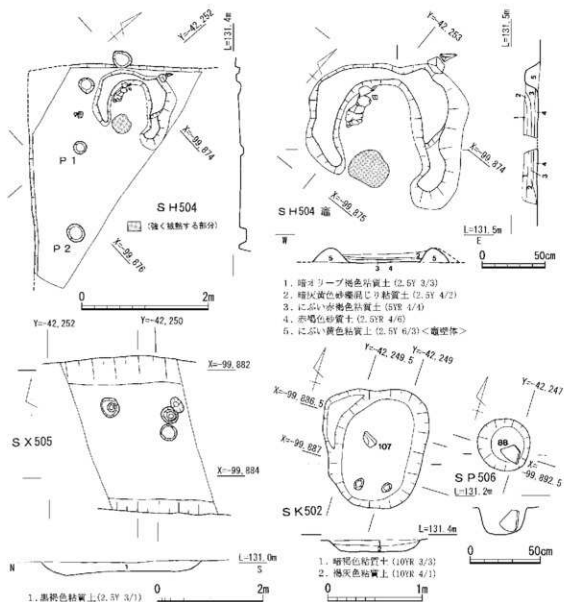


第23図 5・6区平面図(上: 6区、下5区)



第24図 5・6区土層断面図

5・6区は、遺跡の西部で、南北に設定した調査区である。5・6区は、新たに計画された用水路の切土が行われる部分を調査対象とした。南北に細長いトレンチを設定したが、中央の側溝を挟み、北半と南半で調査前の現地形で約12mの段差があるため、北部を6区とし、南部を5区とした。旧地形は、緩やかな傾斜面であったとみられ、特に6区北部は丘陵側を断面「L」字に大きく削平されている。層序は、丘陵下部の5区南部では、上層から暗灰黄色粘質土、暗褐色礫混じり粘質土、中世遺物を包含する灰黄褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する(第24図)。奈良～平安期の遺構面を、調査区北部では標高約131.5m、南部では約131.1mで検出した。6区では、



第25図 竪穴式住居跡SH504、落ち込みSX505、土坑SK502、柱穴SP506実測図

耕作土以下、暗灰黄色砂混じり粘質土、中世遺物を包含する灰黄褐色礫混じり砂質土の順に堆積する(第24図)。調査面積は、5区は50m²、6区は150m²を測る。

竪穴式住居跡SH504(第25図) 5区北部で検出した。一辺約4.0mの方形竪穴式住居跡である。西辺に沿って、主柱穴とみられる2基の柱穴(P1・P2)を検出し、対角に4主柱で構成される住居とみられる。北西辺の中央で馬蹄形に壁体が残存する竈を検出した。幅1.3m、長さ1.0mを測る。竈内から甕が出土している。時期は、出土土器から奈良時代後半と推定される。

土坑SK502(第25図) 6区南部で検出した。長径約1.25m、短径約1.0m、深さ約0.15mの楕円形状の土坑である。瓦器片・砥石等が出土し、平安時代後期～鎌倉時代と推定される。

落ち込みSX505(第25図) 5区中央で検出した落ち込みである。検出面での幅約5.8m、深さ0.2mを測る。断面は緩やかに落ち込み、底部は平坦で、東西方向に掘削された浅い溝の可能

性がある。埋土から、瓦器片が出土し、時期は、平安時代後期～鎌倉時代とみられる。

柱穴 S P 506 (第25図) 5区南端で検出した柱穴である。規模は径0.2m、深さ0.15mを測る。東播系の須恵器鉢が出土し、12世紀前半頃の柱穴とみられる。周辺に同一面で検出される数基の柱穴があるが、調査面積が限られ、建物跡や柱列を復原するには至っていない。

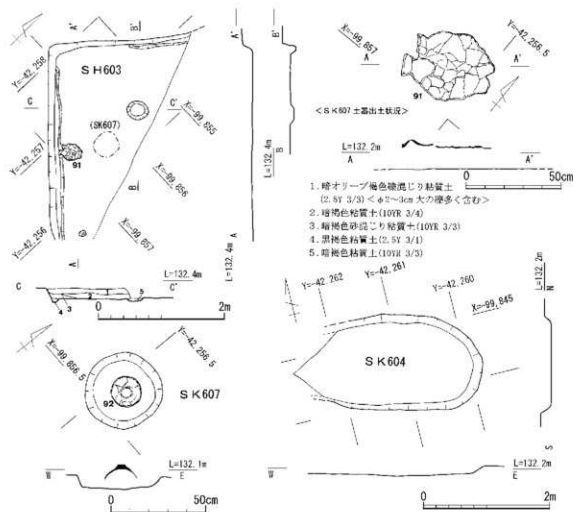
竪穴式住居跡 S H 603 (第26図) 6区南寄りで一部を検出した竪穴式住居跡である。一辺約4.1mの住居跡である。柱穴は、床面で1基を検出し、布留式甕1点が出土した。出土土器から、時期は古墳時代中期前半と推定される。

土坑 S K 604 (第26図) 6区の中央で検出した楕円形状の土坑である。残存長径2.8m、短径1.4m、深さ約0.15mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑 S K 607 (第26図) S H 603下層から検出した。径0.4m、深さ0.2mの小土坑である。弥生時代後期後葉の鉢2点が重ねられ、伏せられた状態で出土した。祭祀的な土坑である。

柱列 S A 601 (第23図) 6区東端で検出した柱列である。2間以上の規模をもち、柱間1.7～1.8mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

柱穴 S P 605 (第23図) 6区中央東壁際に検出した。瓦器碗を出土し、12世紀前半の柱穴と推



第26図 竪穴式住居跡 S H 603、土坑 S K 604・607実測図

定される。周辺で柱穴群を検出したが、建物跡の復原には至らなかった。

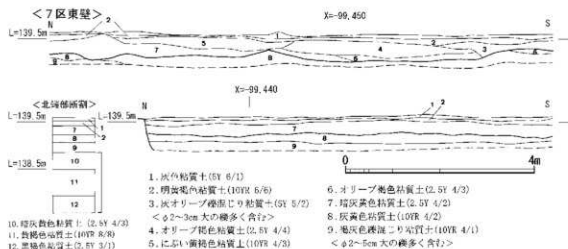
柱穴 S P 606 (第23図) 6区中央西寄りで見出した。丹波焼壺片を出土し、中世後期～近世前期の柱穴とみられる。

6) 7区の調査(第27図)

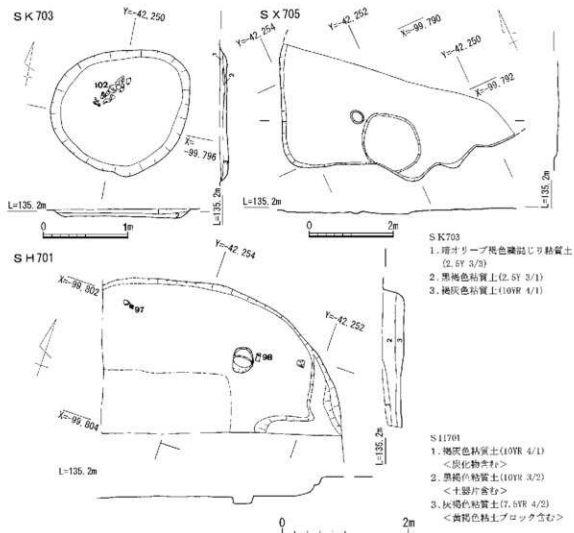
遺跡の北西に設定した調査区である。京都府教育委員会による試掘調査区(第15トレンチ)の周辺を拡張して調査したものである。東側の高まりは、古墳状に隆起しているため、平成16年度に八木町教育委員会による試掘が行われたが、周辺調査では古墳の兆候は確認されず、縄文時代の遺構と遺物や、中世の遺物が出土している。本調査では、標高約139.3m付近で遺構面を確認した。主な検出遺構は、縄文時代の土坑1基、同時期とみられる落ち込み、弥生時代後期の堅穴式住居



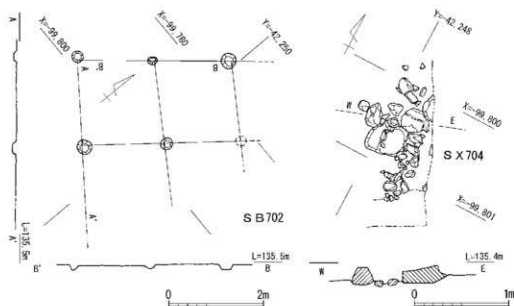
第27図 7区平面図



第28図 7区土層断面図



第29図 竪穴式住居跡 S H 701、土坑 S K 703、落ち込み S X 705実測図



第30図 掘立柱建物跡 S B 702、集石 S X 704実測図

跡1基、平安時代後期以降の建物跡と集石遺構である。層序は、耕作土・床土以下に、暗褐色砂礫混じり粘質土、褐色砂礫混じり粘質土の順に堆積する。調査面積は150㎡を測る。

土坑S K 703 (第29図) 直径1.6m、深さ0.15mの円形土坑である。土坑のなかから、縄文土器片が出土している。埋土中の炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、縄文時代晩期の年代観⁽¹⁹²⁾を得た。

落ち込みS X 705 (第29図) 調査区北部中央で検出した落ち込みである。土器は出土していないが、埋土の状況から縄文時代の落ち込みの可能性がある。

竪穴式住居跡S H 701 (第29図) 調査区南東隅で検出した住居跡である。床面で柱穴1基と、北部で焼土の広がりを検出した。吉備系高杯が出土し、弥生時代後期前葉の住居跡と推定される。また埋土中には、弥生時代中期の土器片を包含している。

掘立柱建物跡S B 702 (第30図) 調査区南東で検出した建物跡である。2間×2間以上の規模をもち、柱間の間隔は、1.5～1.8mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

集石S X 704 (第30図) 調査区南東隅で一部を検出した集石である。幅約0.5m、長さ1.5mにわたって検出した。掘形は認められなかったが、石材の間隙から瓦器片が出土している。

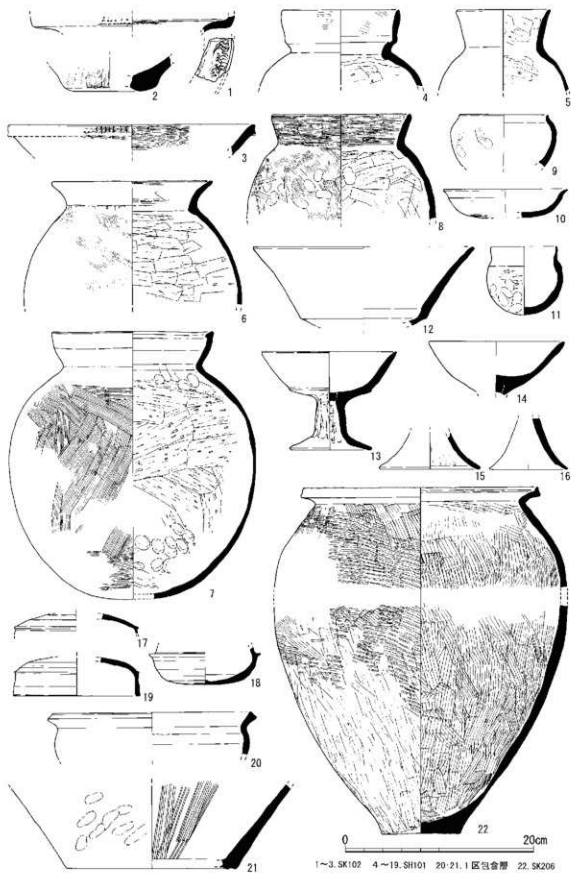
3. 出土遺物

出土遺物には、土器、鉄製品および石器があり、総量は整理箱26箱である。

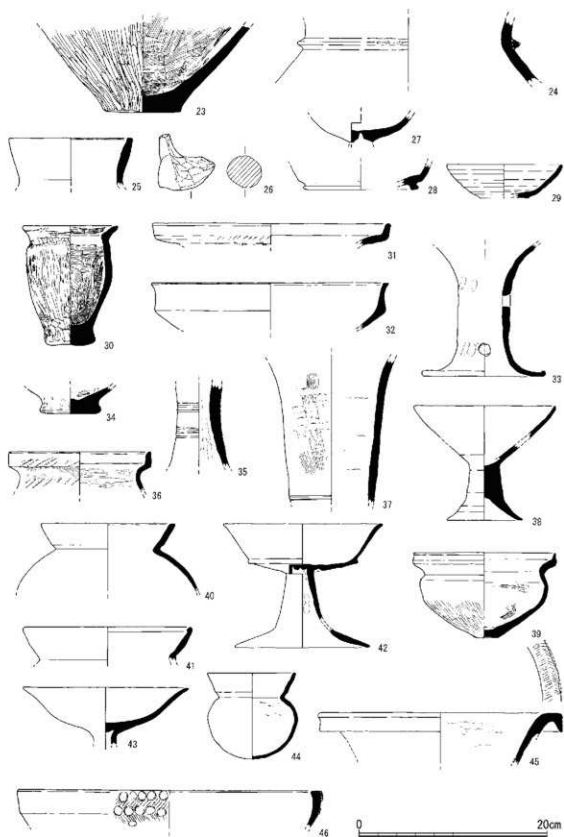
1) 土器

1～21(第31図)は、1区から出土した。1～3は、土壙S K 102から出土した。1は、近江系受口口縁壺の一部で、野洲川周辺に特徴的な暗灰褐色の胎土をもつ。3は壺口縁端部で、端部外面に麻状文を施す。4～19は、竪穴式住居跡S H 101から出土した一括資料である。二重口縁壺(4)、直口壺(5)、短頸壺(6・8)、椀(9・10)、布留式壺(7)、土師器高杯(12～16)が出土している。高杯にはバラエティがあり、杯部が深いもの(12)と浅いもの(13・14)があり、脚部も裾部で外方に大きく開くもの(13)、緩やかに開くもの(15・16)がある。これらの資料には、須恵器が伴し、有蓋高杯の蓋(17)、杯身(18)、杯蓋(19)がある。おおよそ陶器窯T K 216～T K 208型式に相当し、5世紀前葉～中葉頃の資料である。最終段階の布留式壺と伴する資料として注目される。20は、南東部の掘立柱建物跡周辺の精査中に出土した須恵器鉢である。篠窯産で、9世紀前葉に帰属する資料とみられる。21は、包含層から出土した近世前期の丹波焼壺鉢である。

22～29(第31・32図)は、2区から出土した。22・23は、土坑S K 206から出土した。23は、中央部から出土し、22はS K 206掘削時の西壁精査中に出土した。22は、弥生時代中期後半の甕である。口縁部は、端部が肥厚して擠みあげられ、体部外面にタタキ成形、下半にケズリ調整を行う瀬戸内系の甕である。23は、壺の下半部であり、外面に丁寧なミガキを施す。24は、土坑S K 222から出土した突帯をもつ壺の頸部である。細片ではあるが、弥生時代前期末～中期初頭の資料とみられる。25は、南東部の精査中に出土した壺の口縁である。また26・27は、竪穴式住居跡S H 201から出土した。26は甌の把手で、27は杯部外面に刺穴痕を残す高杯である。28・29は、



第31図 出土遺物実測図(1)



23. SK206 24. SK222 26-27. SH01 25-28. 29. 2区包舎層

30~36. SH316 37. SK302 38-39. SH01 精整中 40~44. SH301

45-46. 3区包舎層

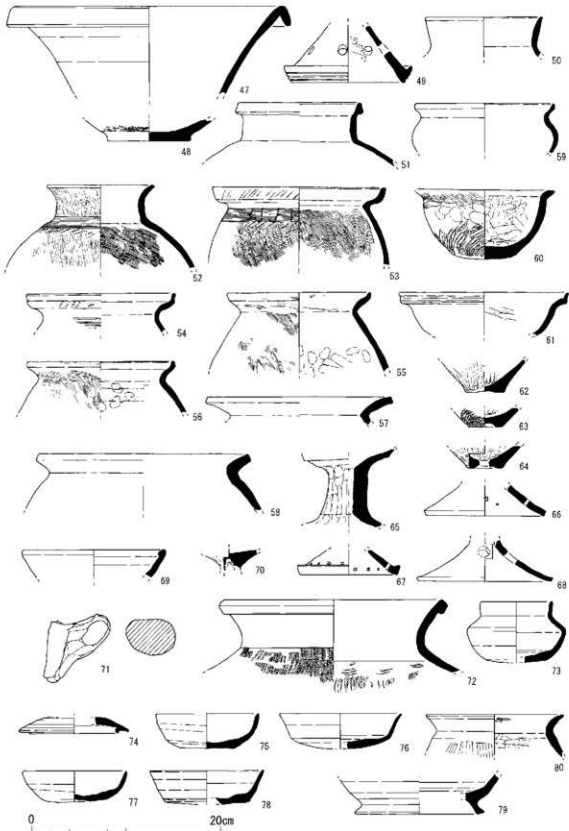
第32図 出土遺物実測図(2)

包含層中から出土した。28は、高台をもつ須恵器杯の底部で、奈良時代後期の資料である。また29は糸切り底をもつ須恵器杯で平安時代中期に帰属する。

30～49(第32・33図)は、3区から出土した。30～36は、竪穴式住居跡S H316から出土した土器で、30の小形甕と33の器台は、住居床面から出土した。おおよそ弥生時代後期中葉に帰属する。31の受口状口縁甕、32の高杯口縁部および34の底部は同時期のものだが、S H316埋土には弥生時代中期の近江系受口口縁甕(36)も含まれている。37は、古墳時代の竪穴式住居跡S H301の床面直下で検出した土坑S K302から出土した長頸壺の口縁部である。弥生時代後期後葉～末に帰属する。38・39は、同じくS H301の掘削中に出土した高杯(38)と受口状口縁鉢(39)で、いずれも弥生時代後期後葉～末の資料である。古墳時代中期の住居の構築時に、37～39の時期の遺構を削平したと考えられる。40～44は、竪穴式住居跡S H301から出土した土器で、このうち高杯(42)と小形丸底壺(44)は床面で出土したものである。42は杯部外面に刺突痕をもつ高杯で、布留3式に帰属し、おおよそ古墳時代中期初頭の資料である。40・41は甕で、42は高杯である。45～49は、南丹市教育委員会による試掘区周辺の弥生時代中期後半の土器包含層中から出土したものである。46～48は、いわゆる生駒西麓産の角閃石を多く含む胎土をもつ。47の広口壺は、48の底部と同一個体である可能性が高い。45・46は壺口縁で、49は高杯脚部である。

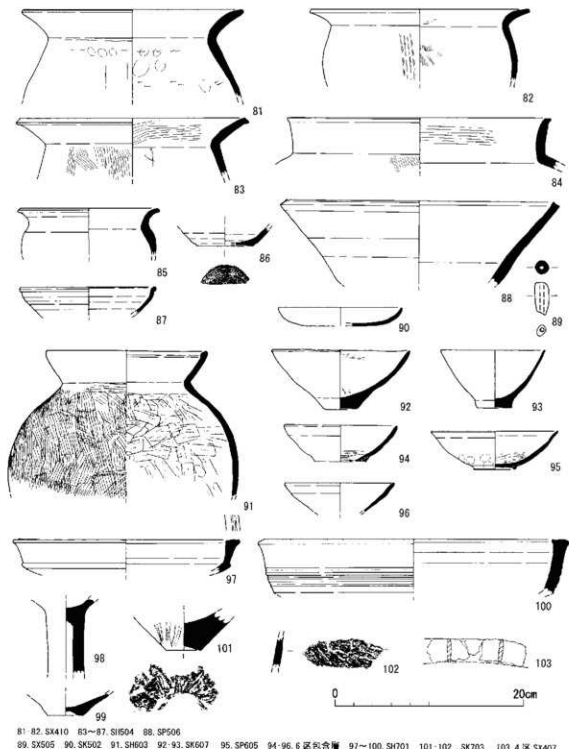
50～82(第33・34図)は、4区から出土した。50～68は、土坑S K404から出土した土器である。50は、口縁部に面をなす短頸壺である。52は肩部に直線文と刺突列点文を施す近江系土器の文様系譜を引く壺である。53～58は甕である。近江系の受口口縁甕(53・54)と、無文の受口状口縁甕(55・56)および、「く」字口縁甕(57・58)がある。59は、口縁端部がわずかに立ち上がり、受口状口縁の影響を受けたとみられる鉢である。62～64は甕および瓶の底部で、外面縦ハケを施すもの(62・64)と畿内系のタタキ成形を施すもの(63)がある。61は、擬内線を口縁部に施す鉢ないし高杯で、65～68は、高杯の一部である。弥生時代後期後葉の資料(65・66・68)のほか、裾部に小円形の透かしを巡らせ、端部を跳ね上げる後期前半の高杯脚部(67)が含まれる。S K404の出土土器は、後期後葉の土器を中心とするが、図化していない資料のなかに弥生時代中期後半の凹線文系土器なども包含する。69は、落ち込みS X406から出土した布留式甕の口縁部である。70は、掘立柱建物跡S B403のP7から出土した土師器高杯である。杯部外面に刺突痕をもつタイプの最も新しい様相を示す資料で、時期はおおよそ5世紀前葉とみられる。71は、竪穴式住居跡S H402から出土した瓶把手である。72～82は、炉跡S X407に付随する落ち込みS X410から出土した。72は、玉縁状の口縁端部をなす須恵器甕である。73は須恵器甕で、74は、宝珠つまみを欠損するが、内面に返りをもつ須恵器蓋である。75～78は須恵器杯Aで、75・77は、底部はヘラ起こし後、未調整であるが、76・78は、立ち上がりの屈曲がシャープで、丁寧に底部のヘラケズリを施す。79は、高台をもつ壺底部である。80～82は、土師器の甕で、口縁部が大きく外反する「く」字口縁をなし、外面に粗い縦ハケを施す。

83～90(第34図)は、5区から出土した。このうち83～86は竪穴式住居跡S H504から出土した。83は「く」字口縁をなす土師器甕で、口縁端部を短く外方に引き出す。85は短く外反する口縁を



47~49. 3 区包合甕 50~68. SX404 69. SX406 70-71. SH402 72~80. SX410

第333図 出土遺物実測図(3)



第34図 出土遺物実測図(4)

なす小形の甕である。外面はナデ調整を施す。86は須恵器杯で、底部外面に糸切りが認められる。88は、柱穴 S P 506から出土した東播系の須恵器鉢である。口径28.3cmを測る。11世紀後半～12世紀の所産とみられる。89の土鍾は、S X 505から出土した。一部を欠損するが、残存長約3.5cm、厚さ1.5cmを測る。共存資料に瓦器細片を含み、平安時代後期以降の資料と推定される。90は、土坑 S K 502から出土した土師器小皿で、口径13.1cmを測る。12世紀後半頃のものであろう。

91～96(第34図)は、6区で出土した。91は、竪穴式住居跡S H603から出土した布留式甕である。口径16.8cmを測る。外面は粗い縦ハケを施す最終段階の甕で、5世紀前半の所産とみられる。92・93は、S H603の下層で検出した土坑S K607から折り重なり出土した鉢である。摩耗が著しいが、薄く仕上げられ、外面はハケ調整によるものとみられる。弥生時代後期後葉の土器である。94～96は瓦器碗で、95は柱穴SP605から出土した。12世紀後半の資料とみられる。94・96は、包含層中から出土したもので、94は13世紀前葉、96は13世紀中頃のものであろう。

97～102(第34図)は、7区から出土した。97～100は、竪穴式住居跡S H701から出土した。97・98は高杯で、このうち97は端面に擬凹線を施す吉備系高杯である。丹波地域では初出の資料であり、後期前葉の所産である。100は、弥生時代中期末の広口壺口縁部で、混入資料とみられる。101・102は、土坑703から出土した縄文土器である。101の底部は、縄文時代後期～晩期の資料とみられる。102は細片であるが、いわゆる生駒西麓産の角閃石を多く含む胎土をもつ。

2) 鉄製品

103(第34図)は、炉跡S X407から出土した。炉底で出土したもので、鉄鎌とみられる。残存長10.6cm、刃部幅2.3cmを測る。刃部、基部の一部を折損し、折り返しは確認できない。

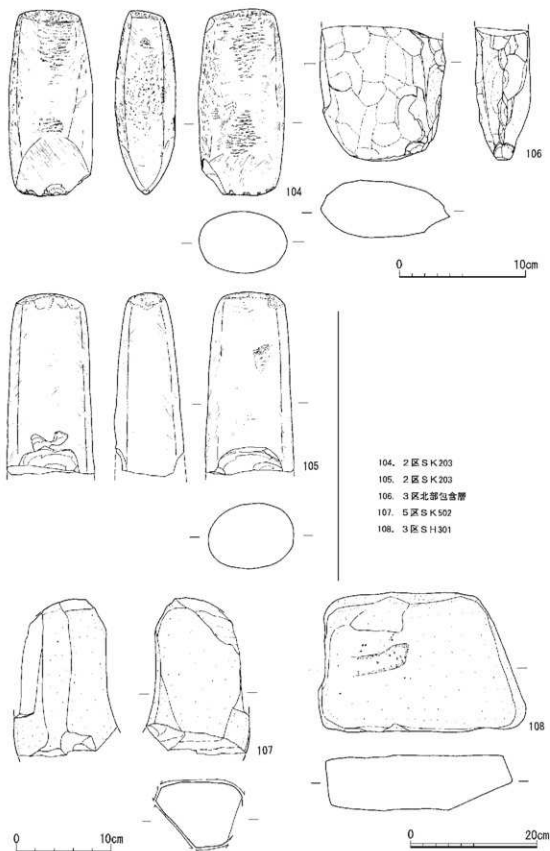
3) 石製品

104・105(第35図)は、2区S K203において、一括して出土した太型蛤刃石斧である。

104は、完存品である。ずんぐりとした形状である。使用損耗、あるいは折損した刃部を再生したものであろう。全長約14.7cm、最大幅約6.6cm、最大厚約4.9cmを測る。閃緑岩製である。

A・B両面は、刃部にかけて、丁寧に研磨調整が行われている。頭頂部は成形時の敲打痕跡が著しく、研磨調整は施されていない。側縁にも成形時の敲打痕跡が多く残る。刃部には使用に伴って生じたとみられる剥離痕跡が認められる。A・B両面、両側面に二次的な使用痕が多数認められる。線状のつぶれが平行に連続して、あばた状の痕跡となったものである。104では狭い範囲に認められたが、当該例では広い範囲に認められる。剥片石器加工用台石としてあるいは敲打具として用いられたものであろう。

105は、器体半ばで折損したもので、刃部が失われている。残長約14.2cm、頭頂部幅約5cm、折損部幅約7cm、最大厚約5.5cmを測る。閃緑岩製である。器表面は丁寧に研磨調整が施され、光沢を帯びている。頭頂部は研磨されておらず、成形時の敲打痕がそのまま残されている。折損部位には、A・B両面共に、横約5cm、縦約3cmの蝶番剥離が認められる。これは、刃部先端側から垂直な強い力を受けたことによるもので、石斧の使用に伴う折損状況を示す資料として興味深い。B面には、二次的な使用痕跡が認められる。線状のつぶれが平行に連続して、あばた状の痕跡となったものである。破損後に、剥片石器加工用の台石として転用された可能性がある。106(第35図)は、3区北部下層溝から出土した敲打成形痕跡のある円礫である。全長約10.6cm、最大幅約9.7cm、最大厚約4.5cmを測る。砂岩製である。上半は折損して失われている。成形痕は、主に、A面に認められる。自然礫面に対してハンマーを垂直に構え、敲打し、礫面を削がす、いわゆるベッキングの手法である。A面側は、剥離がほぼ完了している。B面側は、側縁と下端か



第35図 出土遺物実測図(5)

ら施された成形剥離が認められる以外は、未調整である。下部部には、研磨調整痕が施されている。当該資料は、A面の剥離がほぼ完了し、B面の剥離の準備として施した側縁に対する剥離成形段階で折損し、放棄されたものであろう。小型磨製石斧の石核であらう。

107(第35図)は、平安時代後期の5区SK502から出土した砥石である。砂岩製の砥石である。形状は、平面が長方形で、断面が台形を呈する。砥面は、器体主軸と平行して形成され、5面上認められる。下端と側縁の一部が欠損している。残存長約16.5cm、最大幅約11cmを測る。

108(第35図)は、3区の古墳時代中期の竪穴式住居跡SH301から出土した台石である。住居跡の東隅で据え置かれた状態で検出された。台石は、長方形の板状の砂岩を利用したもので、未加工である。表裏に平滑な自然面がみられ、一部に、使用に伴うとみられる研磨、敲打が認められる。面の一方を底面とし、一方を作業面として利用したようである。法量は、長辺約34cm、短辺約22cm、最大厚約8cmを測る。

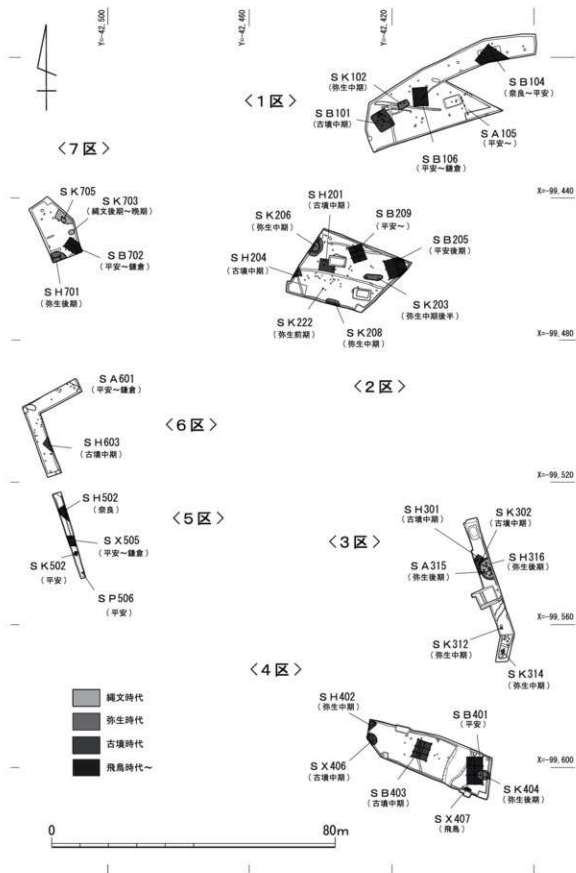
4. まとめ

今回の調査では、大谷口遺跡の北部を中心に調査し、縄文時代から中世にかけての多くの遺構を検出した。主な検出遺構は、縄文時代後期～晩期の土坑1基、弥生時代中期の土壇群、同後期の竪穴式住居跡1基、古墳時代中期の竪穴式住居跡6基・掘立柱建物跡1棟、飛鳥時代の炉跡1基、および奈良～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡である。

縄文時代の遺構は、遺跡北西部の7区で検出した。この周辺では、南丹市教育委員会による平成16年度の調査において、縄文時代後期後半と推定される溝や土器が検出されていたが、今回の調査でも縄文時代後期後半～晩期と推定される土坑1基を検出した。縄文土器は3区の調査でも包含層中から小片が出土し、遺跡の広い範囲に分布している。

弥生時代の遺構は、遺跡の各調査区で確認された。2区では、弥生時代前期末～中期初頭と推定される遺構は小土坑を検出した。また弥生時代中期の遺構としては、1区の方形土坑、2区の水場に形成されたとみられる中期後半の土器が出土した円形土坑や、磨製石斧2点が出土した楕円形土坑がある。さらに、3区では土器棺を埋納したとみられる土壇や、弥生時代中期と推定される土壇群を検出した。弥生時代中期の遺物は、遺跡南西の5・6区以外の各調査区で出土している。この時期の亀岡盆地北部の拠点集落は、大谷口遺跡から南へ1.5kmの池上遺跡であるが、今回の調査によって拠点集落の周縁部である山麓部において、小規模な集落域や活動域が展開することが判明した。

弥生時代後期の遺構は、7区で後期前葉と推定される竪穴式住居跡の一部を検出し、3区で後期中葉の竪穴式住居跡1基を検出した。後期前半期の住居跡は、これまで亀岡盆地内でもほとんど確認されていなかったが、大谷口遺跡周辺の山麓部では、東に隣接する諸畑遺跡にも検出例があり、盆地北端の山麓部に後期前半の住居が点在することが明らかとなった。一方、弥生時代後期後葉～末の遺構は、遺跡北部の2区や、遺跡中央部の4区、さらに西部の6区で小土坑を検出した。弥生時代後期後葉～末頃の土器は、各調査区の包含層中に含まれている。弥生時代後期の



第36図 調査区遺構変遷図

住居跡は、諸畑遺跡や野条遺跡南部でも焼失住居などの検出例があり、野条遺跡から北部の山裾部にかけて、池上遺跡の立地する中期の集落域よりもやや標高の高い地点を中心に後期の集落域が広がるとみられる。

歴史時代の遺構は、飛鳥時代の炉跡をはじめ、奈良時代末～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡や柱穴群を検出した。飛鳥時代の遺構は、これまで周辺遺跡でもほとんど検出されていない。また、掘立柱建物跡は時期を確定できるものが少ないが、平安時代後期～鎌倉時代にかけてのものが多くみられ、野条遺跡の同時期の集落との関係が注目されるところである。

今回の調査の中で、最も大きな成果は、古墳時代中期の住居跡を広い範囲で確認したことであろう。中期の竪穴式住居跡は、北部の1・2区で3基の竪穴式住居跡を検出し、東部の3・4区では2基の竪穴式住居跡と1棟の掘立柱建物跡を、また西部の5区でも1基の竪穴式住居跡を検出した。いずれも出土した土器から、古墳時代中期前半の住居跡であることが判明している。なかでも注目されるのは、4区で掘立柱建物跡1棟が確認されたことで、この周辺が集落の中心的



第37図 大谷口遺跡・諸畑遺跡調査区位置図

な地区であることを窺わせるものである。5世紀初頭～中葉頃の住居跡は、近年、周辺遺跡で調査例が増加し、隣接する諸遺跡では近畿地方でも最古段階の導入期竈を付設する住居跡が検出され、大いに注目を集めた。今回検出した住居跡も、1区のSH101と4区のSH401は、いずれも5世紀前半～中頃の導入期の竈をもつ住居跡である。そのなかでも特に注目されるのはSH101の竈の構造であり、焚き口に直方体の立石を配するものである。竈の焚き口に立石や「ハ」字状に石材を配置する事例は、諸遺跡や池上遺跡ほか、大堰川上流域にあたる日吉町天若遺跡でも検出されている。天若遺跡では、後期の竈に直方体の立石をもつタイプが複数確認され、今回の事例はその初現的な形態となるものとみられる。諸遺跡と大谷口遺跡は、小尾根状を呈する天井川となっていた官山川に分断されているが、地形的には連続する丘陵裾部の緩やかな傾斜地にあり、弥生～古墳時代の遺構群が官山川の基部にもみられることから、本来は同一の集落域として捉えることができるものである(第37図)。平成14年度に本格化した場整備と府道建設事業に伴う調査によって、西部の室橋遺跡でも5世紀前半期の導入期竈をもつ住居跡が検出され、今回の大谷口遺跡の調査でも同時期の住居群が検出されたことにより、古墳時代中期前半に先進的な技術をもつ地域集団が亀岡盆地北麓の広い範囲で集落域を形成したことが明らかとなった。5世紀前半のこうした新たな開発を進めた地域勢力が台頭する背景について、亀岡市坊主塚古墳や八木町城谷口古墳群など盆地北部の古墳群の動向とあわせ、今後、検討してゆく必要がある。

注1 調査にあたって、広島大学文学部准教授野島永氏、滋賀県教育委員会大道和人氏に、4区炉跡SX407の構造等についてご教示を得た。調査参加者は以下のとおりである(順不同)

作業員：広瀬伊佐夫・杉山雅之・松本敏子・笠浪恒正・麻田忠晴・宅間文治・福本正吉・松本拓・三好順子・平井美登里・平井義次・国府京子・矢木正代・竹井美津子・中川智子・服部良彦・明田とし枝・川勝武・浅田文雄

調査補助員：石崎佐栄子・國府恵利・廣瀬慶典・齋藤文彦・松井大裕・安井瑛介・長屋里美・清水香萌・越智大作・岸本雅奈・大西遼・曾根由梨

整理員：茶園矢壽子・清水友佳子・石崎佐栄子・福島厚子・近澤富美代・小関宏美・野中完樹

注2 土坑S K703から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を(株)加速器年代研究所に依頼した。出土試料の ^{14}C 年代は $2670 \pm 30\text{yrBP}$ であり、縄文時代晩期中葉頃に相当する年代値となっている。

参考文献

- 谷口梯「町内遺跡発掘調査報告書 大谷口古墳1号墳・大谷口古墳2号墳」(八木町教育委員会) 2005
 辻健二郎「大谷口遺跡第2次発掘調査報告書」(南丹市教育委員会) 2008
 辻健二郎「南丹市内遺跡発掘調査報告書 平成20年度大谷口遺跡第3次」(南丹市教育委員会) 2009
 奈良康正「大谷口遺跡第4次調査」(「京都府埋蔵文化財調査報告書」平成20年度 京都府教育委員会) 2009
 福島孝行「諸遺跡第4次」(「京都府遺跡調査概報」第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
 三好博喜「天若遺跡 京都府遺跡調査報告書」第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994

2. 蔵垣内遺跡第12次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、主要地方道亀岡岡部線の建設に伴い、平成20年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。主要地方道亀岡岡部線の建設に伴う発掘調査としては、平成19年度に引き続き、今回が2年目にあたる。平成19年度の調査成果についてはすでに報告しているところである。^(R1)

蔵垣内遺跡は、京都府亀岡市千歳町国分正田・内垣内・西垣内・藪ノ本ほかに所在する。蔵垣内遺跡では平成14年度から平成18年度にかけて、国営農地再編整備事業に伴う範囲内確認調査ならびに発掘調査を実施しており、縄文時代から中世に至る大規模な複合遺跡であることが明らかになっている。また、遺跡の北西部には古墳時代後期後半から飛鳥時代中頃にかけて築造された国分古墳群が重複していることも明らかにされている。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛、調査第1課資料係長田代弘、調査第2課第3係調査員筒井崇史が担当した。調査期間は、平成20年11月4日から平成21年2月24日までである。調査面積は1,830㎡である。本報告は田代・筒井が執筆し、各項の末尾に文責を記した。

調査期間中は、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・亀岡市千歳町自治会をはじめとする関係諸機関からご教示、ご協力をいただいた。また、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員・作業員の方々に参加いただいた。^(R2)

なお、調査に係る経費は、京都府建設交通部が全額負担した。

2. 遺跡の立地とこれまでの調査成果

蔵垣内遺跡の所在する亀岡市は、周囲を200~600m級の山地に囲まれた盆地地形を呈している。その中央を桂川が北西から南東に向かって流れ、京都盆地に至る。桂川



第1図 調査地位置図および周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

の両岸には河川に沿って低位段丘が広がる。蔵垣内遺跡は桂川の東岸の低位段丘上に位置し、背後には牛松山の裾が迫る。桂川東岸地域は、ここ数年続いた国営農地再編整備事業に伴う発掘調査によって、多くの遺跡の内容が明らかになりつつあり、蔵垣内遺跡も例外ではない。以下では、蔵垣内遺跡の調査成果について概観する。

縄文時代では、遺跡の南部で早期の押型土器が出土している。周辺では車塚遺跡で縄文時代後期の縄文土器と石器が多く出土した。弥生時代では、遺跡の南部で中期の溝や土器棺墓などが検出されている。溝は方形周溝墓の溝と考えられる。同時期の方形周溝墓としては池尻遺跡や時塚遺跡で検出されている。また、遺跡の北部では後期の竪穴式住居跡などが検出されている。古墳時代では、遺跡の中央部から南部にかけて、前期の竪穴式住居跡が多数検出された。しかし中期から後期にかけての集落の痕跡は認められず、後期末から飛鳥時代にかけての竪穴式住居跡が遺跡の南部を中心に検出されている。この集落に併行して、遺跡の北西部に国分古墳群が築造される。奈良時代になると、遺跡の中央部から南部にかけて掘立柱建物跡が多数検出されている。このうち、遺跡の南端に近い調査区では正方位の建物跡を検出している。中頃には遺跡に隣接する段丘縁辺部に丹波国分寺が造営されるが、それ以降の遺構・遺物の検出例は減少する。しかし、中世になると、遺跡内各所で掘立柱建物跡や土坑などが検出され、中世後期には丹波国分寺に関連する遺構なども検出された。

3. 調査の経過

調査対象地は、亀岡市千歳町国分地内を南北に縦断する幅8m、総延長1900mの範囲である。調査対象地周辺は、先述のように国営農地再編整備事業に伴って、大規模な発掘調査を実施しており、新設される主要地方道亀岡園部線はこの国営農地整備地を縦断するように計画された。

調査の実施に当たっては、便宜上、調査対象地を南から北へAからNまでの地区に分け、数回に分けて調査を行った地区については枝番号で調査区を細分した(第2図)。なお、調査前には、国営農地再編整備事業に伴う工事用道路として、1～15mの盛り土が行われていた。

平成19年度の調査はA・D・E・Gの各地区の調査を行い、縄文時代から奈良時代および中世の遺構・遺物を検出した。調査区の設定の関係上、D地区とE地区については平成20年度にも引き続き調査を実施することになった。

平成20年度は、D・E・H・Iの各地区の調査を実施した。このうち、I地区については北と南の2調査区に分けて実施した。調査は、平成20年11月4日にH地区の重機掘削から開始した。翌11月5日からは人力による精査、遺構の掘削、検出遺構の記録作業を開始した。H地区に引き続き、D2・E2地区の重機掘削を行った。重機掘削後、人力による精査と遺構掘削を行い、検出遺構の記録作業を行った。D2・E2地区については平成20年12月17日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、若干の補足の調査と記録作業を行った。I地区は、平成20年12月1日から北調査区の重機掘削を開始し、引き続き南調査区の重機掘削も行った。人力による作業はD2・E2地区の作業がおおむね終了した後に、着手した。I地区については平成

21年2月13日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。また、調査終了間近の平成21年2月20日に関係者説明会を行い、平成20年2月24日にすべての作業を終了した。

4. 検出遺構

1) D 2地区(第3図右下)

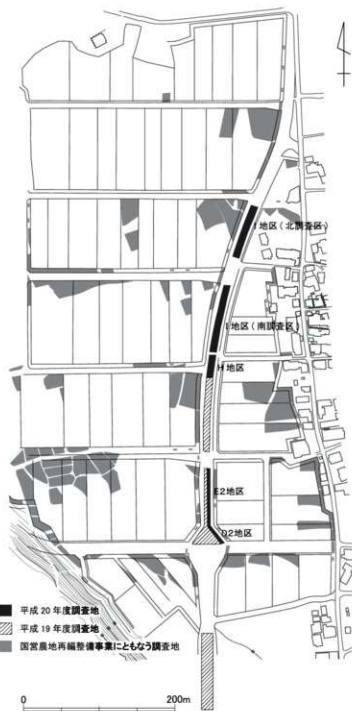
昨年度に調査を行ったD 1地区の東側に設定した調査区である。昨年度調査分の残余の部分でもあり、幅は4mに限られる。調査区の全長は25mである。検出遺構としては、土坑や柱穴などがある。

土坑は5基を検出したが、調査範囲が限られたことから、全体の形状や遺構の性格が分かるものは少ない。土坑 S K168・169・170などから多数の土器が出土した(第6図7～17)。

柱穴は50基以上を検出した。柱穴には一辺が0.4～1.1m、深さ10～30cmの方形のものと、直径0.2～0.6m、深さ10～30cmの円形のものがある。ただ、建物や橋としてまとまるものは確認できなかった。また、D 1地区検出の柱穴と組み合わせる可能性のものもみられたが、建物などとしてまとまるものは認められなかった。柱穴 S P114・115・126・166などから土器が出土した(第6図1～6)。

また、D 2地区の北半部には遺物包含層が明瞭に認められ、多数の土器が出土した(第6図18～39)。柱穴や土坑から出土する遺物は、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものであるが、遺物包含層からは古墳時代や平安時代のももみられる。

2) E 2地区(第3図左)



第2図 調査区配置図

D2地区と同様に、昨年度調査を行ったE1地区の東側に設定した調査区である。調査区の大きさは全長76m、幅4mである。検出した遺構としては、柱穴や土坑、溝などがある。ただ、調査

区が狭いことなどから建物としてのまとまりや、全容の不明確なものが多い。また、出土遺物が少ないため、遺構は時期不明のものが多い。

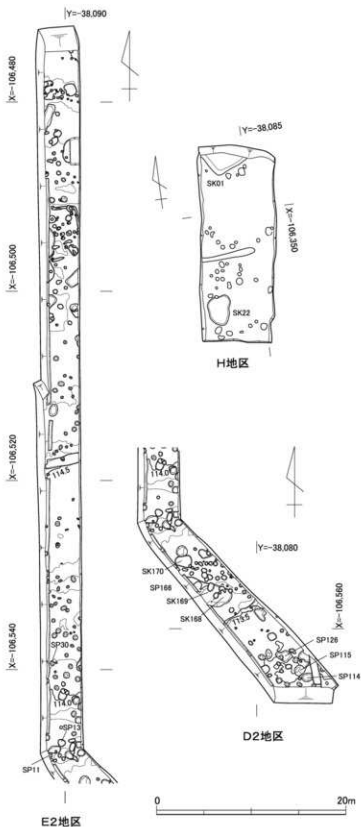
土坑は4基ほどを検出したが、遺構の性格などは不明である。また、出土遺物もほとんどない。

柱穴は小規模なものも含めて100基以上を検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2～0.6m、深さ10～20cmのものが多い。遺物の出土した柱穴は少なく、柱穴SP11・13・30などに限られる(第7図40～43)。

調査区南端付近では遺物包含層が厚く堆積しており、灰釉陶器や緑釉陶器を含む多数の遺物が出土した(第7図46～58)。弥生時代や古墳時代、奈良時代の遺物もあるが、平安時代の遺物が多い。また、縄文土器の破片も出土した(第7図44・45)。この遺物包含層はD2地区から続くものであり、昨年度の調査成果と合わせると、D地区からE地区の南端にかけて、飛鳥・奈良時代の遺構が広がっていたと判断される。また、縄文時代早期の遺物もほぼ同一地点で出土していることからその広がりが注意される。

3) H地区(第3図右上)

昨年度調査を行ったG地区の北



第3図 D2・E2・H地区遺構配置図

側に位置する。東西に横切る農道との交差点部分に当たるため、集中的に調査を実施し、I地区の重機掘削土で埋め戻した。調査区の大きさは全長20m、幅8mの調査区である。検出した遺構としては柱穴や土坑などがある。遺構の残存状況は良好とはいえず、出土した遺物も少ない(第7図59～65)。検出した遺構の時期はおおむね中世と思われるが、乱立や遺構から奈良時代の須臾器や瓦が出土しており、付近に奈良時代の遺構が存在した可能性もある。

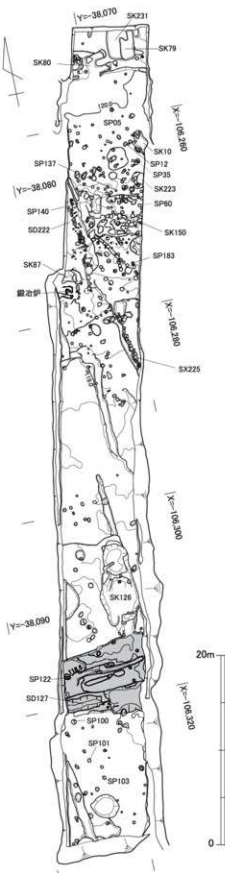
4) I地区南調査区(第4図)

H地区の北側に設定した調査区である。両調査区の間には埋設管があるため、両者をつないで調査することはできなかった。調査区の大きさは全長88m、幅8mである。検出した遺構としては土坑や柱穴、溝、石垣状遺構、鍛冶炉などがある。

石垣状遺構 S X225 調査区の中央、やや北寄りを、おおむね南北方向に延びる列石で、北端で西に向かって直角に折れる。検出長は7.3mである。列石の高さは最大で0.4mである。一辺30～40cm程度の角礫を積み上げるが、乱雑であることから石垣そのものではなく、基礎部分か、他の用途の遺構と考えられる。礫を据えるための幅約1m、深さ15～30cm程度の溝を掘る。溝の北端は長さ2.2m、深さ1.5m程度の土坑状を呈する。据え付けのための溝から若干の遺物が出土した(第8図83～90)

溝 S D222 上記の石垣状遺構のほぼ延長上で検出した。方位はほぼ同一である。検出長7.5m、幅0.5m、深さ20cm前後である。溝に20～40cm程度の角礫が無造作に配されたような状況で検出した。溝からは比較的多数の遺物が出土した(第8図74～82)。

溝 S D127 調査区の南半で検出した調査区を東西に横切る溝である。調査前の水田畦畔とは異なる方向性を持ち、出土遺物などから中世段階の区画溝などになる可能性がある。なお、直上には厚さ20cm程度の礫層が厚く、またやや広い範囲に堆積していた(第4図網点の範囲)。溝や区画を礫で埋め立てたような例は、国営農地再編整



第4図 I地区(南調査区)遺構配置図

備事業に伴う第4次調査の際に検出例がある。⁽⁸³⁾

柱穴群 柱穴は200基近くを検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2~0.5m、深さ15~30cmのものが多い。ただ、建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。柱穴S P05は単独の柱穴であるが、土師器皿・杯が埋納されたような状況で出土した。遺物の出土した柱穴としてはS P05・12・35・60・100・101・103・122・137・140・183などがある(第8図93~105)。

土坑群 土坑は15基以上を検出したが、後述するS K87・150を除いてその性格等は不明なものが多い。S K87・150は、時期は明らかでないが、陥穴の可能性があるものとしてやや詳しく報告する。遺物の出土した土坑としてはS K10・79・80・126・223・231などがある(第8図66~73・106~108)。

(筒井崇史)

土坑S K87 東西に主軸をもつ長方形の土坑である。調査トレンチ西壁に接して部分的に検出した。長軸2.1m以上、短軸約1.6m、深さ0.5mである。壁面は、南壁、東壁を垂直に、北壁を斜めに整形している。長辺の一辺を斜めに作り、底面積を狭く掘り込む点が後述するS K150と類似する。埋土は、黒色土を主体とし、上部に赤褐色土が混じる。

土坑S K150 南北に主軸をもつ長方形の土坑である。長さ約2m、幅は北端と中央で約1m、南端で約0.8mである。深さは約45cmである。北壁・東壁・南壁は垂直に、西壁は斜めに整形されている。底面は、やや凹凸がある。中央で、直径約0.2m、深さ約6cmのビット1個を検出した。埋土は、黒色土を主体とし、一部に暗黄色粘質土が混じる。

鍛冶炉跡 直径約28cmの環状の焼土である。焼土の中央が椀状に丸く掘られており、底部に少量の鉄滓が遺存していた。炉底のみが遺存したものと考えられる。炉底の平面形は、長軸14cm、短軸12.6cmの楕円形で、深さは約7cmである。地山を掘り凹めて作られている。炉底滓は失われており、暗青灰色粘土で埋設していた。暗青灰色粘土の一部を採取して洗浄したが、微量の滓を認めたのみで、鍛造剥片や湯玉などを検出することはできなかった。

焼土は、炉底を中心として幅約7cmの幅で巡り、南側の一端が開口する「C」字形をしている。この焼土は、地山が被熱して赤色化したものである。したがって、炉壁は、円筒形で7cm以上の厚みをもつものであったことがわかる。開口部は、還元した灰色で、幅が約6cmである。この場所にフイゴ羽口が設置されていたと推測される。

(田代 弘)

5) I 地区北調査区(第5図)

I 地区南調査区の北側約40mに設定した調査区である。両調査区の間が農道との交差点に当たるため、平成21年度に調査を実施している。調査区の大きさは全長70m、幅8mである。検出した遺構としては土器溜まりや土坑、柱穴、溝などがある。

土器溜まり 調査区の北端で検出した土師器皿・杯・椀・甕、瓦器椀・皿などを中心に、輸入陶磁器などが大きく6か所程度のまとまりをもって検出された(A~F群、写真図版第6・7)。遺物のまとまりとしては、円形にまとまるもの(C群)、直線状に並ぶもの(A・B群)、広い範囲

に土器が集中するもの(D群)などがある。いずれの土器溜まりも掘形を確認することができなかったことから、屋外に土器をまとめておいたのではないかと推定される。また、土器の周辺に関連する建物などが存在する可能性も考えられたが、柱穴の数が多く、抽出することはできなかった。さらに、これらの土器群を取り上げた後もその下層から多数の柱穴が検出された。

調査中に認識したまとまりが、何らかの行為の1単位であるかどうかは明らかにできなかった。しかし、出土状況から一括性の高い一群であることは明らかで、可能な限り図示し報告することとした(第9図120～第11図243)。時期としては中世前半、11世紀後半～12世紀代と考えられる。

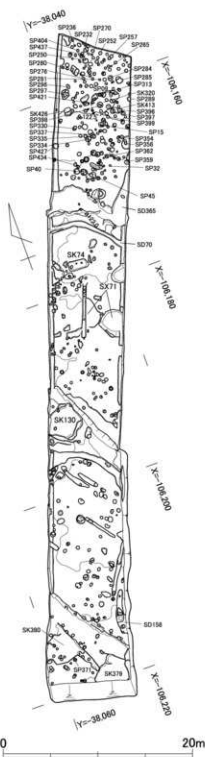
溝 S D365 調査区の北部、トレンチ東壁に接して部分的に検出した。水田の造成に伴って南側は大きく削られているようである。検出長4.5m、幅1.5m以上、深さ0.3m前後を測る。古墳時代の須恵器高杯が出土しており(第13図336)、国分古墳群を構成した古墳の周溝の可能性もあるが、今回の調査では古墳の徴候をは認められなかった。

柱穴群 柱穴は350基以上を検出したが、大半は円形の柱穴である。直径0.2～0.5m、深さ10～20cmのものが多い。ただ、建物や柵としてまとまるものは確認できなかった。遺物の出土した柱穴としては、柱穴 S P09・15・32・40・45・232・236・250・252・257・265・270・276・280・281・284・285・289・296・297・313・330・334・335・337・356・359・362・371・396・397・398・399・404・421・427・434・437・354などがある(第12図244～第13図325)。

土坑群 土坑は10基以上を検出したが、後述する S K74を除いてその性格等は不明なものが多い。S K74は、時期は明らかでないが、陥穴の可能性のあるものである。遺物の出土した土坑としては S K130・320・379・380・413・426などがある(第13図326～335・340・341・343～346)。

(筒井崇史)

土坑 S K74 南北主軸の隅丸方形の土坑である。規模は、長軸約2.1m、短軸約0.96m、深さ約0.46mである。壁面、底面は丁寧に成形している。底面は平坦に作られ、直径5～10cm、深さ



第5図 I地区(北調査区)遺構配置図

10cm前後のピットが複数認められた。杭状の逆茂木の痕跡とみられる。埋土は、黒色土が主体であり、一部に黄色土ブロックが少量みとめられる。

(田代 弘)

5. 出土遺物

1) 土器・瓦

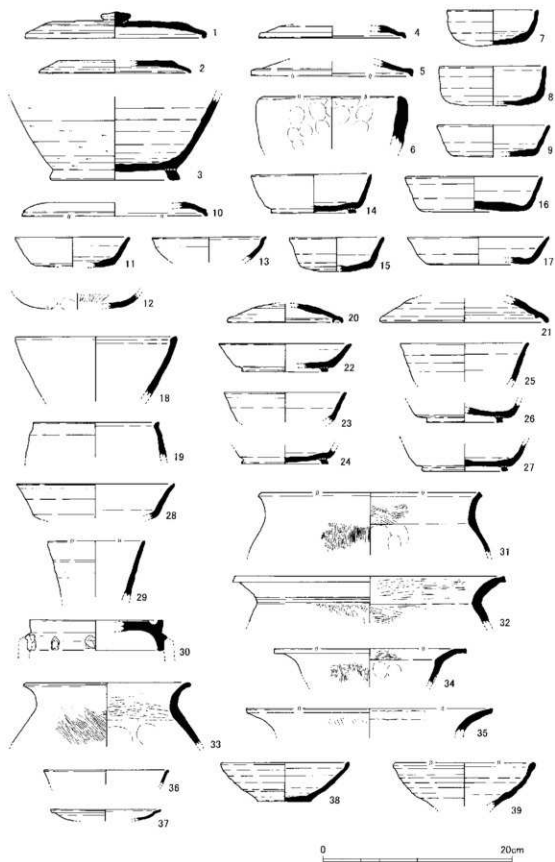
(1) D-2地区(第6図1~39) 1は柱穴S P126出土の須恵器杯B蓋である。⁽²⁴⁾ 2・3はS P115出土の須恵器杯B蓋と壺の底部である。4・5はS P166出土の須恵器杯B蓋の口縁部である。6はS P144出土の製埴土器である。7は土坑S K170出土の須恵器杯Gである。8・9はS K171出土の須恵器杯Gと杯Aである。10~12はS K168から出土した。10は須恵器杯B蓋、11は須恵器杯Aである。12は土師器杯で、斜放射暗文がみられる。13~17はS K169から出土した。13は土師器杯である。14~17は須恵器で、14は杯B、15は杯Gもしくは杯A、16・17は杯Aである。

18~39は遺物包含層から出土したものである。18は土師器壺の口縁と思われる、口縁端部内面が肥厚する。19は土師器鉢であろうか。18・19は古墳時代のもと思われる。20~30は須恵器である。20・21は口縁部内面にかえりを有する杯B蓋である。どちらも飛鳥時代のものである。22~28は杯もしくは杯Bである。いずれも奈良時代のもと思われる。29は提瓶もしくは長頸壺の口縁部と思われる。古墳時代後期ないし飛鳥時代のもであろう。30は蹄脚円面碗の破片である。蹄脚はいずれも剥離して残存しない。奈良時代のものである。31~35は土師器で、31~33は甕、34・35は銅である。いずれも飛鳥~奈良時代のもと思われる。36は緑軸陶器杯ないし碗の破片である。37は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。38・39は須恵器杯ないし碗である。36~39は平安時代のものである。

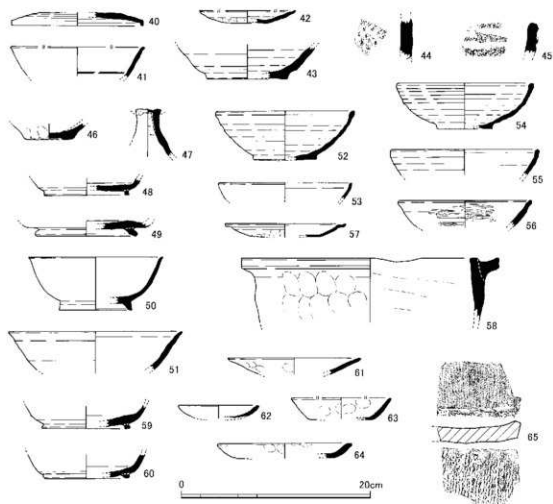
(2) E-2地区(第7図40~58) 40は柱穴S P13出土の須恵器杯B蓋である。41はS P30出土の緑軸陶器碗の破片である。42・43はS P11出土で、42は土師器皿、43は須恵器碗である。44~58は遺物包含層出土のものである。44・45は縄文時代早期の押型土器の破片である。46は弥生土器甕の底部、47は古墳ないし飛鳥時代の須恵器高杯脚部と思われる。48・49は須恵器杯Bの底部で、奈良時代のものである。50は灰軸陶器碗、51は緑軸陶器碗、52~55は須恵器碗、56は黒色土器碗、57は土師器皿、58は土師器羽釜である。いずれも平安時代のもと思われる。

(3) H地区(第7図59~65) 59・60は須恵器杯Bの底部であるが、中世以降の遺構に混入して出土した。61~63は土坑S K01出土の土師器皿もしくは杯である。64はS K22出土の土師器皿である。65は平瓦であるが、中世以降の遺構に混入して出土した。凸面に縄タキ痕跡、凹面に布目がみられる。奈良時代のもであろう。

(4) I地区南調査区(第8図66~119) 66は土坑S K79出土の土師器皿である。67・68はS K80から出土したもので、67は土師器皿、68は白磁の底部である。69・72・73はS K10から出土したもので、69は土師器皿、72は瓦質土器の鉢、73は青磁碗である。70はS K231出土の土師器皿である。71はS K223出土の青磁碗である。74~82は溝S D222から出土した。74~76は土師器皿ないし杯、77~79は土師器皿、80は青磁碗、81は須恵器甕である。82は古瀬戸の火鉢であろうか。



第6図 D2地区出土遺物実測図



第7図 E2・H地区出土遺物実測図

83～90は石垣状遺構 S X 225出土である。83～88は土師器皿、89は須恵器鉢、90は土師器甕である。91・92は溝 S D 127出土で、91は土師器皿、92は備前焼摺り鉢である。

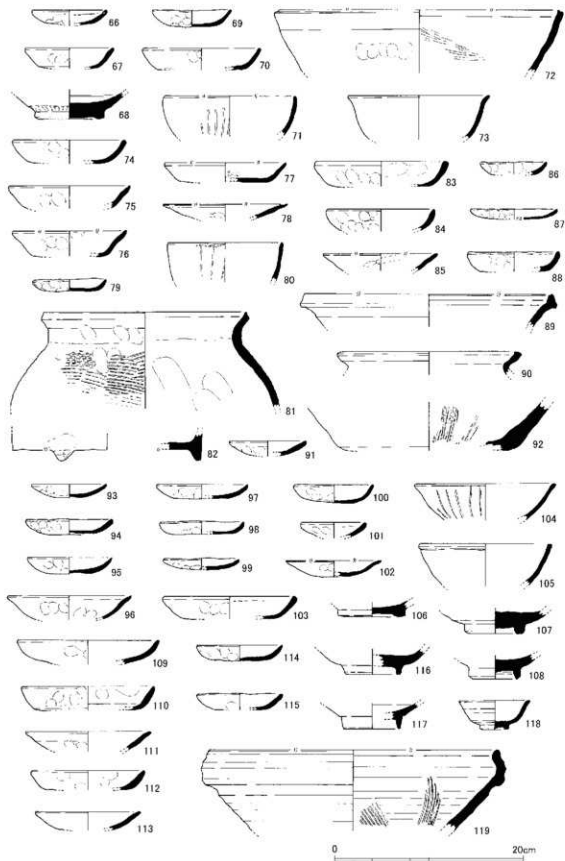
93～103は土師器皿ないし杯である。93～96は柱穴 S P 05、97は S P 12出土、98は S P 35、99は S P 60、100は S P 122、101は S P 140、102は S P 137、103は S P 183出土である。104は S P 101出土の青磁碗、105は S P 103出土の青磁碗である。106～108は S K 126の礫層から出土したもので、106は白磁碗の底部、107・108は青磁碗の底部である。

109～119は遺物包含層出土のものである。109～115は土師器皿、116は青磁碗の底部、117は白磁碗の底部、118は小型の白磁碗である。119は備前焼摺り鉢である。

以上の I 地区(南調査区)で出土した土器類はおおむね中世後半(15～16世紀)と思われる。

(5) I 地区北調査区(第9図120～第14図392) 120～141は土器溜まり A 群から出土したものである。120・121は大型の土師器皿である。122～135は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈するもの、丸く収めるもの、外反気味を呈するものなどがある。136～140は瓦器碗である。141は山茶碗の底部である。

142～147は土器溜まり B 群から出土したものである。142・143は土師器皿である。144・145は



第8図 I地区(南調査区)出土遺物実測図

瓦器碗である。146・147は瓦器皿である。

148～190は土器溜まりC群から出土したものである。148～152は土師器碗である。いずれも回転台を使用したもので、148は底部外面に糸切り痕が残る。153～155は大型の土師器皿である。156～181は小型の土師器皿である。156～171は口縁部が「て」字状ないし、その退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。175～179は回転台を使用した皿で、底部外面に糸切り痕が残る。平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。180・181は平高台状の底部を有する回転台成形の皿で、底部外面に糸切り痕が残る。182～185は瓦器碗である。いずれも口縁部内面に沈線を有する。183はやや内湾度の強い個体である。186・187は瓦器皿である。188は白磁碗である。189は土師器甕、190は土師器鍋である。189は不明であるが、190は奈良時代のものである可能性が高い。

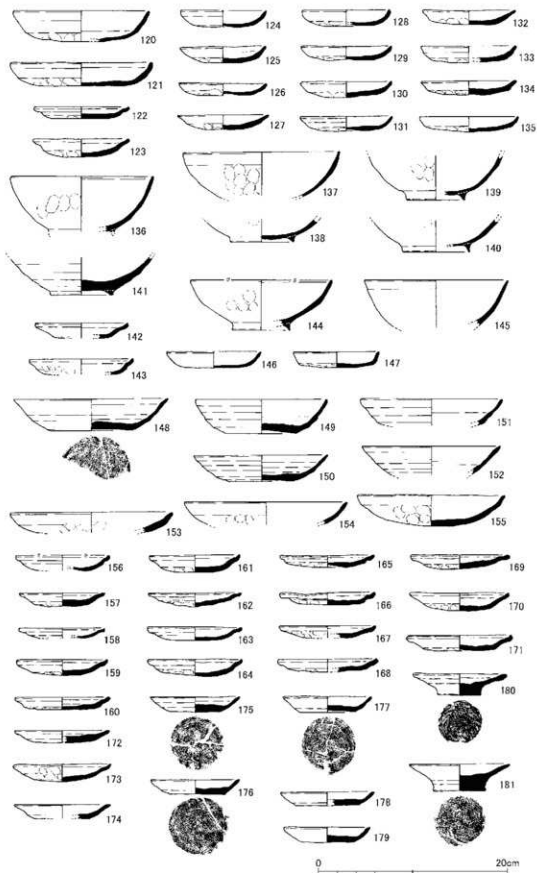
191～219は土器溜まりD群から出土したものである。191・193～195は遺存状態の良好なもの少ないが、回転台を使用した土師器碗である。193～195は底部外面に糸切り痕が残る。192は土師器の杯であろうか。196・197は大型の土師器皿である。198・199は足高の高台を有する土師器の杯ないし皿である。200～210は小型の土師器皿である。200～204は口縁部が「て」字状ないしその退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。207～210は回転台を使用した皿で、平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。底部外面に糸切り痕が残る。211～218は瓦器碗である。211は底部内面に暗文を施す。211～214・216は口縁部内面に沈線を1条施す。218は小型の瓦器碗である。219は瓦器皿である。

224～243は土器溜まりE群から出土したものである。224・225は回転台成形の土師器碗である。底部外面に糸切り痕が残る。226は土師器杯ないし皿、227は大型の土師器皿である。228～239は小型の土師器皿である。228～232は口縁部が「て」字状ないしその退化形態を呈し、端部をつまみ上げ気味にするものが多い。233・234は手づくねの皿である。235～239は回転台を使用した皿で、底部外面に糸切り痕が残る。平底に斜め上外方に延びる口縁部からなる。240・241は平高台状の底部を有する回転台成形の皿で、底部外面に糸切り痕が残る。242・243は瓦器碗である。ともに口縁部内面に沈線を施し、242は底部内面に格子状の暗文を施す。

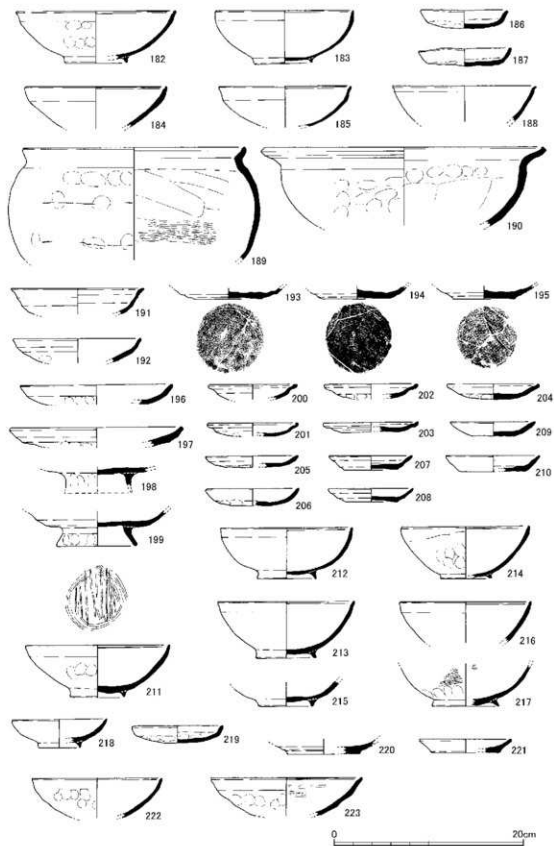
220～223は土器溜まりF群から出土したものである。220は土師器碗である。221は土師器皿である。222・223は瓦器碗である。

以上の土器溜まり出土土器はおおむね中世前半(11世紀後半～12世紀代)と思われる。

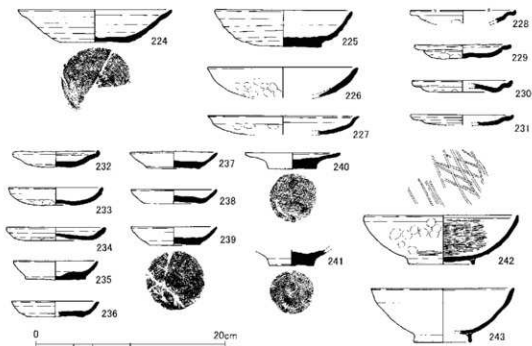
244は柱穴S P 09出土の瓦器碗である。245はS P 32出土の回転台成形の土師器碗の底部である。246・247はS P 40出土の土師器皿である。248はS P 45出土の土師器皿である。249はS P 15出土の大型の土師器皿である。250はS P 236出土の瓦器碗の底部である。251はS P 252出土の瓦器碗である。252はS P 276出土の瓦器碗である。253・254はS P 270出土の土師器皿で、253は手づくね、254は回転台使用である。255・256はS P 285出土の土師器皿である。257はS P 232出土の土師器皿である。258はS P 250出土の土師器皿である。259～261・265・266はS P 257出土の土師器皿である。262はS P 296出土の土師器皿である。263・264はS P 265から出土したもので、263



第9図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(1)

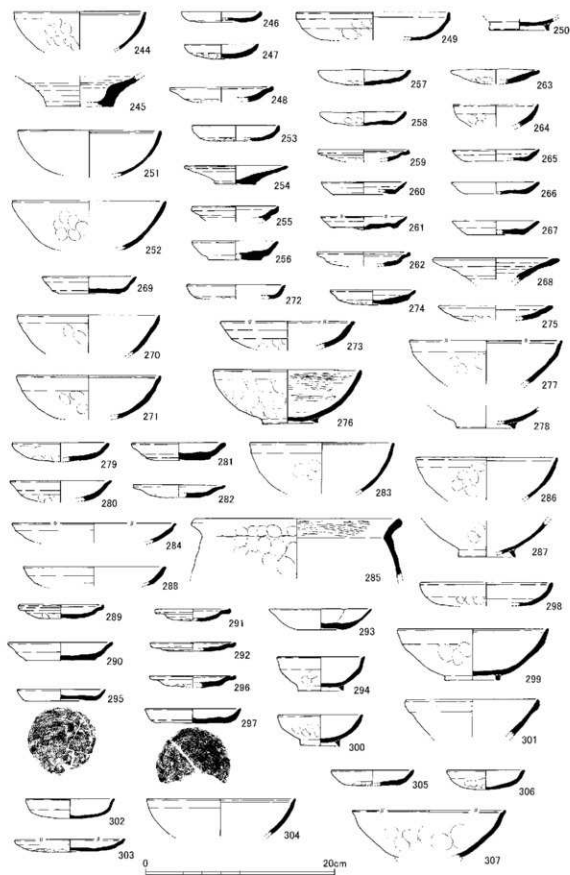


第10図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(2)

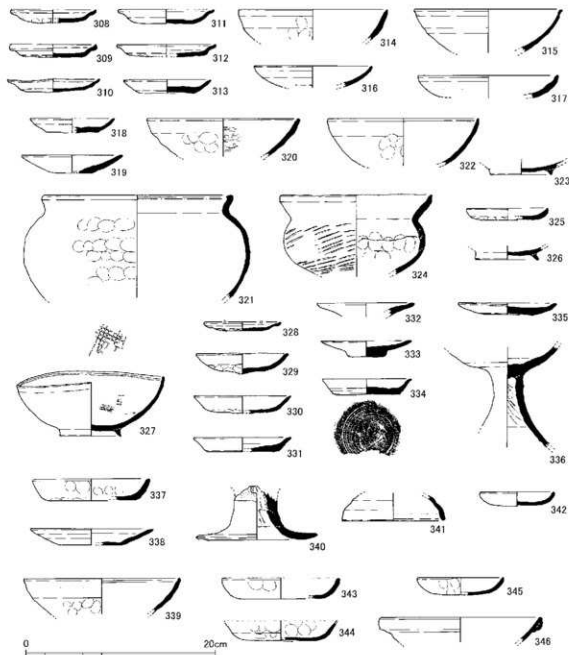


第11図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(3)

は土師器皿、264は小型の瓦器椀である。267はS P 284出土の土師器皿である。268は回転台使用の土師器杯である。269～271はS P 289から出土したもので、269は土師器皿、270・271は瓦器椀である。272・273はS P 280出土の土師器杯ないし皿である。274～278はS P 297から出土したもので、274・275は土師器皿、276～278は瓦器椀である。279・280はS P 313出土の土師器皿である。281はS P 281出土の土師器皿である。282・283はS P 334から出土のもので、282は土師器皿、283は瓦器椀である。284はS P 335出土の土師器皿である。285はS P 330出土の土師器甕である。286・287はS P 337出土の瓦器椀である。288・289はS P 362出土の土師器皿である。290はS P 359出土の土師器皿である。291～293はS P 356から出土したもので、291・292は土師器皿、293は白磁皿である。294はS P 396出土の小型の瓦器椀である。295～301はS P 397出土のものである。295・297は回転台成形の土師器皿である。296は「て」字状口縁を呈する土師器皿である。298は大型の土師器皿である。299は瓦器椀である。300は小型の瓦器椀である。301は白磁椀である。302～304はS P 399から出土したもので、302は瓦器皿、303は土師器皿、304は瓦器椀である。305～307はS P 404から出土したもので、305・306は土師器皿、307は瓦器椀である。308～316はS P 398から出土したものである。308～313は土師器皿、314は瓦器椀、315は白磁椀、316は白磁皿である。317はS P 427出土の大型の土師器皿である。318はS P 421出土の土師器皿である。319～321はS P 434出土のものである。319は土師器杯、320は瓦器椀、321は土師器甕である。322・323はS P 437出土の瓦器椀である。324はS P 354から出土した弥生土器鉢である。外面にタキ調整を施す。周辺に弥生時代の遺構が広がっていた可能性を示す。325はS P 276出土の土師器皿である。339はS P 371出土の瓦器椀である。以上の柱穴出土土器はおおむね中世前半頃(11



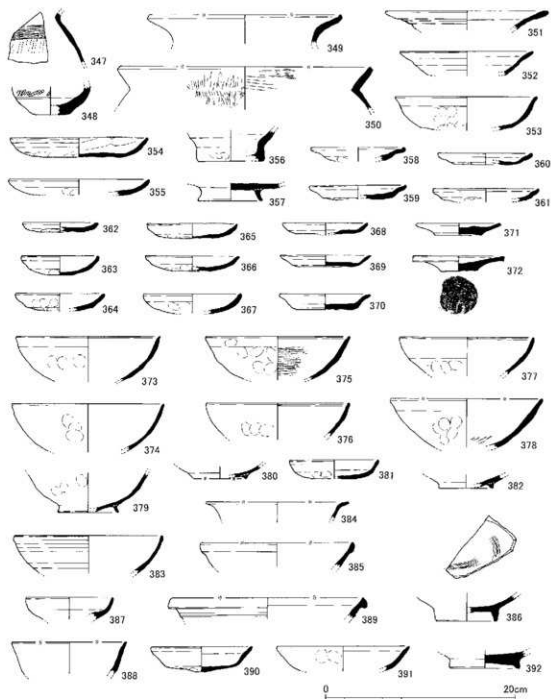
第12図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(4)



第13図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(5)

世紀後半～12世紀代)と思われる。

326は土坑S K413出土の瓦器碗の底部である。327はSK320出土の瓦器碗である。底部内面に格子状の暗文を施す。328～335はS K426から出土したものである。いずれも土師器皿である。333～335は成形に回転台を使用している。336は溝S D365から出土した須恵器高杯の杯部から脚部にかけての部分である。おそらく古墳時代後期頃の高杯と考えられる。337は溝S D70から出土した土師器皿である。338は落ち込みS X71出土の土師器皿である。340・341はS K130から出土したもので、340は土師器高杯の脚部、341は須恵器杯H蓋である。342は溝S D158出土の土師器皿である。343・344はS K379出土の土師器皿である。345・346はS K380から出土したもので、

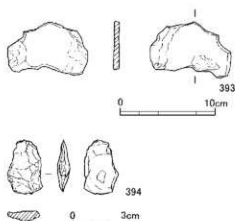


第14図 I地区(北調査区)出土遺物実測図(6)

345は土師器皿、346は白磁碗である。

347～392は遺物包含層から出土したものである。このうち、347～386は溝SD701よりも北東側で出土したものである。347は弥生土器甕ないし壺の肩部の破片で、外面に櫛描き文7条と列点文を施す。348は須恵器の甕の体部片と思われる。体部中位に列点文とその直下に沈線を1条施す。349・350は土師器甕である。奈良時代を前後する時期のものであろうか。351～353は回転台を使用した土師器の杯ないし碗である。354・355は大型の土師器皿である。356は底部中央が

大きく凹む土師器杯と思われる。357はやや足高気味の高台を有する土師器の杯か皿である。358～372は小型の土師器皿である。358～361は口縁部が「て」字状を呈する。369～372は回転台を使用したもので、372は口縁端部が面をなす。373～380は瓦器碗である。381は瓦器皿である。382は黒色土器碗の底部と思われる。383～386は白磁碗である。383・385は口縁部外面が玉縁状を呈し、384は大きく外反する。386は削り出し高台である。



第15図 鉄製品・石器実測図

387～392は溝S D70よりも南西側、土坑S K130よ

りも北東側で出土したものである。387は須恵器高杯杯部と思われ、国分古墳群に伴うものであろうか。388は須恵器杯である。389は須恵器壺または甕であろう。外面に沈線が2条めぐる。390・391は土師器杯である。392は山茶碗の底部であろう。

(筒井崇史)

2) 鉄製品

鉄磬⁽⁸⁵⁾(第15図393)は、D地区南端の遺物包含層中から出土した。左右均等の山形で、肩間8.2cm、絃が7.8cm、博が4.2cm、厚さ5mmの小形の鉄製品である。首稜、頸縁、足縁、脛縁など磬の特徴が表現されている。しかし、首縁、肩縁をゆるやかに凹ませて作り、頸縁を突出させる点、脛縁・足縁をゆるやかに外湾させ、直線的に作る点、銑を明瞭に作り出さない点など簡素な作りであり、平安時代の鑄造銅製品にみる特徴とは異なる点が多い。図右側の外縁が裏面に比べてわずかに狭いように見える。表裏があるようであるが、器面に撞座、文様などは認められない。素文片面鉄磬である。紐の有無、形状については現状では明らかではない。突出した頸縁に孔を開け、紐とした可能性を考えておきたい。京都府内では、京都市京北町周山廃寺⁽⁸⁶⁾、土安久遺跡⁽⁸⁷⁾、綾部市木寺北遺跡⁽⁸⁸⁾で出土している。

3) 石器類

楔形石器(第15図394)は、I地区(北調査区)の柱穴S P398から出土した。鉄滓が認められたため、土壌採取をして水洗選別を行ったところ、当該遺物を検出した。縦長剥片を横位にして、両極打法により整形したものである。上下両端には階段状剝離が連続して用いられる。b面には両極打法に伴う裁断面がみられる。c面には、バルブが残る。長さ3.9cm、横長1.9cm、厚さ0.6cmを測る。チャート製である。

(田代 弘)

6. まとめ

今回の調査では、これまでの国営農地再編整備事業や本事業に伴う発掘調査によって明らかになっている成果に加えて、新たな知見をいくつか得ることができた。今回の調査で明らかになっ

た点や充実した点について、以下の列記する。

① D2地区北半からE2地区南端にかけて、奈良時代の土器とともに平安時代の遺物を多数含む遺物包含層を確認した。また、鉄器も同じ遺物包含層から出土した。蔵垣内遺跡では平安時代の様相が不明確であることから、周辺における土地利用の一端を示すものと考えられる。

② I地区北調査区の北端で、中世の土器溜まりを検出した。検出状況から屋外に多数の土器を配したものと思われるが、どのような行為が行われたのかは不明である。例えば地鎮などの行為が考えられるが、詳細は今後の類例の増加を待ちたい。

③ I地区南調査区では中世後半の土器が多数出土した。調査区の北西側で、蔵垣内遺跡第4次調査の際に丹波国分寺の子院に関連する遺構・遺物が検出されており、一連の遺構群である可能性がある。

(筒井崇史)

注1 岡崎研一「蔵垣内遺跡第11次発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注2 調査補助員：天池佐栄子・安井蓉子

整理員：中島恵美子・松下道子・井上聡・茶園矢壽子・清水友佳子・川村真由美・谷上真由美・木村啓章・村岡弥生

作業員：杉崎征夫・安藤美智子・山田優・鴨井そと子・島津イト子・八木美代子・谷尻小ちま・森川久男・森川加代子・安藤恵子・安藤恵利奈・中野勇雄・平野かすみ・岡本晴子・松田弘和・広瀬秀夫・橋本辰彦・山田ミンダ・伊藤文美枝・田中康民・野々村絃・西村真弓・八木まゆみ・西田和則・西田裕子・杉崎清彦

注3 B6地区検出の溝SD02や段状区画SX04などが礫によって埋め立てられていた。森島康雄・黒坪一樹・筒井崇史ほか「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16・17・18年度発掘調査報告 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群(Ⅱ)」(「京都府遺跡調査報告集」第134冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

注4 奈良時代の土師器・須恵器の器種名については奈良文化財研究所の分類名称を用いる。

小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」(『平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報』第26冊 奈良国立文化財研究所) 1976

神野恵「土器類」(『平城宮発掘調査報告XVI -兵部省地区の調査- 奈良文化財研究所学報』第70冊 奈良文化財研究所) 2005

注5 鉄器の執筆に当たっては以下の文献を参考にした。

久保常晴「梵首具」(『新版考古学講座』第8巻 雄山閣) 1979

坂詰秀一「図録 歴史考古学の基礎知識」柏書房 1980

保坂三郎「けい 器」『国史大辞典』吉川弘文館) 1985

坂詰秀一編『仏教考古学事典』2003

注6 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』第45巻2号 日本考古学会) 1959

注7 田代 弘「上安久城跡」(「京都府遺跡調査概報」第117冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

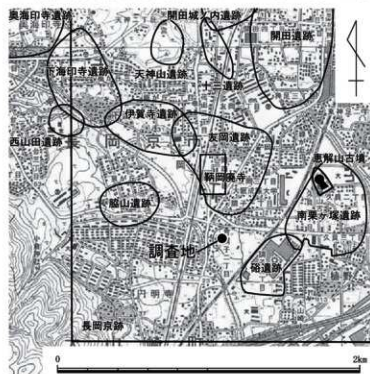
注8 中村孝之「木寺北遺跡発掘調査概報 綾部市文化財調査報告」第12集 綾部市教育委員会 1985

3.長岡京跡右京第968次(7ANRHK-8地区) 発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は平成21年度主要地方道大山崎大枝線道路改良事業にともなう、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査地は長岡京市調子2丁目に所在し、長岡京跡の条坊復原では長岡京右京九条三坊八町、八条大路推定地(新条坊)にあたる。周辺では、京都第二外環状道路関連の調査として、平成16年度に長岡京跡右京第825次調査^(R1)、平成17年度に長岡京跡右京第851・902次調査^(R2)、平成19年度に長岡京跡右京第926・928次調査^(R3)、平成20年度に長岡京跡右京第938・946次調査^(R4)が行われている。今回の調査地に隣接する右京第825次調査の10～12トレンチ、右京第946次調査のa2・c1地区では、小泉川の旧河道とみられる自然流路のほか、平安時代の溝・掘立柱建物などが検出されている。

今回の調査地は道路建設工事との兼ね合いで、先行して調査を行う東側半分を調子c2地区、西側半分をc3地区と呼称し、それぞれ、着手順にc2-1地区・c2-2地区、c3-1地区・c3-2地区・c3-3地区と枝番をつけて調査区名とした。現地調査は平成21年4月8日～11月27日まで行い、調査第2課調査第2係主任調査員松井忠春・森島康雄、調査員奈良康正が担当した。調査に要した経費は全額京都府建設交通部が負担した。なお、国土座標は日本測地系を使用している。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

調査対象地は上下2段の耕作地にまたがっている。北西部から張り出す上段は標高約19.4～19.5m、下段は標高約19.0～19.1mを測り、上段の縁辺に用水路が通っている。本報告ではこの水路より北西の上段に位置するc2-1・c3-2・c3-3地区を北部調査区、水路より南東の下段に位置するc2-2・c3-1地区を南部調査区として報告する(第3図)。

2. 検出遺構

北部調査区では、2面の遺構面を検出し、南部調査区では1

ぶい黄褐色粘質土(第4図7層)と明褐色
礫混じり粘質土(同9層)、黄褐色粘質土(第
5図5層)などが堆積している。これらの
層厚は西部では0.1mであるが、東に行く
に連れて厚くなり、東部では0.25mを測る。
北半と南半の土層の違いは、調査前の畑の
筆の違いを反映している。これらを除去し
た標高18.8~19.0mで第1遺構面の遺構群
を検出した。

第1遺構面では、江戸時代の大溝、土坑
などを検出した。

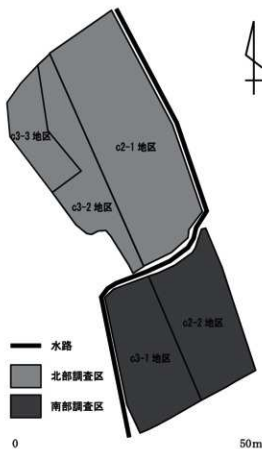
土坑 S K 23 (第6・7図) c2-1地区北
部で検出した浅い土坑である。最長辺12.7
mを測る不整四辺形を呈する。深さは0.2
mで、埋土は灰白色礫混じり粘質土のほぼ
単一層であるが、南肩付近の底部にのみ褐
色系の土がわずかに堆積している。

土坑 S K 28 (第6・8図) c2-1地区中央
部から南端にかけて検出した幅8m前後の
土坑である。深さは約0.2mを測り、埋土は上層のぶい
橙色礫混じり砂質土と下層の褐色細
砂の2層に分かれる。

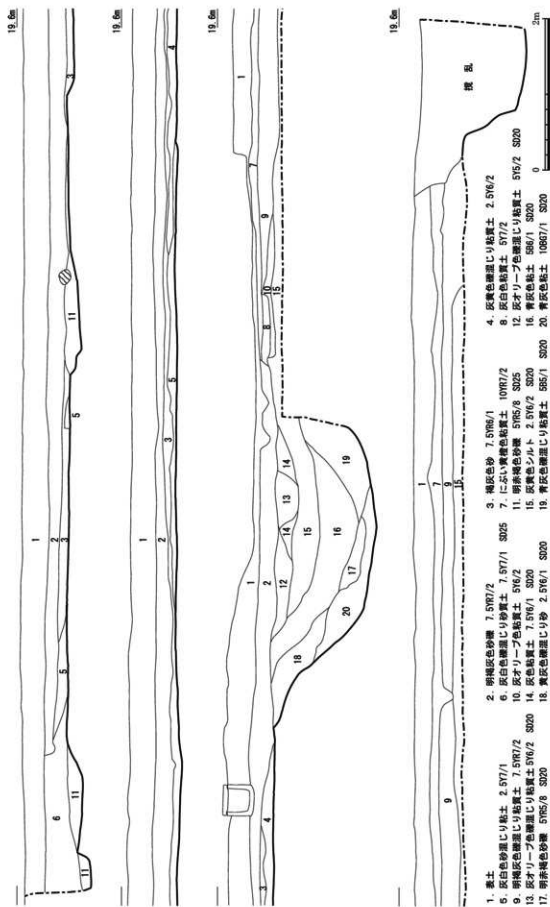
土坑 S K 22 (第6図) c2-1地区西端の中央部から南部にかけて検出した土坑である。S K 28
の西側にはほぼ平行し、東肩はS K 28によって削られていることから、S K 28に先行することがわ
かる。深さ0.2mを測るが、南端部では0.05mと浅くなっている。埋土は明赤灰色細礫である。

溝 S D 20 (第6・9図) c2-1地区東端部の南半で検出した溝である。溝の北端はc2-1地区中ほ
どで東に屈曲して調査区外に続き、南は南部調査区のc2-2地区に続く。断面形は浅い「V」字形
を呈するが、南端部4~5mは浅い「U」字形を呈する。東肩は調査区外であるが、調査区東端
では溝の深さが浅くなっていることから、幅6.5m程度と想定できる。深さは断面「V」字形の
部分で0.8~1.3m、断面「U」字形の部分で0.45mを測る。埋土は、断面「V」字形の部分では
中層の灰白色粘土(第9図I-I' 断面3層、J-J' 断面9層)を境に、上層では灰白色~灰黄色系
のシルト、下層は青灰色~緑灰色系の粘土が卓越し、断面「U」字形の部分では、褐色系~褐色
系の粘質土(第5図12~16層)が卓越する。

溝 S D 25 (第6・10図) c2-1地区東端部の北半で検出した溝である。南端はS D 20に切られ
ている。幅5m前後で、深さは約0.5mを測る。埋土は砂礫が卓越し、流水による堆積層(第10図6・
9層)が確認できる。



第3図 右京第968次調査地区割図 (S=1/800)



第4図 c2-1地区東壁断面図(S=1/50)

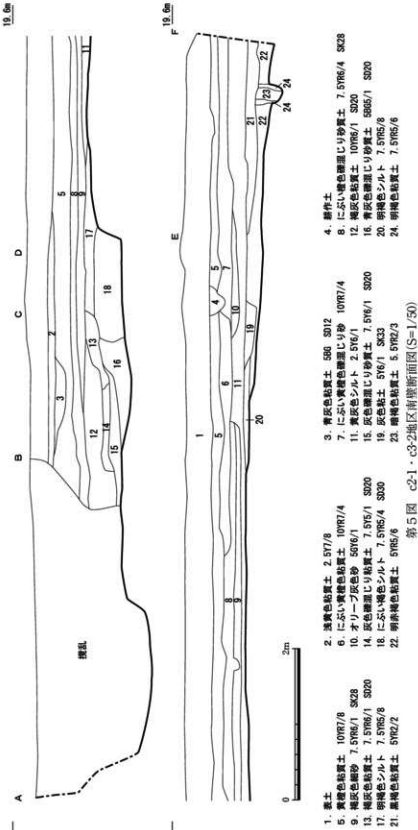
溝 S D24・29 (第6・11図) c2-1地区北部で検出した平行する溝である。上部を近代の溝に削平されている。幅0.5m前後、深さ0.15m前後を測る。埋土は灰色砂礫で S D24は下層にオリーブ灰色シルトが薄く堆積する。

溝 S D26・27 (第6・11図) c2-1・c3-2・c3-3地区で検出した平行する溝である。幅0.5m前後、深さ0.05m前後を測る。埋土は黄灰色粘質土で、S D27は南寄りの下層に灰黄色粘質土が堆積する。

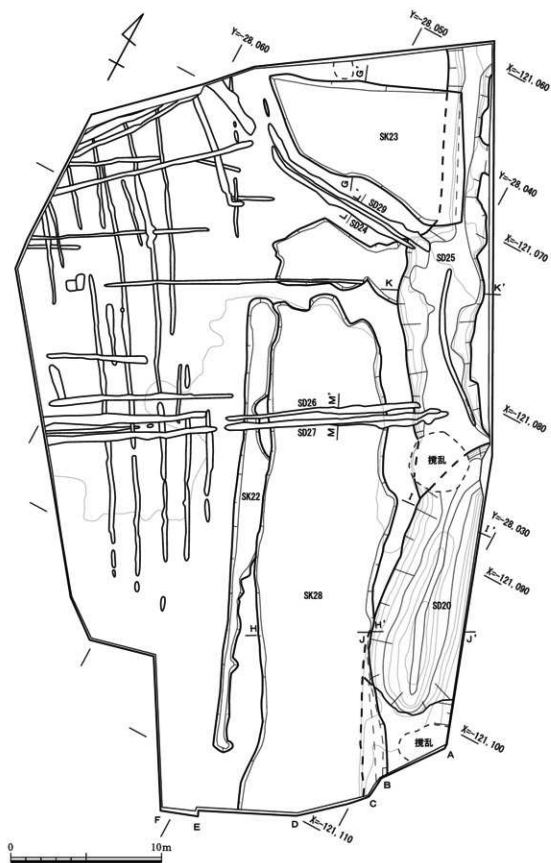
耕作溝群 c3-2・c3-3地区を中心に幅0.3m前後の耕作溝群を検出した。北西-南東方向の溝群が先行し、南西-北東方向の溝群が後出する。前者はc2-1地区では検出されず、後者はS D24とS D26の間でのみ検出される。

2) 北部調査区第2遺構面の遺構

第1遺構面の下層の灰色礫泥じり粘質土など(第12図1~5層)を除去すると、第2遺構面とな



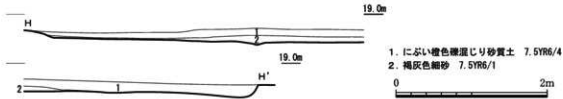
第5図 c2-1・c3-2地区南壁断面図(S=1/50)



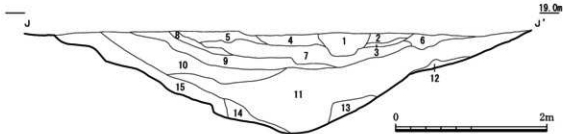
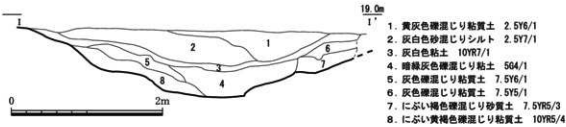
第6図 北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(近世)(S=1/250)



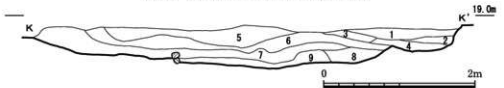
1. 灰白色礫混じり粘質土 10YR7/1 2. 褐灰色粘質土 10YR6/1 3. 明黄褐色砂 10YR6/6
第7図 c2-1地区土坑 S K 23断面図(S=1/50)



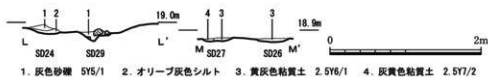
第8図 c2-1地区土坑 S K 28断面図(S=1/50)



第9図 c2-1地区溝 S D 20断面図(S=1/50)



第10図 c2-1地区溝 S D 25断面図(S=1/50)



第11図 c2-1地区溝 S D 24・29、溝 S D 26・27断面図(S=1/50)

る。第2遺構面は東に向かって低くなっており、平安時代の溝などを検出した。

溝 S D30 (第12～15図) c2-1地区で検出した溝である。南北40m余りを検出し、南端は調査区外に延びる。幅は6m以上で、東肩は第1遺構面の S D20・25によって削平されている。南側2/3は西肩に沿って1m前後の幅で深くなっており、南端から約15m付近が最も深くなっている。この部分は常に滞水していたようで、青灰色～黒灰色系のシルトや粘土が堆積しており、西肩には護岸の杭が打たれていた。鎌倉時代前期の遺物が出土した。

溝 S D36 (第13・19図) c3-2・c3-3地区で検出した南部調査区から続く。北端はc3-3地区南端付近で西に折れて調査区外に延びる。断面形は西肩が急傾斜であるのに対して、東は緩傾斜で肩の位置が不明瞭である。灰褐色～黒褐色系の細砂を主体とする砂質土が堆積している。平安時代前期～中期の遺物が出土した。

溝 S D50 (第13・16図) c3-2・c3-3地区で検出した溝である。幅約4mを測り、長さ14.5m分を検出した。西端は調査区外に延びる。深さは最深部で約0.9mを測る。平安時代後期の遺物が出土した。

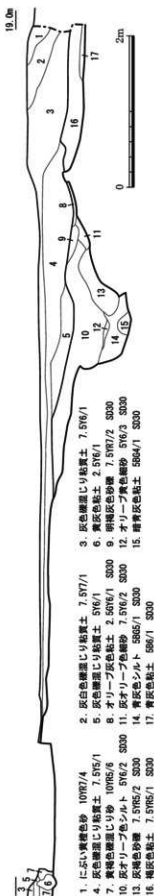
土坑 S K34 (第13・17図) c2-1地区北端で検出した土坑である。幅約2mを測り、北端は調査区外に延びる。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色粘質土、下層は青灰色粘土である。土坑としたが、S D30西肩の延長線上に位置することから、溝の一部の可能性がある。

ビット S P54・56・57 (第18図) c3-2地区南端で検出した3基のビットである。径0.15～0.25m、深さ0.1～0.15mを測る。建物を復原することはできないが、c3-2地区南壁(第5図23・24層)にもビットとみられるものが1基掛かっているため、S D36埋没後、この付近に小規模な建物が建っていたものと思われる。

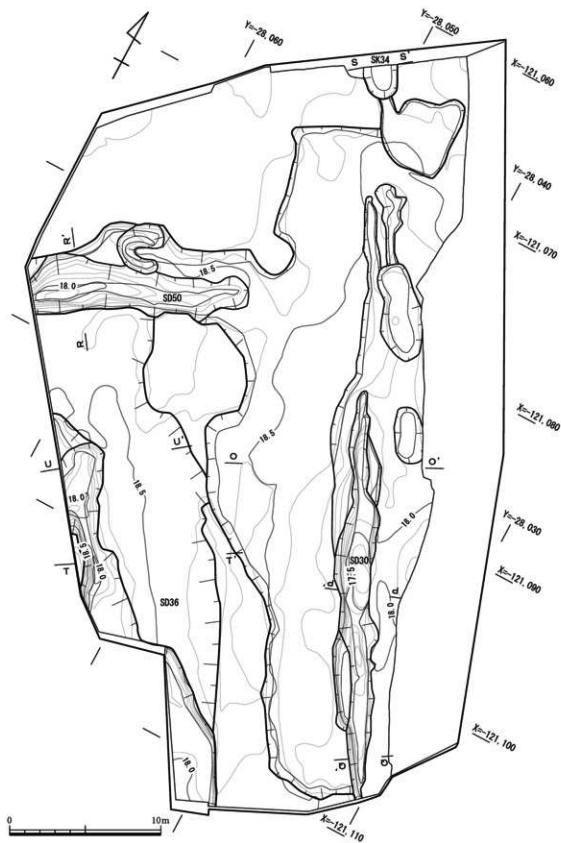
3) 南部調査区の遺構(第22図)

南部調査区はc2-2地区・c3-1地区の2地区に分けて調査を行った。調査面積は、それぞれ410㎡・390㎡である。南部調査区では遺構面は1面で、耕作土と灰白色の礫混じり粘質土などを除去した現地表面下約40cmの同一面で近世の遺構と古代・中世の遺構を検出した。検出した遺構は溝および流路などである。

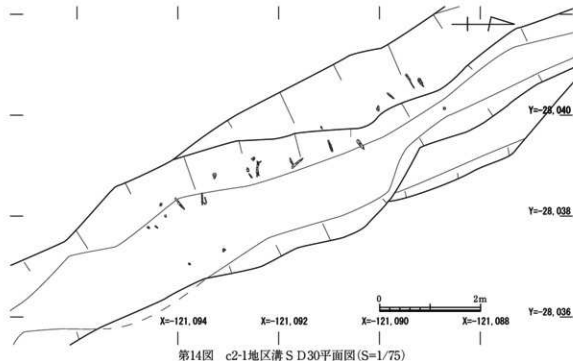
溝 S D20 (第20図) 北西から南東に延びる溝である。c2-1地



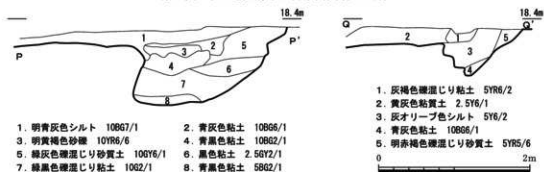
第12図 c2-1地区中央東断面図(S=1/50)



第13図 北部(c2-1・c3-2・c3-3地区)遺構平面図(古代・中世)(S=1/250)



第14図 c2-1地区溝 S D30平面図 (S=1/75)

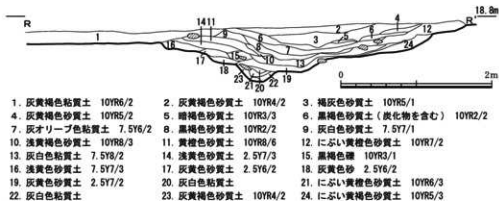


1. 明青灰色シルト 10B67/1
3. 明黄褐色砂礫 10YR6/6
5. 緑灰色礫混じり砂質土 10B76/1
7. 緑黒色礫混じり粘土 10G2/1

2. 青灰色粘土 10B66/1
4. 青黒色粘土 10B62/1
6. 黒色粘土 2.50Y2/1
8. 青黒色粘土 5B02/1

1. 灰褐色礫混じり粘土 5YR6/2
2. 黄灰色粘質土 2.5Y6/1
3. 灰オリーブ色シルト 5Y6/2
4. 青灰色粘土 10B66/1
5. 明赤褐色礫混じり砂質土 5YR5/6

第15図 c2-1地区溝 S D30断面図 (S=1/50)



1. 灰褐色粘質土 10YR6/2
4. 灰黄褐色砂質土 10YR5/2
7. 灰オリーブ色粘質土 7.5Y6/2
10. 淡黄褐色砂質土 10YR8/3
13. 灰白色粘質土 7.5Y8/2
16. 淡黄色砂質土 7.5Y7/3
19. 灰黄色砂質土 2.5Y7/2
22. 灰白色粘質土

2. 灰黄褐色砂質土 10YR4/2
5. 暗褐色砂質土 10YR3/3
8. 黒褐色砂質土 10YR2/2
11. 黄褐色砂質土 10YR8/6
14. 淡黄色砂質土 2.5Y7/3
17. 灰黄色砂質土 2.5Y6/2
20. 灰白色粘質土
23. 灰黄褐色砂質土 10YR4/2

3. 褐灰色砂質土 10YR5/1
6. 黒褐色砂質土 (炭化物を含む) 10YR2/2
9. 灰白色砂質土 7.5Y7/1
12. にぶい黄褐色砂質土 10YR7/2
15. 黒褐色礫 10YR3/1
18. 灰黄色砂 2.5Y6/2
21. にぶい黄褐色砂質土 10YR6/3
24. にぶい黄褐色砂質土 10YR5/3

第16図 c3-3地区溝 S D50断面図 (S=1/50)

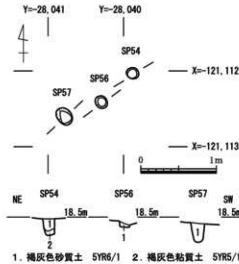


1. 褐灰色粘質土 5YR4/1
2. 青灰色粘土 5B5/1

第17図 c2-1地区土坑 S K34断面図 (S=1/50)

区第2遺構面のSD20に続く同一の溝と思われる。幅2.8~3.8m、深さ約0.5mを測る。埋土は砂礫を主体とする。

溝SD21(第20図) c2-2地区北西部で検出したSD20以前の遺構である。溝としたが、東端は調査区外に延びて不明であり、土坑の可能性もある。埋土は上層が灰色礫混じり砂質



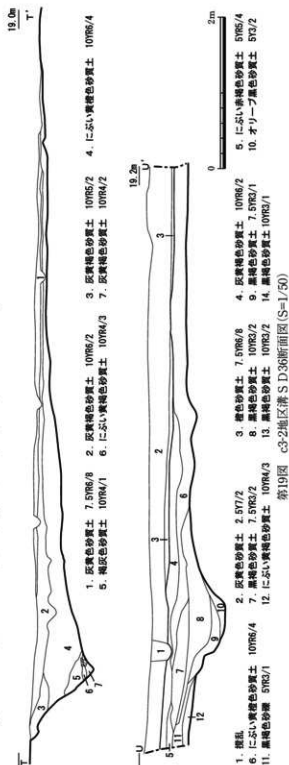
第18図 c3-2地区ピット平面図・断面図(S=1/50)

土などを主体とし、下層は青灰色礫混じり粘土や礫混じりのシルトを主体とする。埋没時期を特定できる遺物は出土しなかった。

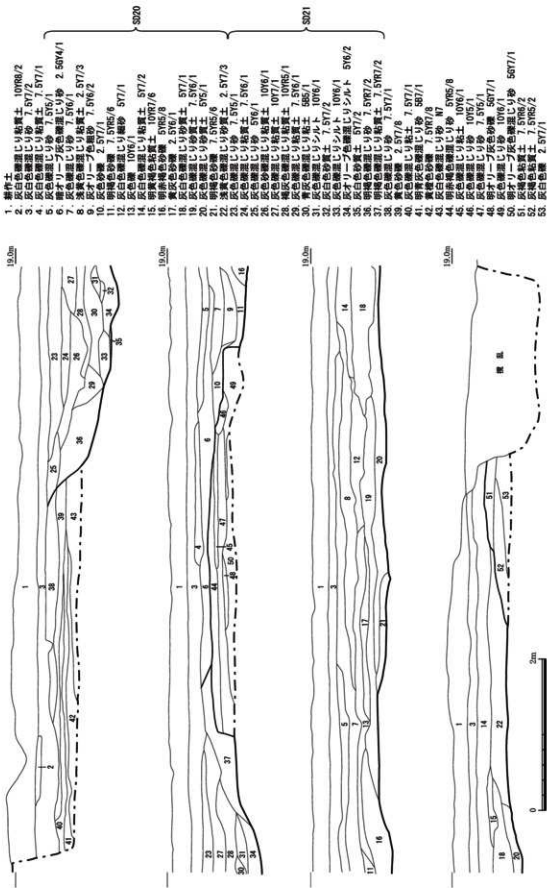
溝SD15(第23図) c3-1地区北東部からc2-2地区に続く溝である。西北西から東南東方向に延び、幅は西北西端では2.0m、東南東端で7.5mと東に向かって広がる。深さは西北西端では約0.2mと浅いが、SD16と切りあう部分では約0.7mを測り、東南東端では約0.3mと再び浅くなる。埋土は黄褐色系の砂質土が主体で、前述のSD16と切りあう深い部分では最下層に灰白色の粘土が堆積する。出土遺物は少ないが、平安時代中期～後期の土器片が出土した。

溝SD16(第24図) c2-2地区からc3-1地区に続く溝である。SD15とSX37に先行しSD36に後出する。埋土は赤褐色砂礫を主体とする。土師器皿・緑釉陶器碗など平安時代中期の土器が出土した。

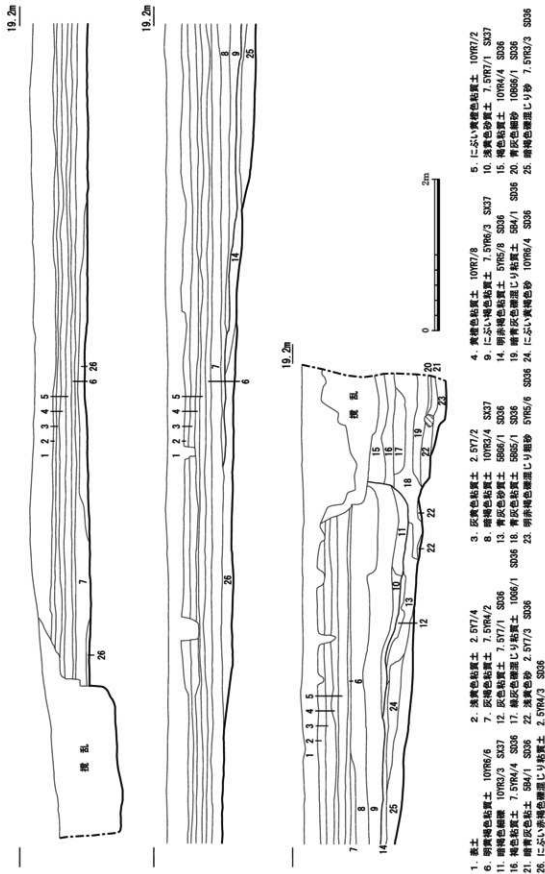
流路SD36(第21・27図) 北部調査区から続きc3-1地区の大半を占める。断面形は西肩が急傾斜であるのに対して、東は緩傾斜で肩の位置が不明瞭であり、c2-2地区を調査している段階では肩を認識できなかった。溝として調査をはじめ、その後、流路と判明したが、遺構の略号はSDのままとした。深さは最深部で約1.4mを測る。埋土は、上層が砂質土や粘質土を主体とし、下層は砂礫を主体とする。南半部の上層下位を中心に平安時代前期～中期の遺物が多量に出土した。



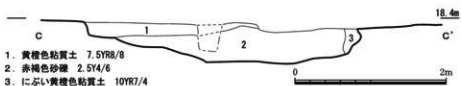
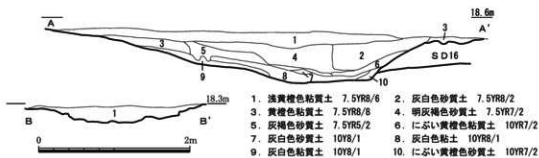
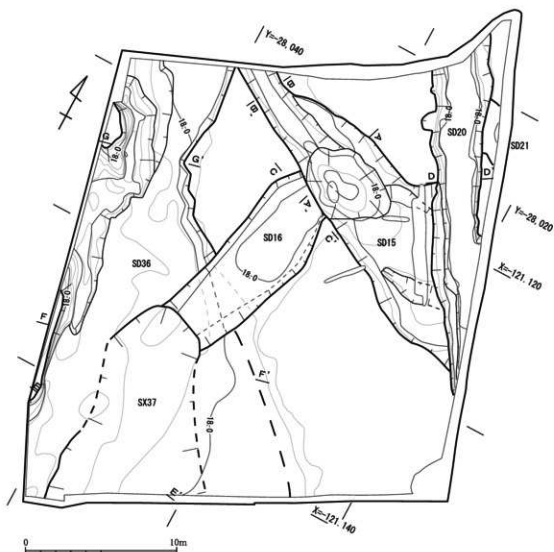
第19図 c3-2地区溝SD36断面図(S=1/50)



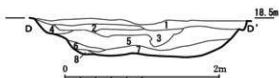
第20図 c2-2地区東断断面図(S=1/50)



第21図 c2-2・c3-1地区南壁断面図(S=1/50)



落ち込みS X37(第21・26・27図) S D36の埋没後に南半部の上層が削られた落ち込みに多量の遺物が西側から投棄されており、この落ち込みをS X37とした。S D36と同様に西側の肩の方が傾斜がきつく、東側は緩やかであることから、流路の一部である可能性が高い。埋土は明褐色粘質土を主体とする。南半部の西寄りでは平安時代後期の遺物がまよって出土した。



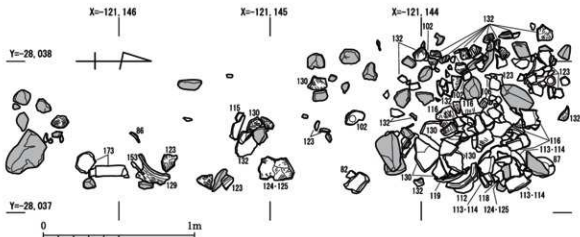
1. 灰白色礫混じり粘質土 2.5G78/1
2. 明オリーブ灰色礫混じり粘質土 2.5G77/1
3. 灰白色礫混じり砂質土 5G78/1
4. 明オリーブ灰色礫混じり粘質土 5G77/1
5. 明緑灰色シルト混じり砂礫 10G77/1
6. 灰白色砂 7.5Y7/2
7. 明褐色砂礫 7.5YR7/1
8. 明黄褐色粗砂 2.5Y7/6

第25図 c2-2地区溝S D20断面図(S=1/50)

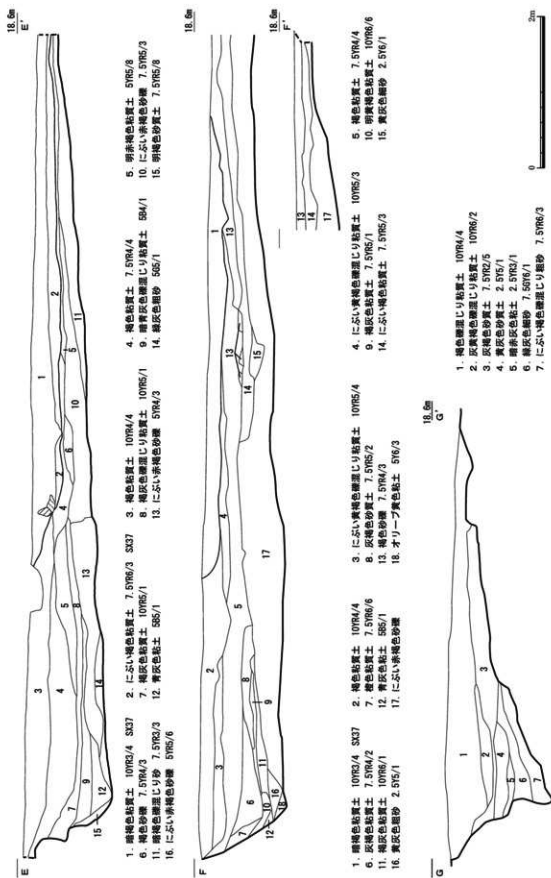
3. 出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱30箱の遺物が出土したが、その大半はS D36とS X37の出土遺物である。

流路S D36(第28～30図) 1は土師器皿である。平らな底部から短い口縁部がやや外反気味に立ち上がり、端部はわずかに折り返す。2～18は土師器杯である。2は外面の全面にヘラケズリを施すc手法であるが、他は口縁部にヨコナアを施すe手法である。平らな底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は外反した後、端部を小さく上方に積み上げるが、15は丸みを持った底部で、外反する口縁部の端部は丸く納める。2は底部外面に3条の焼成後の線刻が認められる。14は口縁部外面のヨコナアの下方に竹管状の刺突が並ぶ。e手法のものには器壁の薄いもの(3～6)と厚いものがある。16～18は高台を持つ平らな底部から16は直線的に、17・18は丸みを持って立ち上がり、口縁端部を小さく上方に積み上げる。16にはナデの弱い部分にハケが残る。19～26は須恵器杯である。19・20は口縁部が高台脇から直線的に立ち上がる。19の内面には重ね焼きの痕跡がみられる。21～26は回転ヘラ切りの底部からわずかに内湾して立ち上がる。27・28は須恵器蓋である。ヘラ切り未調整の平らな天井部から内湾した後、口縁端部は外に引き出して下方に短く屈曲し、尖り気味に納める。29～32は無釉陶器である。29は蛇の目高台からわずかに内湾して立

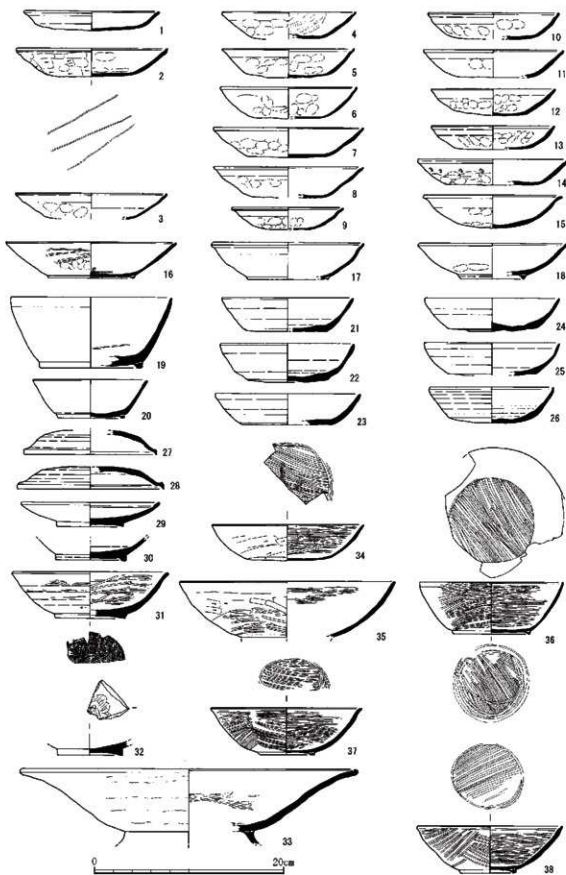


第26図 c3-1地区落ち込みS X37遺物出土状況図(S=1/25)

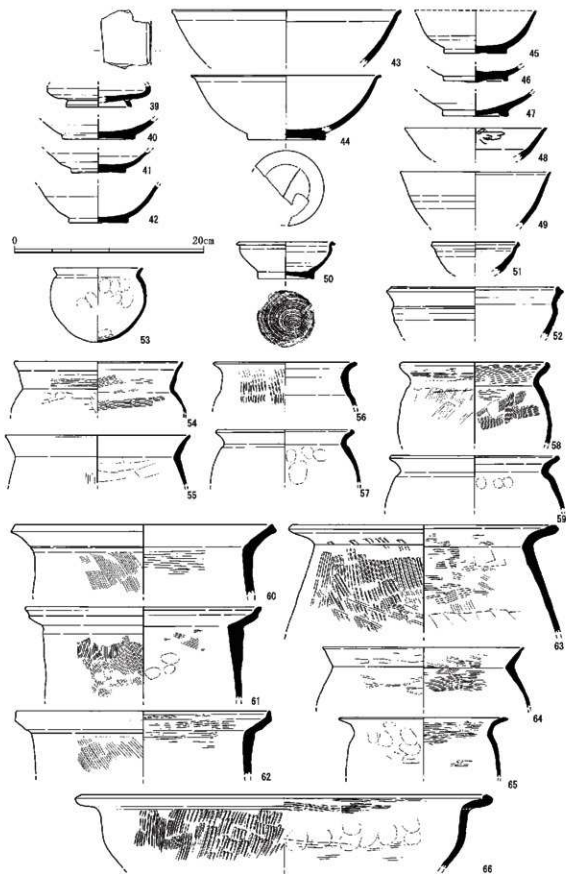


第27図 c3-1地区流路 S D36、落ち込み S X37断面図 (S=1/50)

ち上がり、口縁端部は丸く納める皿で、口縁部内端からやや下がった位置に1条の凹線をめぐらせる。内面の中央からずれた位置に重ね焼きの痕跡がみられる。暗灰色を呈し、焼成は硬質であるが、高台の厚い部分はやや焼成が甘くなっている。篠窯産とみられる。30は削り出し輪高台の碗である。底部外面の中央付近を除いて密なヘラミガキが施される。暗灰色を呈し、焼成は良好である。31はやや上げ底気味の平高台から内湾して立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。外面の全面にヘラケズリの後、底部外面を除く全面にヘラミガキを施す。底部外面に2条の焼成前の線刻がみられる。明褐色から灰白色を呈し、焼成は良好である。32は平高台で見込みに陰刻花文が施される。灰色を呈し、硬質である。33は土師器鉢である。「ハ」字形に開く高台を持つ平らな底部から内湾して立ち上がり、口縁部上半部は外反して、端部は上方に折り返す。内面はナデ調整を施すが、ナデが弱い部分にはハケメが残る。外面は指押さえて軽く調整するが、粘土紐の織目が明瞭に残る。34・35は黒色土器A類杯である。34は外面の全面にヘラケズリを施した後、底部に軽いナデ調整、口縁端部にヨコナデ調整を施す。内面は見込み全体にジグザグのヘラミガキを施した後、口縁部に隙間のない圏線ミガキを施し、さらに底部と口縁部に暗文を施す。内面は銀黒色、外面の口縁端部付近は黒色、それ以下はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。35は外面はヘラケズリを施した後、口縁端部にヨコナデ調整を施し、全面に粗いヘラミガキを施す。高台は欠損しているが、高台脇に施したと思われるヨコナデがみられる。内面は隙間のない圏線ミガキを施し、「V」字形の連続する刻み模様を2段に施す。内面は黒色、外面の口縁端部付近は黒色、それ以下はにぶい黄橙色～橙色を呈し、焼成は良好である。36～38は黒色土器B類碗である。36は平らな広い底部から口縁部がわずかに内湾して立ち上がり、端部は尖り気味に納める。口縁内端からやや下がったところに1条の沈線をめぐらせる。内面は見込みにジグザグのヘラミガキを密に施した後、口縁部に隙間のない圏線ミガキを施す。外面は高台付近まで隙間のない分割ヘラミガキを施す。底部外面はやや隙間のあるジグザグのヘラミガキを施した後、数周の圏線ミガキを施す。37・38は口縁部内面に1条の沈線をめぐらせる。内面は見込みに密なジグザグ状暗文を施した後、口縁部に密な圏線ミガキを施す。外面は密な分割ヘラミガキを高台付近まで施す。底部外面にヘラミガキは施さない。37・38はc3-2地区南端のピット54・56・57を検出した面で出土しており、SD36埋没後の遺物である。39～48は緑釉陶器である。39は耳皿で、ヘラ切り後、輪高台を貼り付ける。灰色を呈する硬質の胎土で、明黄緑色の釉を全面に掛ける。40～44は軟質で淡黄緑色～黄緑色の釉を全面に掛ける。44は蛇の目高台の中に線刻がみられる。45～48は硬質でオリーブ緑色～淡緑色の釉を掛ける。48の内面には陰刻花文が施される。46・47は篠窯産とみられる。49は越州窯製青磁碗である。口縁部はわずかに内湾し、端部は小さく外反する。内外面とも釉薬にムラが多く露胎の部分がある。50～52は須恵器鉢である。53～63は土師器甕である。53は小型甕で球形の胴部に短く外折する口縁部が付く。内外面とも磨滅しているが、器面の凹凸が少ないことから板ナデにより調整されていると思われる。口縁部が「く」字形に外折して尖り気味に納めるもの(54・55)、外反して丸く納めるもの(56)、「く」字形に外反して端部を内側に短く折り返すもの(57～59・63)、寸胴の体部から「ハ」字形に外折するもの(60～62)



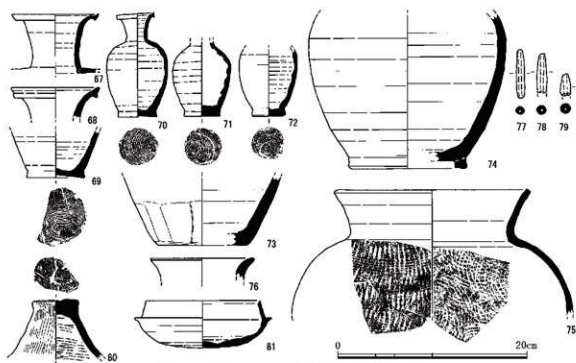
第28図 流路SD36出土遺物実測図(1)(S=1/4)



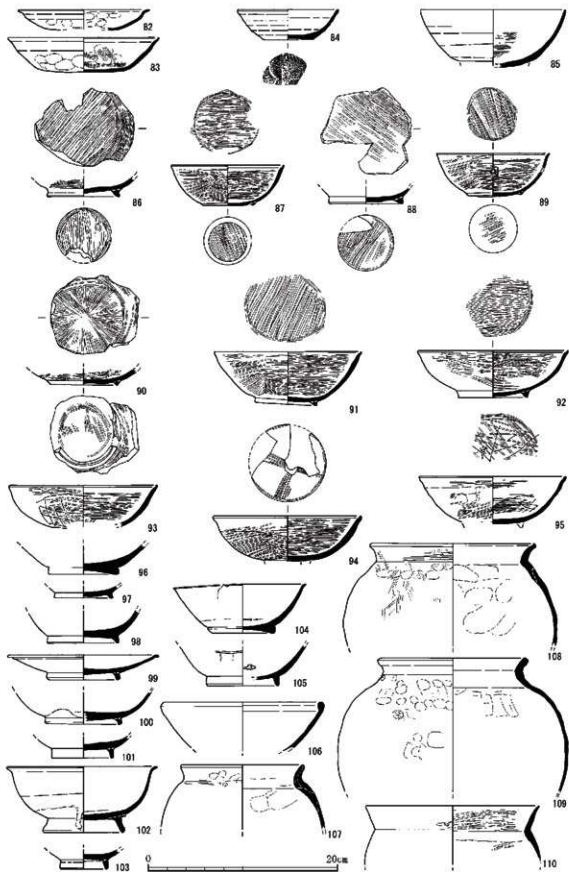
第29図 流路S D36出土遺物実測図(2)(S=1/4)

がある。64・65は黒色土器甕である。口縁部内面の横方向のヘラミガキのほか、64は体部内外面にもヘラミガキを施す。66は土師器鍋である。内面はハケ調整の後、体部上位にナデ調整を施す。体部外面は縦方向に粗いハケ調整を施す。67～75は須恵器壺である。74の高台脇には回転ナデの後に付いた布目痕跡が所々にみられる。76は緑釉陶器壺である。軟質で灰色の胎土に緑色を呈する釉を掛ける。77～79は土錘である。にぶい黄橙色～橙灰色を呈する。80は弥生時代中期の蓋形土器、81はTK10併行期の須恵器杯身である。

落ち込みSX37(第31～35図) 82は土師器皿である。口縁端部は外に引き出す。83は土師器杯、84は須恵器杯である。85は黒色土器A類碗である。回転台成形とみられる。86～95は黒色土器B類碗である。86～90は高台内にもジグザグ状のヘラミガキが施される。93は、外面に焼成後に付けられた斜格子状の線刻がみられる。94はジグザグ状の暗文を直交する2方向に施す。95は見込みに粗いジグザグ状の暗文を2方向に施した後、口縁部に密な圏線ミガキを施す。96～98は緑釉陶器である。96は暗灰色～橙灰色を呈する硬質の胎土に全面にオリブ灰色の釉を掛ける。97は淡褐色を呈する硬質の胎土に淡黄緑色の釉を掛ける。削り出し輪高台で畳付以下は露胎である。篠窟産とみられる。98は見込みに1条の沈線がめぐる。焼成が悪く、軟質で黒色土器のような素地である。淡緑色の釉を全面に掛ける。高台内にトチンの痕跡がみられる。99は灰釉陶器皿、100～103は灰釉陶器碗である。99・100は三日月高台から緩やかに立ち上がり、口縁端部は外反する。見込みに灰釉が刷毛塗りされ、直接重ね焼きの痕跡が残る。深碗の102は口縁部にのみ灰釉を塗り付けにしているが、103は見込みに厚い釉が掛かる。104・105は越州窯系青磁碗である。104は粗製で、やや上げ底状の平高台からわずかに丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端に刻みを入れ、輪花とする。露胎部は紫灰色を呈する。内面に目跡が残

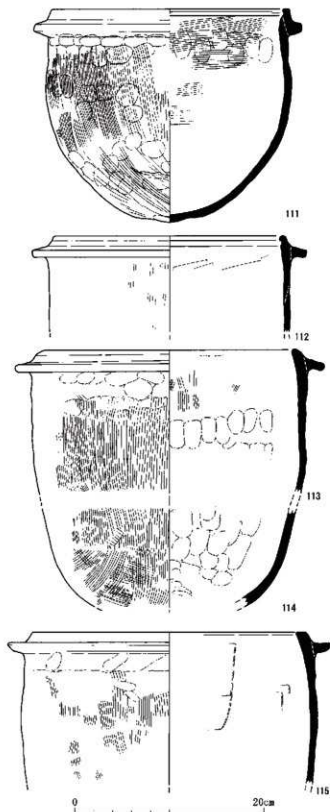


第30図 流路SD36出土遺物実測図(3)(S=1/4)



第31図 落ち込みS X37出土遺物実測図(1)(S=1/4)

る。105は精製で、畳付以外の全面に施軸する。体部をヘラで押して輪花としている。106は篠窟産の須恵器鉢である。107～109は土師器甕、110は黒色土器甕である。111～118は寸胴の土師器



第32図 落ち込み S X37出土遺物実測図(2)(S=1/4)

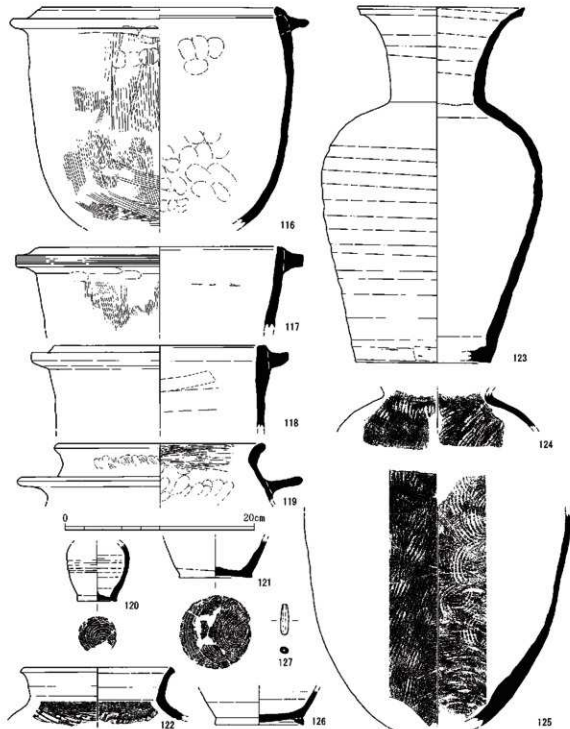
羽釜である。胴部外面に縦方向の粗いハケ調整を施す。119は「く」字形に外反する口縁部と長い鐙を持つ羽釜である。暗茶褐色の胎土で河内産とみられる。120～125、128～133は須恵器壺・甕、126は灰釉陶器壺である。124・125、129・130、132・133は接合しないが同一個体である。127は土錘である。色調は淡橙灰色を呈する。134は灰釉陶器平瓶である。灰白色の胎土で、体部外面にていねいな回転ヘラケズリを施し、肩部以上に厚い灰釉を掛ける。天井部には多数の火彫れがみられる。把手はヘラでいねいに面取りしている。破片の一部が S X37 から出土していることから S X37 出土遺物に含めたが、大半は S D36 から出土している。

溝 S D 16 (第36図) 135は土師器皿である。136は無釉陶器碗、137は緑釉陶器碗である。137は硬質で暗青灰色を呈する胎土に淡黄緑色の釉を掛ける。篠窟産である。138は土錘である。色調はにぶい橙色であるが、一部は灰黒色を呈する。

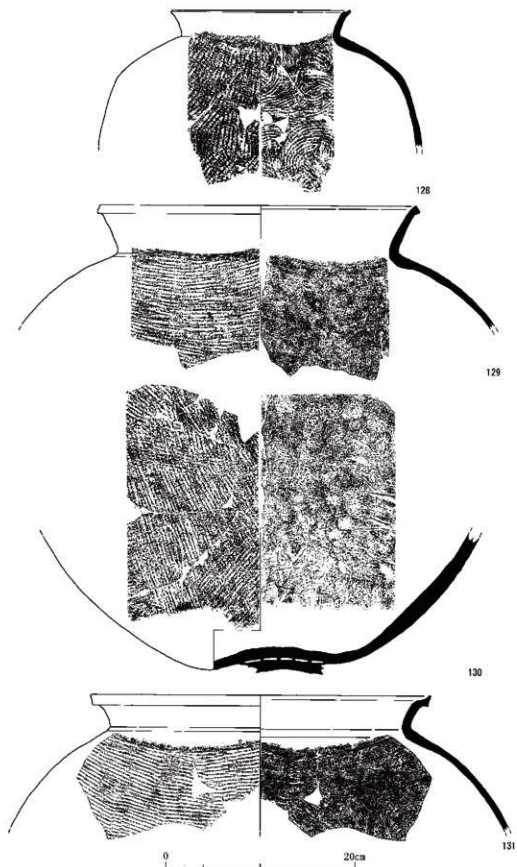
溝 S D 50 (第36図) 139～143は土師器皿である。139・140は「て」字状口縁の土師器小皿である。144・145は近江産の緑釉陶器碗である。144は大きく内湾して立ち上がり、外反する口縁部を輪花に作る。内外面とも回転ナデ調整を施し、濃緑色の釉を外全体に掛ける。貼付段高台の畳付から高台内も一部に緑釉が掛かる。145は硬質で淡青

灰色を呈する胎土に灰オリーブ色の釉を全面に掛ける。底部外面には回転糸切り痕がみられ、見込みには1条の圈線をめぐらせる。146・147は黒色土器B類碗である。見込みにはジグザグ状の暗文を施すが、147は2方向に重ねて施している。148は土師器甕である。体部外面は指押さえて調整するが、粘土接合痕が残る。体部内面は工具によるナデでていねいに仕上げている。口縁部はヨコナデ調整を施すが、内面には横方向のハケ目が残る。

溝S D30 (第36図) 149は桶葉型瓦器碗である。内面は粗い圈線ミガキの後、見込みに螺旋状



第33図 落ち込みS X37出土遺物実測図(3) (S=1/4)



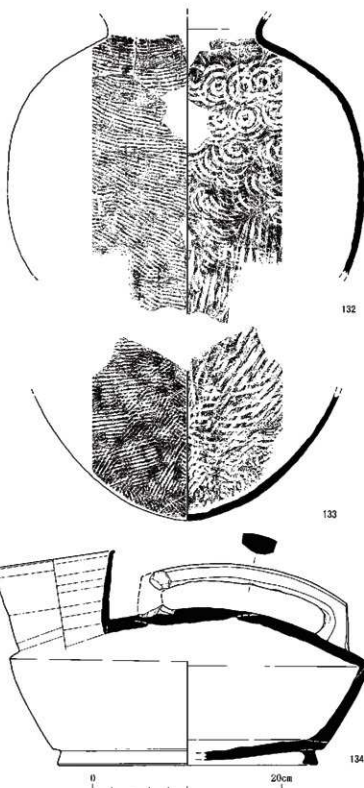
第34図 落ち込み S X 37出土遺物実測図(4)(S=1/4)

暗文を施す。外面はヘラミガキを施さない。150は土師器羽釜である。

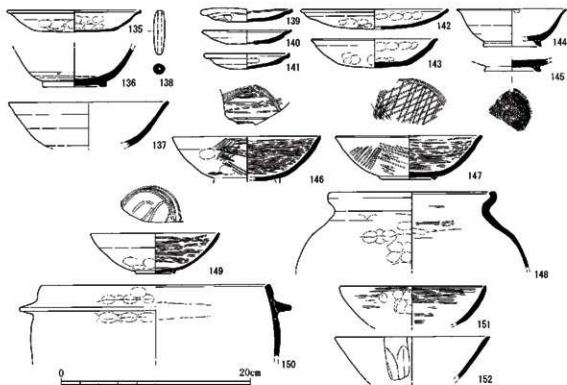
包含層(第36図) c2-1地区の第1遺構面から第2遺構面への掘下げ中に出土した遺物である。151は楠葉型瓦器碗である。内外面に密なヘラミガキを施す。152は竜泉窟系青磁碗である。

金属製品(第37図) 153・154は鉄製品である。153は頭部を短く折り曲げている。先端は丸く納めている。クサビかと思われる。S X37から出土した。154はヤリガンナと思われる。S D36から出土した。155は煙管の吸口である。筒内に羅字が残っている。全面に緑青が吹いている。第1遺構面より上層から出土した。156は耳環である。全体に剥離し、緑青が吹いている。S X37から出土した。

錢貨(第38図) 157は承和昌寶(835年初鑄)である。重さ1.2gを測る。S D36から出土した。158は天禧通寶(1017年初鑄)、159は皇宋通寶(1038年初鑄)、160は熙寧元寶(1068年初鑄)、161は元祐通寶(1085年初鑄)である。158はc2-1地区第2遺構面の精査中に、159はS K28から、160はS K23から、161はS D20から出土した。162~165は寛永通寶である。162は古寛永、他は新寛永である。162・163はc3-1地区の遺構面直上層から、164・165はc2-1地区第1遺構面より上層から出



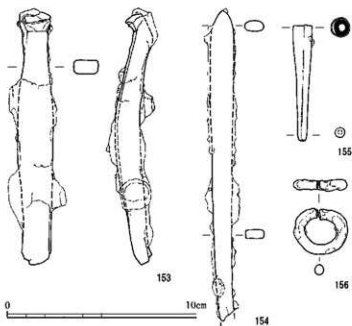
第35図 落ち込みS X37出土遺物実測図(5)(S=1/4)



第36図 溝 S D 16・30・50・55、包含層出土遺物実測図(S=1/4)

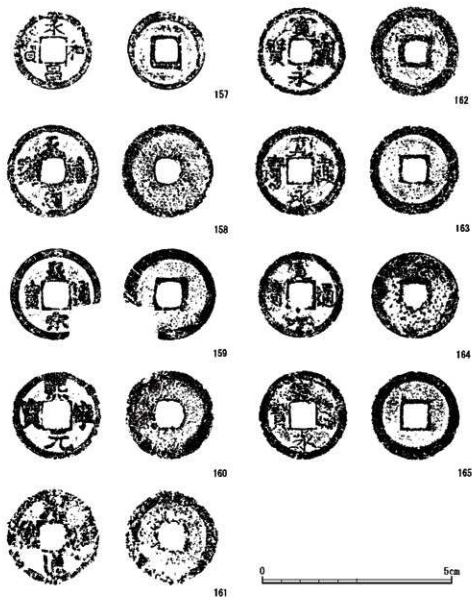
土した。

石製品(第39図) 166は基礎の部材と考えられる凝灰岩片である。3面に加工痕が認められるが、最も広く残っている面にノミによるていねいなケズリが施される。S D 36から出土した。S D 36からは他にも凝灰岩の小破片が多数出土している。167は太型蛤刃石斧である。c2-1地区の表土掘削中に出土した。

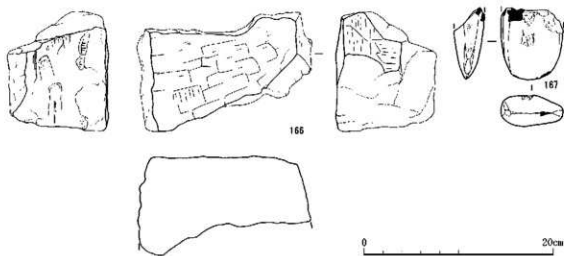


第37図 金属製品実測図(S=1/2)

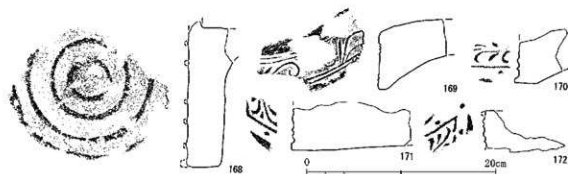
瓦(第40図) 168は三重圓文軒九瓦である。外縁、圓線文ともに、ほとんど欠失している。瓦当は厚い。169~172は唐草文軒平瓦である。169は曲線型で、瓦当面の外区は二重圓線がめぐる。凹面側が被熱により赤変している。平城宮6663E型式と同型である。170は下内縁に珠文がめぐる。凹面は欠損しているが、凹面に近い側が赤変している。171は瓦当左下端部寄りの破片である。下内縁に珠文がめぐる。側面・凸面にヘラケズリを施す。172は瓦



第38図 銭貨実測図(S=1/1)



第39図 石製品実測図(S=1/4)



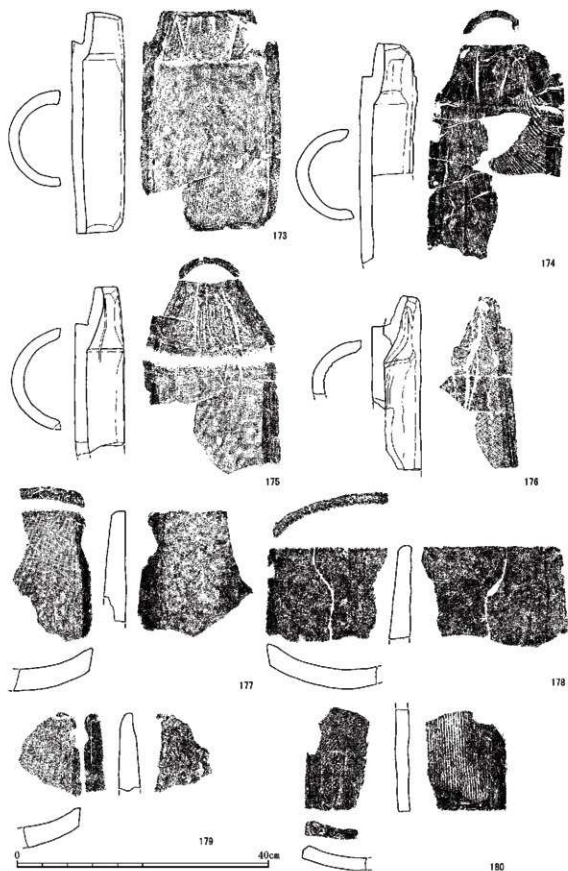
第40図 軒瓦実測図(S=1/4)

当右上端部の破片。脇内縁に珠文がめぐる。側面・凸面にヘラケズリを施す。173～176は丸瓦である。173は外面は縦方向の板ナデ、内面はコビキ痕と布目痕が残るが、筒部端側ほど、コビキが良く残る。凹面側縁の面取りの幅が小さい。凹面筒部端縁を面取りする。段部の粘土貼り足しは小さい。凸面玉縁寄りには横方向のナデ調整。筒部端面寄りには調整が弱く、コビキ痕跡が残る。174～176は凹面側縁と玉縁側縁に比較的幅の広い面取りを施し、段部は粘土貼り足しにより成形している。いずれも凸面が被熱により赤変し、炭化物が付着するものもある。174は凹面のほぼ全面にコビキ痕跡が残る。175はほぼ全面に残る布目痕跡の下にコビキ痕跡がかるうじて認められる。177～180は平瓦である。177～179は凹面から狭端面まで一連の布目残り、凹面の側縁部から側面にかけてヘラケズリを施す。凸面は縦方向に幅の広いヘラケズリを施すが、狭端部に近いほど、ケズリが粗く布目痕跡が残る。暗灰色を呈し、焼成はやや甘い。180は凹面にコビキ痕、布目痕がみられ、側縁から側面にかけてはナデ調整を施す。凸面は縄タタキの後、広端部付近に横方向のヘラケズリを施す。灰黑色を呈し、焼成は良好である。他に比べて薄い。169はS D15から、173・174はS X37から、その他はS D36から出土した。

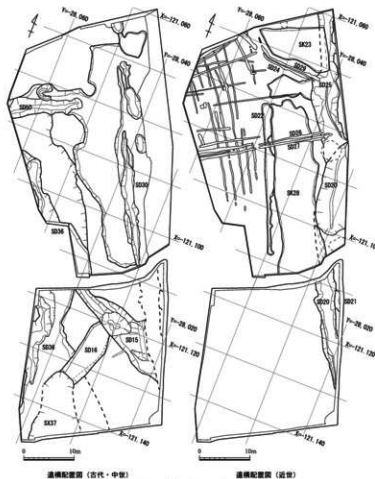
4. まとめ

長岡京跡右京第968次調査では、古代・中世の遺構と近世の遺構を検出した。その変遷は第42図に示すとおりである。

古代においては、平安時代前期～中期にかけてのS D36を調査地西端に沿うように検出した。S D36は強い流水による洗掘によって、攻撃斜面にあたる西屑は急傾斜面を形成し、一部ではほぼ垂直に切り立つ崖面を成している。しかしながら、S D36上層の砂質土や粘質土が優越する堆積状況や出土遺物が比較的良く接合することなどから、S D36が常に速い流れを保っていたと考えすることはできない。S D36の上層は徐々に堆積が進み10世紀中葉頃までには埋没するが、その過程で調査区南端部付近には多量の遺物が投棄された。その後、流れによる洗掘で抉られた落ち込みS X37が形成され、ここにも西側から多量の遺物が投棄された。遺物が多量に出土する場所はS D36とS X37が変わりはなく、投棄場所がほぼ決まっていたことが窺われる。この頃、埋没したS D36の上面に小規模な建物が建てられた可能性がある。S X37と同様に洗掘によって形成



第41図 丸瓦・平瓦実測図(S=1/6)



第42図 遺構変遷図(S=1/750)

恵器壺・甕類には大型品が多く、なかでも、灰軸平瓶は最大径38cmを測る巨大なもので、類例を知らない。猿投窯に特注した製品とみて良いであろう。これらの遺物構成から、調査地の西側に広がる段丘上に壇上積基壇を備えた未知の古代寺院が存在した可能性を考慮する必要があるだろう。長岡京期の遺物は少なく、9世紀中頃からの遺物を主体とすることから、平安時代前期には存在したことがわかるが、その創建時期は、軒瓦などからみて長岡京期に遡る可能性も考えられる。廃絶時期はS X 37に多量の遺物が一括投棄される時期を最後に遺物がほとんどなくなることから、11世紀中頃とみることができる。

(森島康雄)

- 注1 「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(「京都府遺跡調査概報」第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
 注2 「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査概報」第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
 注3 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
 注4 注3に同じ。
 注5 「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(「京都府遺跡調査報告集」第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
 注6 「平成20年度発掘調査略報 12. 長岡京跡右京第946次」(「京都府埋蔵文化財情報」第108号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

された溝と考えられるS D16・15・50もS X37と同様に11世紀前半には埋没し、流路となる部分は東側に後退して、鎌倉時代にはS D30が形成される。これもS D36と同様に西側が急な傾斜面もしくはオーバーハングを成しており、洗掘によって形成されたと考えられる。近世になると流路はさらに西側になり、S D25・20などが調査区東端に形成される。この頃には流路の西側は耕作地となったようである。

ところで、S D36・S X37から多量の緑釉陶器・灰軸陶器のほか、瓦・凝灰岩片・越州窯系青磁碗・銭貨(承和昌寶)などが出土したことは特筆される。須

圖 版



大谷口遺跡全景<右後方に池上遺跡>(北西から)



(1)大谷口遺跡遠景<左後方に室橋遺跡> (東から)



(2)大谷口遺跡遠景<右後方に諸畑遺跡> (西から)



(1) 大谷口遺跡全景(南から)



(2) 1・2区近景(西から)



(1) 1区全景(上が北西)



(2) 1区全景(南西から)

(1) 1・2区調査前全景(南から)



(2) 土壌S K102(北西から)



(3) 土壌S K103(東から)





(1) 竪穴式住居跡 S H101 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H101竈 (南東から)

(1) 竪穴式住居跡 S H101 竈前庭
遺物出土状況(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H101
遺物出土状況(上が北西)



(3) 竪穴式住居跡 S H101 竈
断ち割り(南から)





(1) 1区東部全景(北西から)



(2) 掘立柱建物跡SH104
(北西から)



(3) 1区南壁土層断面(西から)



(1) 2区全景(南西から)



(2) 2区全景(北西から)



(1) 土坑 S K 203 (北西から)



(2) 土坑 S K 203 遺物出土状況
(南から)

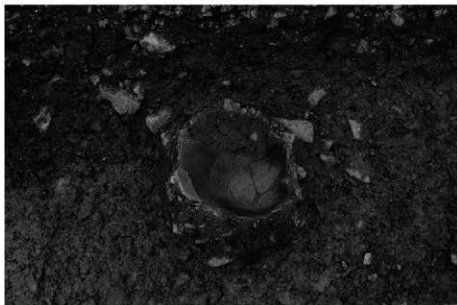


(3) 土坑 S K 222 遺物出土状況
(南から)

(1)土坑S K 206(南から)



(2)土坑S K 206遺物出土状況
(上が北西)



(3)竪穴式住居跡S H 201 (南から)





(1) 掘立柱建物跡 S B209 (南から)



(2) 2区南部柱穴群検出状況
(北西から)



(3) 2区北壁土層断面 (南西から)



(1) 3・4区全景<後方に官山川・諸畑遺跡> (西から)



(2) 3区全景(上が北東)



(1) 3区全景<下層遺構面>
(北西から)



(2) 3区南部遺構検出状況(北から)



(3) 竪穴式住居跡S H316(西から)

(1) 柱列 S A315(南東から)



(2) 土壇 S K312(南東から)



(3) 土坑 S K302(南東から)





(1) 3区東壁南部土層断面(西から)



(2) 土坑 S K314(南西から)



(3) 3区全景<上層遺構面>
(北西から)

(1) 竪穴式住居跡 S H301
(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H301
遺物出土状況(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H301台石
出土状況(南西から)





(1) 4区全景(上が北東)



(2) 4区全景(南東から)

(1)土坑S K 404(東から)



(2)掘立柱建物跡S B 403
(南西から)



(3)掘立柱建物跡S B 403柱穴P 7
(北西から)





(1) 竪穴式住居跡 S B402(西から)



(2) 竪穴式住居跡 S B402竈
(西から)



(3) 炉跡 S X407 <南部拡張前>
(北西から)



(1) 伊跡 S X 407、落ち込み S X 410
(北東から)



(2) 伊跡 S X 407(北西から)



(3) 伊跡 S X 407断ち割り
(北東から)



(1) 炉跡 S X407、落ち込み S X410
(南東から)



(2) 落ち込み S X410遺物出土状況
(北東から)



(3) 掘立柱建物跡 S B401
(北東から)



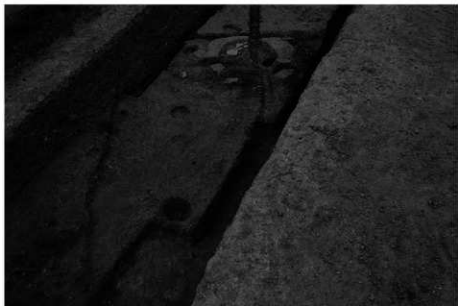
(1) 5・6区調査前全景(南から)



(2) 5区全景(北西から)



(3) 5区南部遺構検出状況
(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H504
(南東から)



(2) 柱穴 S P506遺物出土状況
(東から)



(3) 落ち込み S X505(北西から)



(1) 6・7区近景(南東から)



(2) 6区全景(上が南西)



(1) 6区南部遺構検出状況土層断面
(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H603
(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H603
遺物出土状況(北東から)

(1) 土坑 S K 607(上が北東)

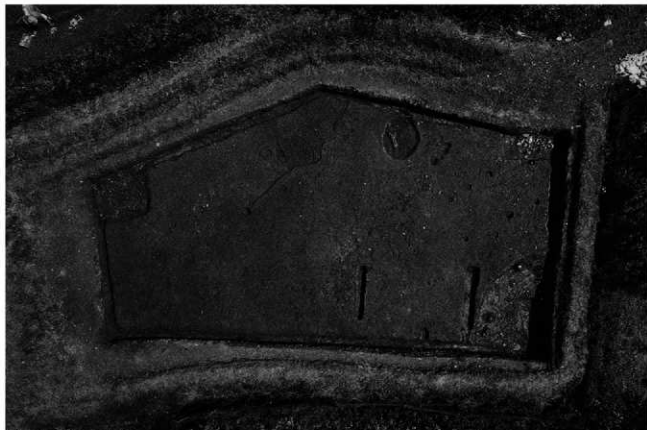


(2) 5区東壁土層断面(南西から)



(3) 6区西壁土層断面(北東から)





(1) 7区全景(上が北東)

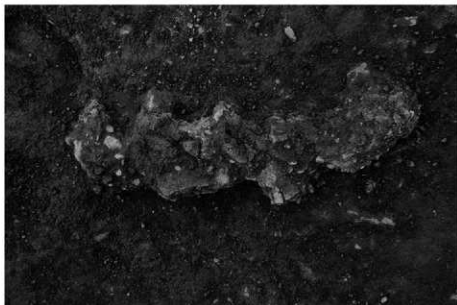


(2) 7区全景(南東から)

(1)土坑S K703(南西から)



(2)土坑S K703遺物出土状況
(上が北西)



(3)竪穴式住居跡S H701
(北西から)





(1) 7区東壁土層断面(南西から)



(2) 集石遺構 S X704(南西から)



(3) 作業風景<1区>(北東から)



7



13



91



95



77



44



96



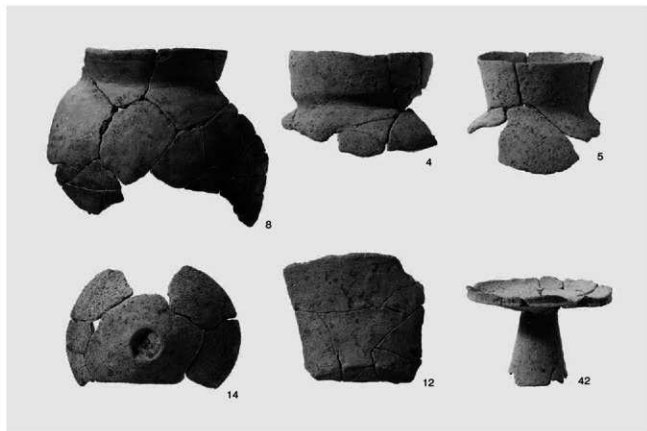
11



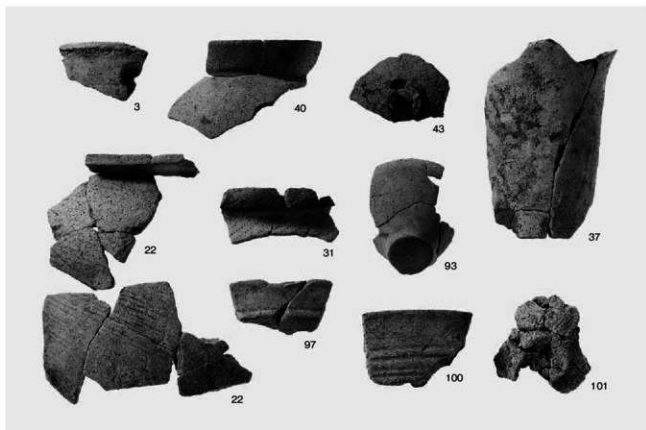
96



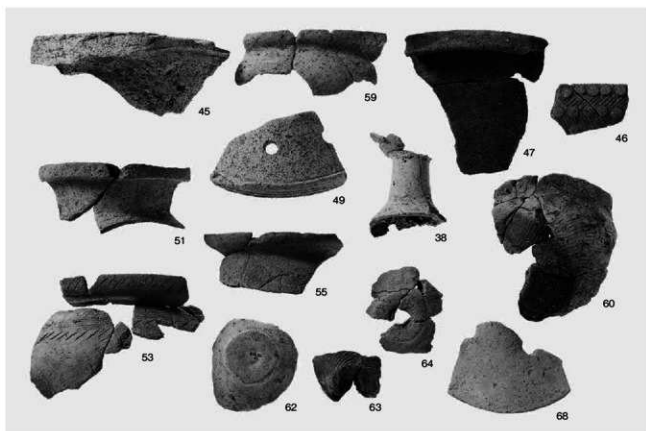
(1) 出土遺物 2



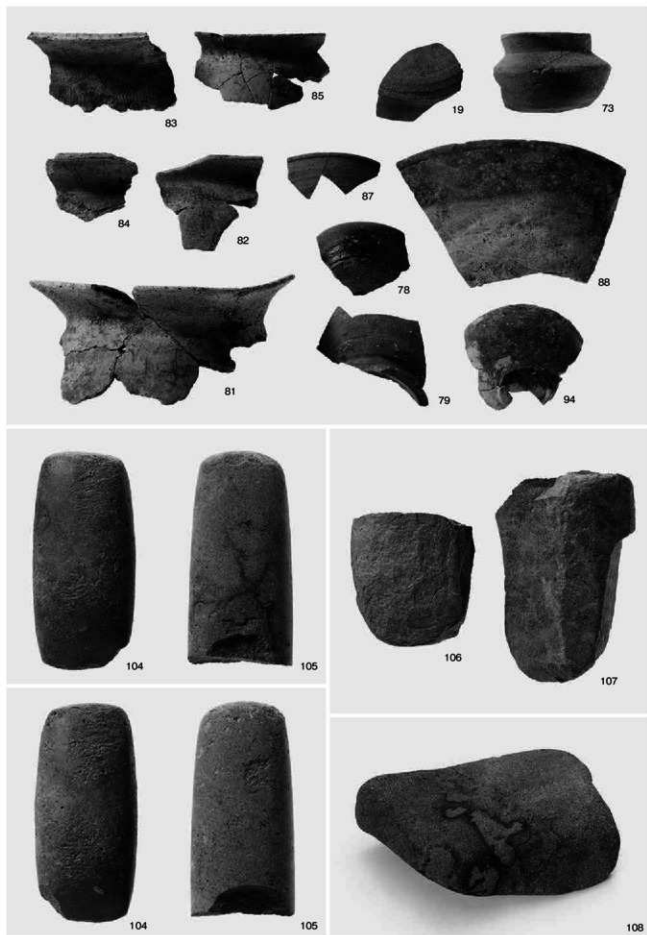
(2) 出土遺物 3



(1) 出土遺物 4



(2) 出土遺物 5



(1) D2・E2地区全景(南から)



(2) D2・E2地区全景(東から)



(3) D2地区全景(北西から)





(1) D 2 地区柱穴 S P 115
遺物出土状況(北西から)



(2) E 2 地区全景(南から)



(3) E 2 地区遺物出土状況(東から)

(1) H地区全景(北から)



(2) H地区土坑S K01全景(西から)



(3) H地区土坑S K22全景(北から)





(1) I地区全景(南から)



(2) I地区(南調査区)南半全景
(北から)



(3) I地区(南調査区)北半全景
(南から)

(1) 1地区(北調査区)全景
(南西から)



(2) 1地区(北調査区)北部柱穴群
検出状況(北東から)



(3) 1地区(北調査区)土坑S K74
検出状況(西から)

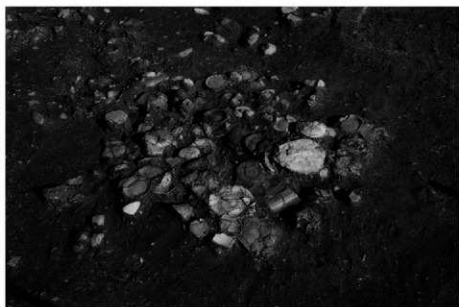




(1) I地区(北調査区)土器溜まりA
群全景(西から)



(2) I地区(北調査区)土器溜まりB
群全景(西から)



(3) I地区(北調査区)土器溜まりC
群全景(西から)

(1) I 地区(北調査区)土器溜まりD
群全景(南東から)

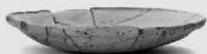


(2) I 地区(北調査区)土器溜まりE
群全景(東から)



(3) I 地区(北調査区)土器溜まりC
～F群全景(東から)





123



173



365



186



166



372



225



300



276



327



186



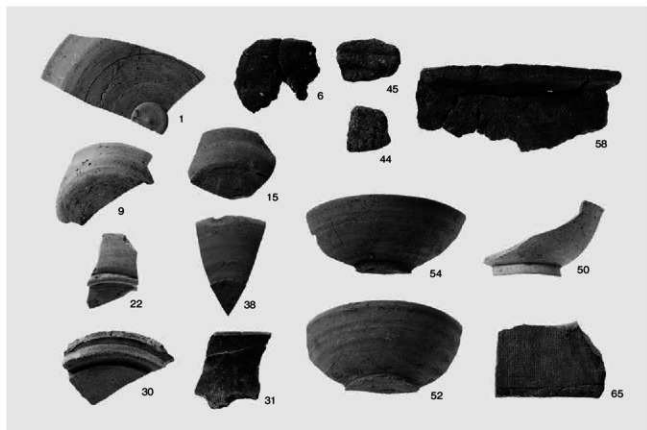
219



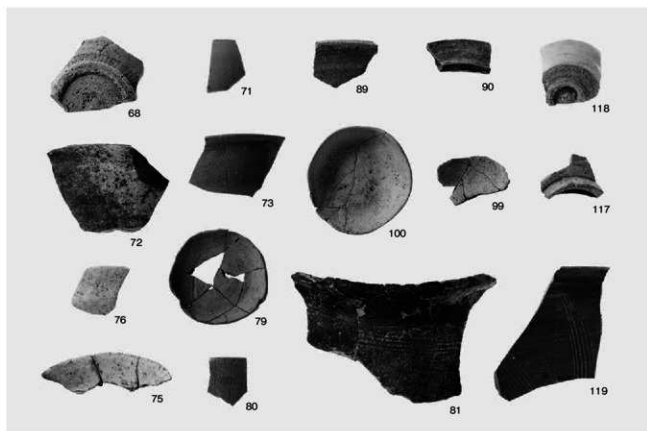
393



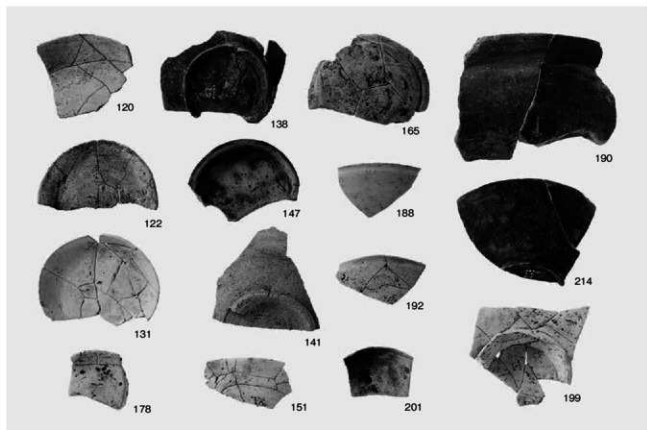
393



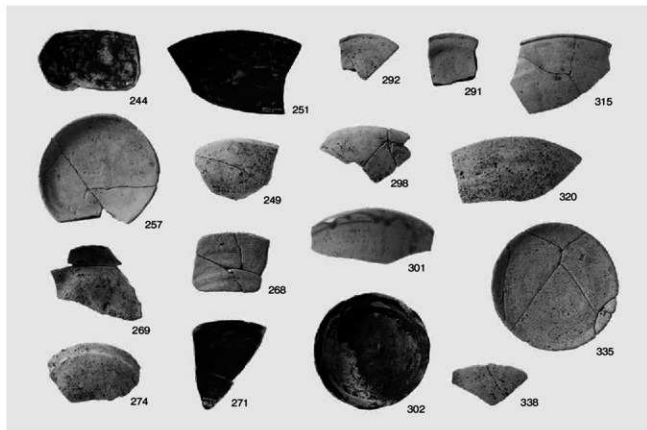
(1) 出土遺物 2



(2) 出土遺物 3



(1)出土遺物 4



(2)出土遺物 5

(1) 調査前状況(北から)

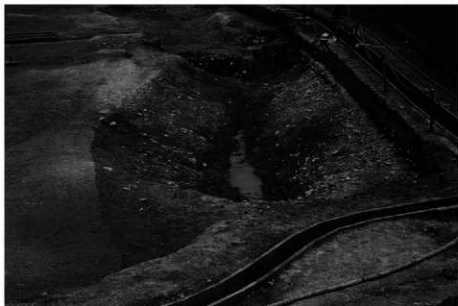


(2) c2-1地区第1遺構面全景
(上が北東)



(3) c2-1地区第1遺構面全景
(南東から)





(1) c2-1地区第1遺構面S D20
全景(南東から)



(2) c2-1地区第1遺構面S D20畦
(南から)



(3) c2-1地区東壁S D20断面
(西から)

(1)c2-1地区第1遺構面S D25
断面(南東から)

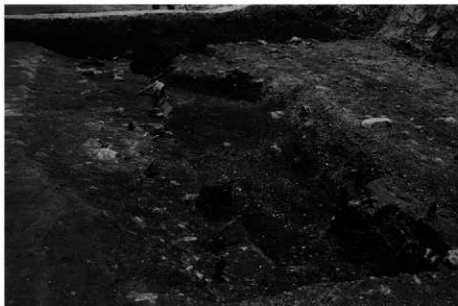


(2)c2-1地区第2遺構面全景
(南東から)



(3)c2-1地区第2遺構面S D30
全景(北から)





(1) c2-1地区第2遺構面S D30
護岸杭近景(南から)



(2) c2-1地区第2遺構面S D30
断面(北西から)



(3) c2-1地区第2遺構面S K34
全景(南東から)

(1) c3-2地区第1遺構面全景
(上が北東)



(2) c3-2地区第1遺構面全景
(南東から)



(3) c3-2地区第1遺構面北部全景
(南東から)





(1) c3-2地区南壁(北西から)



(2) c3-2地区第1遺構面S P54
断面(北西から)



(3) c3-2地区第1遺構面S P57
断面(北西から)

(1) c3-2地区第2遺構面北部全景
(南東から)



(2) c3-2地区第2遺構面南部全景
(北西から)



(3) c3-2地区第2遺構面南部全景
(南東から)





(1) c3-2地区 S D36全景(北西から)



(2) c3-2地区 S D36断面(北西から)



(3) c3-2地区 S D36断面(南東から)

(1) c3-3地区第1遺構面全景
(上が北東)



(2) c3-3地区第2遺構面全景
(南東から)



(3) c3-3地区第2遺構面 S D50
断面(北東から)





(1) c2-2地区全景(上が北東)



(2) c2-2地区全景(南東から)



(3) c2-2地区S D 20断面(南東から)

(1)c2-2地区 S D15全景(北西から)



(2)c3-1地区全景(上が北東)



(3)c3-1地区 S D36断面(南東から)





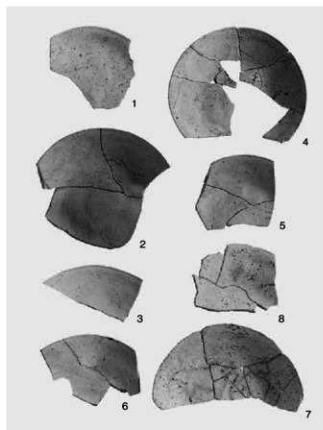
(1) c3-1地区 S D36断面(南東から)



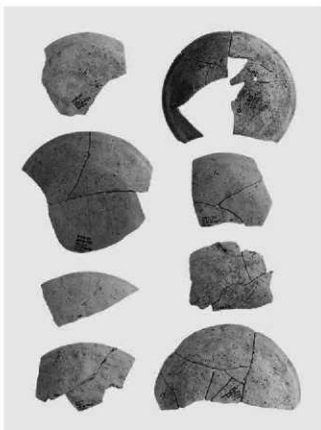
(2) c3-1地区 S X37遺物出土状況
(北から)



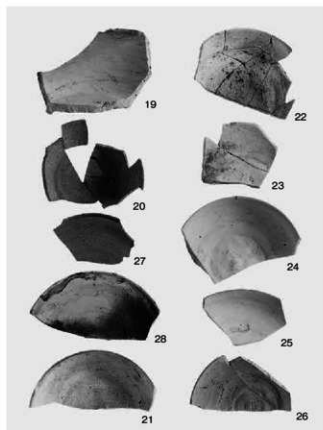
(3) c3-1地区 S X37遺物出土状況
(東から)



(1)出土遺物1(SD36)



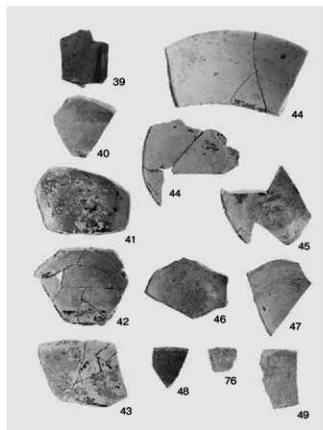
(2)出土遺物2(SD36)



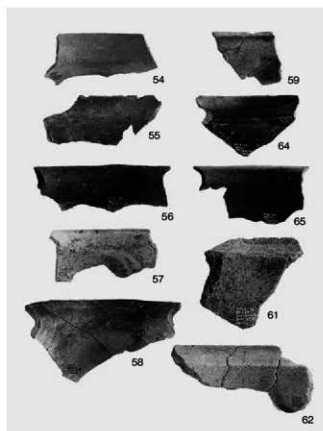
(1) 出土遺物 3 (S D36)



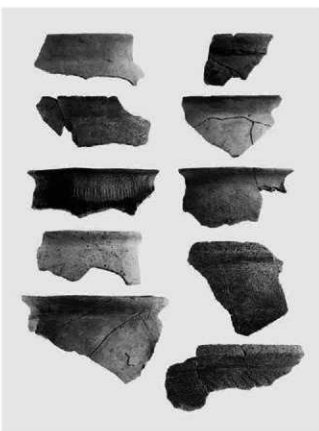
(2) 出土遺物 4 (S D36)

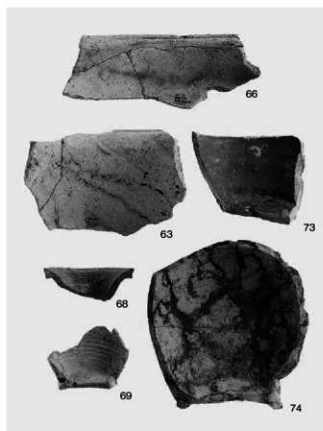


(1) 出土遺物 5 (S D36)

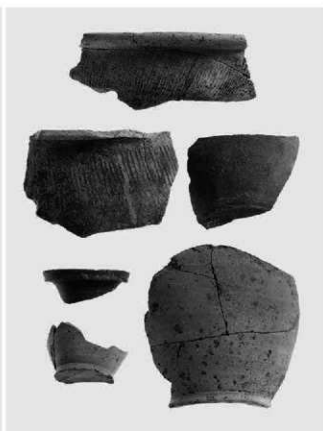


(2) 出土遺物 6 (S D36)

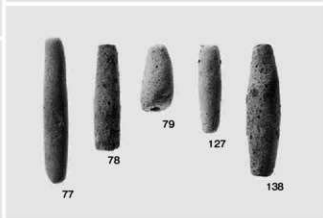


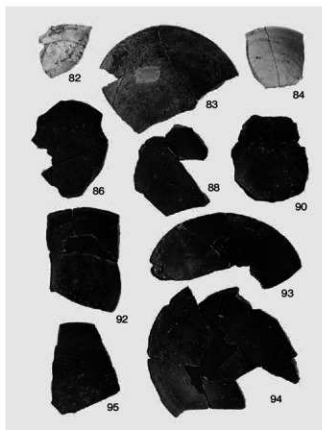


(1)出土遺物7(S D36)

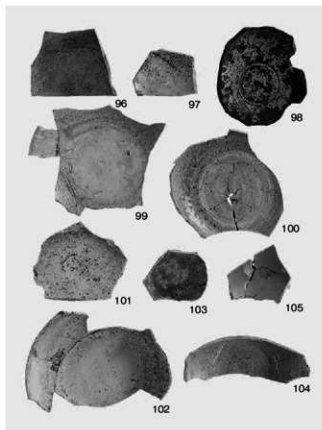


(2)出土遺物8(S D36・S X37・S D16)



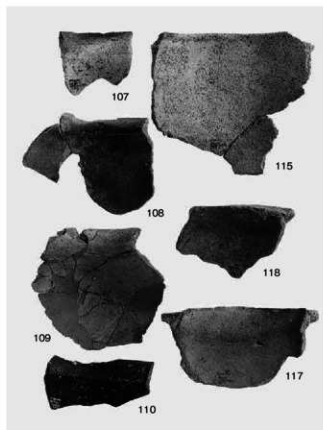


(1) 出土遺物9 (S X37)

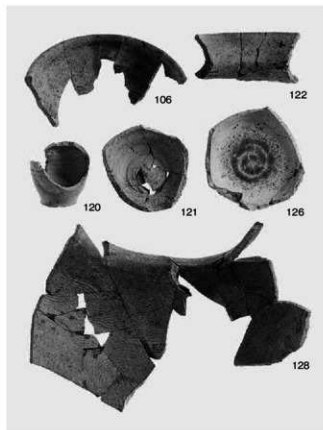


(2) 出土遺物10 (S X37)

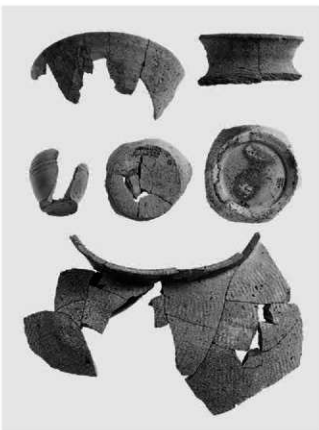


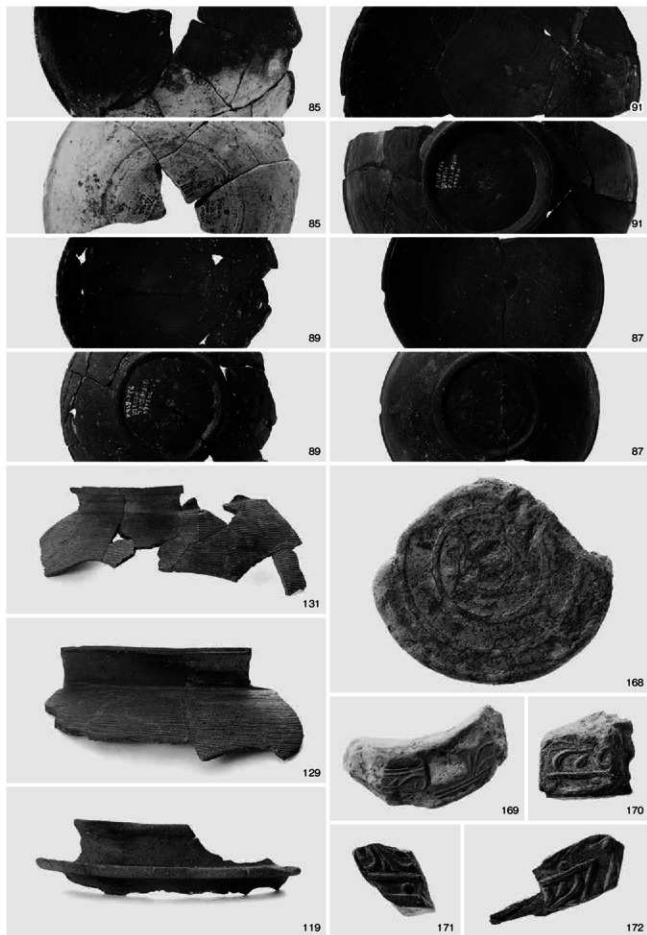


(1) 出土遺物11(S X37)

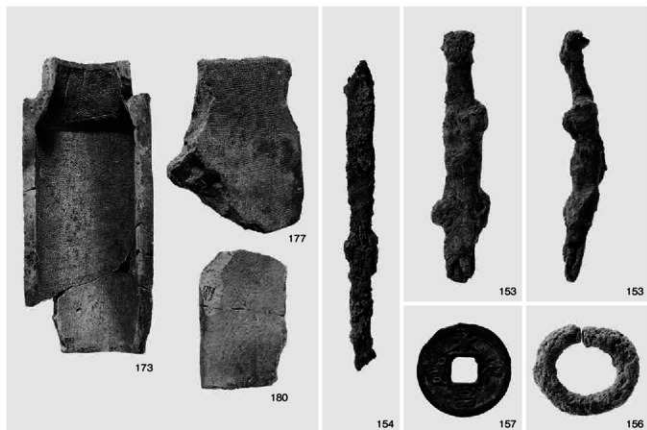


(2) 出土遺物12(S X37)





出土遺物13(S X37・S D15・S D36)



(1) 出土遺物14(S D36・S X37)



(2) 出土遺物15(S X37)

長岡京跡右京第968次	集落跡 集落跡	平安 中世 近世	流路・落ち込み状遺構 流路 流路	土師器・須恵器・黒色土器・ 緑釉陶器・灰釉陶器・中 国製陶磁器・瓦・凝灰岩・ 銭貨 土師器・瓦器碗・銭貨 陶磁器・銭貨	近傍に未知の古 代寺院が存在す る可能性あり
所収遺跡名		要 約			
大谷口遺跡第5次	大谷口遺跡は縄文時代から中世にかけての複合集落遺跡であり、弥生から奈良時代の竪穴式住居跡、古墳時代中期から鎌倉時代の掘立柱建物跡のほか、土坑・柱穴を検出した。特に今回の調査では5世紀の早い段階の導入期の竈をもつ竪穴式住居跡を新たに検出した。				
蔵垣内遺跡第12次	縄文時代早期の押型文土器が包含層から出土するとともに、奈良時代と鎌倉時代のビット、土坑、溝などを検出する。特に、鎌倉時代の鉄器の出土は注目される。隣接して丹波国分寺が所在しており、同寺との関連が想定できる。				
長岡京跡右京第968次	平安時代～近世にかけての流路跡を調査した。特に、平安時代の流路跡・落ち込み状遺構からは多種多量の遺物が出土しており、瓦や凝灰岩、越州窯製の陶磁器の出土など、一般集落とは異なり、古代寺院が周囲に存在した可能性が認められる。				

京都府遺跡調査報告集 第 141 冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141